やはり俺の青春にデジモンが居て、俺がDATS隊員なのはまちがっているのか？（リメイク版）

ステルス兄貴

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

デジタルモンスター・通称デジモンが人々の周りに当たり前の様に存在してから、２０年以上の歳月が経った。

デジモンは人々に身近な存在となった。

しかし、中にはデジモンを使い悪事を働く者、人間界とデジタルワールドに害をなすデジモンも存在する。

そんなデジモンに関連する犯罪を専門とする組織、ＤＡＴＳ。

これはそんなＤＡＴＳに所属する腐り目な高校生、比企谷八幡とその仲間たちの物語。

目次

1話 1
2話 11
3話 20
4話 28
5話 37
6話 47
7話 57
8話 65
9話 74
10話 84
11話 94
12話 102
13話 111
14話 120
15話 130
16話 139
17話 148
18話 157
19話 167
20話 176

1話

デジタルモンスター：通称デジモン。
それは「デジタルワールド」と呼ばれるコンピュータネットワーク上の擬似電脳空間に生息する人工知能を持った架空の生命体の名称である。
彼らは様々な属性や世代に分かれており、その姿は現実の世界に存在する動植物、機械、人型や突然変異等を模した多様な種族が存在する。
デジモンの身体は、細胞核のような要素を持つデジコア（電脳核）、その情報を元に構成される骨格であるワイヤーフレームと皮膚であるテクスチャから構成されている。
デジモンは主にデジタルワールド上の食物を食べて生活し、さらにはネット内の様々なデータやプログラムも吸収し餌としている。また、デジモンの生命活動を維持するためには電気が必要であり、これは人間で言う酸素に相当する。
しかし、地球上に存在する場合、デジモンは人間と同じモノを飲食する。
当然、その場合は飲食をするので、通常の生物と同じく排泄もする。
デジモンは現実の生物と同じように卵（デジタマ）から誕生し、デジヴァイスの外へ出している時、病気や怪我などの外的要因が原因で死亡する事もある。
数多くの種類が存在するデジモンであるが、人間同様色んな性格を持ち、大人しい気性のデジモンもいるが、基本的に野生のデジモンは野生動物と同じく、野生の本能による闘争心が強い傾向のある種族である。
そして、彼らの最大の特徴は生物が長い年月を重ねて得る進化と言う現象を短時間で行う事が出来、また進化の反対の現象である退化と言う現象を同時に行う事が出来る。
更にデジモンには大きく分けて三つの属性に分けられる。

それはじゃんけんのグー、チョキ、パーの様にワクチン、データ、ウィルスで、ワクチン種のデジモンはウィルス種のデジモンに強く、データ種のデジモンには弱い。
データ種のデジモンはワクチン種のデジモンには強いがウィルス種のデジモンには弱い。
ウィルス種のデジモンはデータ種のデジモンには強いがワクチン種のデジモンに弱い。
なお、最近になり、三つのどの属性にも当てはまらないフリーと言う属性も確認され始めている。
こうした摩訶不思議な生物、デジモン。
それが世に出回る切っ掛け・・・人類とデジモンの最初の出会い・・・
それは１９９５年の春に、日本の首都である東京・光が丘で起きた光が丘爆弾テロ事件である。
事件当初はガス爆発、テロによる爆弾事件、など世間を騒がせたが真相は不明として片付けられた。
それから四年後の１９９９年に起きた、お台場霧事件。
お台場全体が謎の霧に包まれ交通機関などが遮断され、お台場が陸の孤島と化した。また、上空にデジタルワールドが現れる現象も同時に起こった。
そして翌年の２０００年の３月４日、あるデジモンがインターネット上でネットワークを混乱に貶め、日本へ核ミサイルが発射される事件が起きた。
だが、それはオメガモンの活躍により、混乱の原因となったデジモンは倒され、核ミサイルの信管が解除され核ミサイルが日本で爆発する事は無かった。
そして、この２０００年から２００２年にかけてパートナーデジモンを持つ子供が増え始めた。
２００２年にパートナーデジモンを持つ子供が増えてから二十五年後の２０２７年に人々にパートナーデジモンが存在しデジタルワールドが世界中の人々に認知されるようになった。

人々とデジモンが触れ合う様になったが、デジモンは、本来は凶暴な存在でもあり、その強大な力は世界を滅ぼす事にもなりかねない。
それらデジモンの管理を徹底しなければデジタルワールドと地球の両方を滅ぼしかねない。
その為、パートナーデジモンを得るには国が定めるデジモンの講習と厳しい人格面での面接、テイマーと呼ばれる育成士の資格を得る為の試験に合格しなければならない。
そして試験に合格した者は、住所と名前を登録した後、パートナーデジモンのデジタマとテイマーの証であるデジヴァイスが支給される。
２０００年初頭のデジヴァイスはあくまでもデジモンを進化せる為のデバイスであったが、最近の研究・開発により、近年のデジヴァイスはデジモンの収納機能も備わっている。
またテイマーは自動車運転免許同様、数年に一度の更新があり、やむを得ない事情を除き、この更新をサボったりすると、テイマーの資格を剥奪され、パートナーデジモンと別れなければならない。
引っ越し等の住所変更の際も必ず住所の変更を届けなければならない。
この届けを忘れてもテイマー資格の剥奪へとつながる。
それほど、地球におけるデジモンの取り扱いは厳しいモノとなっている。
その他にデジタルワールドから迷いでてしまうデジモンが地球で出現し暴れまわらないように国際警察機構はＤｉｇｉｔａｌ　Ａｃｃｉｄｅｎｔ　Ｔａｃｔｉｃｓ　Ｓｑｕａｄ、通称ＤＡＴＳと呼ばれる組織を作り、デジタルワールドと地球の両方を観測し、世界の安定を担っており、地球からデジタルワールドへの渡航に関しても管理・運営をしている。
また地球上で起こるデジモンを使用しての犯罪の取り締まりも行っている。
デジタルワールドからのデジモンやデジタマの違法な密輸。
そのデジモンやデジタマの違法取引。

デジモンを使用しての生物兵器の開発と使用。
デジタルワールドへの許可なき渡航。
デジタルワールドへ行くためのデジタルゲートへの不正なアクセス。
これらすべてが取り締まり対象となっている。

世間の人間・・・特に子供にとっては、デジモンは一種のステータスになっていた。
それはこの小学生、比企谷八幡も例外ではなかった。
彼もテイマー試験を受け、ＤＡＴＳからデジタマをもらい、パートナーデジモンを育てている。
基本的にデジモンには性別という概念は存在していない。
しかし、明らかにその外見と容姿から性別が判明しているデジモンがいる。
そのほかにも発する声から、これは明らかにメスで、こっちはオスだろうというデジモンも居る。
八幡が育てたパートナーデジモンも成長期になった時は、黒いガブモンとなり、このまま成長して成熟期になったら、黒いガルルモンになるのかと思っていた。

ガブモン（黒）

レベル：成長期　　タイプ：爬虫類型デジモン　　属性：ウィルス

ウィルス種に進化したガブモン。
ウィルスの影響で皮膚と毛皮が通常のガブモンと異なり黒くなっている。
暴れん坊だが、毛皮をぬぐと内気で臆病になるところはワクチン種

と同じで、素顔はやはり秘密。
必殺技は通常のガブモンと同じく小さな火の玉を吐き出す『プチファイアー』

しかし、この黒いガブモン・・・やたらと口が悪いし、しかも声から察するに女性の声っぽかった。
あと、やたらと好戦的な性格でもあった。
その影響なのか、ＤＡＴＳの施設に行くとファームと呼ばれるコミュニティー関連のところよりも、コロシアムと呼ばれる他のテイマーのデジモンや、ＤＡＴＳがこれまで、観測したデジモンのデータを基に作った仮想デジモン（ＣＰＵ）とのバトルの方が好きだった。
そんなある日、いつもの様にＤＡＴＳの施設に来た時、パートナーの黒ガブモンは、やはり、いつものようにコロシアムで他のデジモンとバトルをしていた。
このコロシアムもデジモンの成長過程のランクと同じ対戦相手になるように設定されていた。
相手は、小さなコウモリの様なデジモン、ピコデビモン。

ピコデビモン

レベル：成長期　　タイプ：小悪魔型　　属性：ウィルス

蝙蝠の姿をした小型の使い魔デジモン。
上級悪魔系デジモンの使い魔として存在している。
攻撃力などは強くないが、悪知恵が働きあちらこちらで悪さをしたりしている。
闇を好み、いつも上級デジモンといることが多く、単体で目撃することは稀だろう。
必殺技は大きな注射器を投げつけ、相手から血を抜き取ってしまう『ピコダーツ』。

このピコデビモンは仮想デジモン（ＣＰＵ）ではなく、テイマーがいるパートナーデジモンだった。

「プチファイアー!!」

「ピコダーツ!!」

相手が空を飛べるデジモンのため、黒ガブモンの攻撃はなかなか当たらない。

しかし、相手のピコダーツも素早い黒ガブモンの動きにより、なかなか当たらない。

「ピコデビモン、お遊びはそろそろ終わりだ」

「おうよ」

ピコデビモン進化――――――――ソウルモン

ピコデビモンの姿は魔女っ子帽子をかぶったお化けの様なデジモンに進化した。

ソウルモン

レベル：成熟期　タイプ：ゴースト型デジモン　属性：ウィルス

呪われたウィルスプログラムで構成されたゴースト型デジモン。

ファンタジーに登場する魔法使いのデータを取り込んだバケモンで、黒い帽子のおかげで魔力がアップしている。

そのため、呪いや魔力を使った攻撃は絶大だ。
必殺技は、敵に死者のタマシイを放つ『ネクロマジック』。

「なっ!?テメェ!!汚ねぇぞ!!」

成長期同士のコロシアムなはずなのに、相手はいきなり成長期の一ランク上の成熟期に進化した。
これは明らかにルール違反である。

「どんな手を使っても勝てばいいんだよ!!ネクロマジック!!」

ソウルモンは口から紫色の人型の煙を吐く。
人型の煙、ソウルモンの必殺技、ネクロマジックは成長期のピコデビモンのピコダーツ以上のスピードで、黒ガブモンに迫る。

「っ!?ぐぁぁぁぁー!!」

黒ガブモンはネクロマジックをもろにくらって跳ね飛ばされる。

「ち、ちくしょ・・・」

黒ガブモンは、ソウルモンを睨みつける。

「ふん、テメェの目・・・気に入らねぇ・・・ネクロマジック!!」

「ぐあっ!!」

またもや、ソウルモンの必殺技、ネクロマジックをくらって跳ね飛ばされる。

「もういい、ギブアップしろ!!」

八幡は黒ガブモンに降参しろと言う。

しかし、

「じょ、冗談じゃねぇ・・・こんな卑怯なヤローに背を向けるなんて、できる訳ねぇだろう・・・」

「バカ言ってんじゃねぇ!!強制ログアウトするぞ」

「ふざけんな!!余計なことするな!!」

「余計なことってなんだよ!!俺はお前を心配して!!」

「だったら、信じてみていろ・・・自分のパートナーをな!!」

「・・・」

「さあ、勝負はまだまだこれからだ!!」

黒ガブモンは起き上がり、再びソウルモンへと向かって行く。

「ふん、鴨打ちだぜ、ネクロマジック!!」

ソウルモンのネクロマジックをくらって倒れても黒ガブモンは何度も立ち上がって、ソウルモンに向かって行く。

ボロボロになった黒ガブモンを見て、八幡はもうこれ以上見てられず、強制ログアウトのボタンに触れようとした時、

「ま、まだだ・・・くっ・・・」

「もう飽きた・・・そろそろフィナーレと行こうか？」

ソウルモンは特大のネクロマジックをはくつもりなのか、大きく息を吸い込む。

「ガブモン!!」

八幡が思わず声を上げた時、八幡のデジヴァイスが光る。

ガブモン（黒）進化――――――ブラックテイルモン

「えっ？・・・・進化した？」

「だからいっただろう？『信じろ』って・・・さあ、覚悟しろよ・・・・」

進化したことで、これまで受けていたダメージも修復した。

ブラックテイルモン

レベル：成熟期　　タイプ：魔獣型　　属性：ウィルス

真っ黒な毛なみが印象的な、ウィルス種のテイルモン。

テイルモンの変種であるブラックテイルモンが生まれるのは非常に稀で、その個体数は少ないと言われている。

必殺技は、ワクチン種のテイルモンと同じく『ネコパンチ』。

「っ!?」

進化した黒ガブモン、もといブラックテイルモンはスピードも黒ガ

ブモンの時よりもアップしていた。
まさか、相手も同じ成熟期へと進化したことで大勢は互角かと思いきや、
「キャッツアイ!!」
ブラックテイルは魔眼により、相手の動きを止めると、
「ぶっ飛びやがれ!!ネコパンチ!!」
一撃で相手をノックアウトさせた。
試合後、相手のテイマーはルール違反と言うことでＤＡＴＳから厳重注意を受けた。
そして、八幡の元に戻ってきたパートナーは、何故か成長期の黒ガブモンに退化せず、黒いテイルモン、ブラックテイルのままの姿だった。

2話

コロシアムでの試合の最中、相手のルール違反により、ボロボロとなった八幡のパートナーデジモンであったが、突如、八幡のデジヴァイスが光り輝くと、彼のパートナーデジモンは成長期から成熟期のデジモンに進化した。

そして、コロシアムから戻ってきた彼のパートナーデジモンはなぜか退化しておらず、成熟期の状態を維持していた。

「えっと・・・お前、ガブモン?」

「いや、今は進化して、ブラックテイルモンだ」

「ブラックテイルモン・・・」

黒かったとはいえ、ガブモンだったので、てっきり、ガルルモンに進化するとばかりおもっていたのだが、予想外な進化を遂げた八幡のパートナーデジモン。

「うーん・・・」

ブラックテイルモンの名を聞いて、八幡は腕を組んで、考え込む。

「ん?どうした?」

「あっ、いや、ブラックテイルモンって、なんか名前が長いだろう?」

「そうか?」

「おう、それでニックネームをつけようと思う」

「ニックネームねぇ・・・それで、どんなニックネームをつけるつもりなんだ?」

「ずばり、カマクラだ!!」

「カマクラ!?」

ブラックテイルモンは八幡がつけたニックネームに唖然とする。

「四文字なら、言いやすいし、いい名前だろう?カマクラ」

「お前、ネーミングセンスが全くねぇな・・・」

パートナーから呆れるような目で見られる八幡。

それでも八幡は自身のパートナーを今後、カマクラと決めてそのニックネームで呼び続けることになった。

そして、今日も今日とて、成熟期へと進化した八幡のパートナー、ブラックテイルモンこと、カマクラと共にＤＡＴＳの施設に来ていた。
「さて、成熟期に進化して、これからは堂々と他の成熟期デジモンとやり合えるな」
「その前に、あれだけのダメージ受けてからの進化だったんだ。念のため、バトルの前に診断をするぞ」
「別に大丈夫だって」
「ダメだ!!」
「ちっ」
（どんだけ、バトルジャンキーなんだよ）
カマクラは健康診断なんてする必要はない。
さっさとバトルをやらせろと言うが、八幡は成熟期に進化する前、ソウルモンからあれだけボコボコにされたのだから、バトルをする前に一応検査を優先させた。
カマクラをデジヴァイスに戻し、パソコンにデジヴァイスを接続した時、画面に一体のデジモンが現れた。
「ん？なんだ？こいつは・・・？デジモン？」
ソイツは赤い一つ目に白い体、青黒い鋭い爪を持ち一見、生物なのかロボットなのか区別がつかないようなデジモンが映し出されていた。
どうして、自分のパートナーではなく、見たこともないデジモンがパソコン画面に映し出されているのか分からない。
「気持ち悪いな・・・コイツ・・・」
そのデジモンの赤い一つ目がジッと八幡の事を見ている。
すると、突然、そのデジモンがカッと目を見開くと、パソコンの画面が明るく光り始める。
「うわっ!!」
あまりの眩しさに八幡は目を開けてられず、思わず目を閉じる。
その時、八幡は何かに引きづられるような感覚に襲われた。

パラレルモン
究極体　突然変異型　ウィルス
様々なパラレルワールドを移動しデータを吸収していく突然変異型デジモン。
必殺技は、目から光線を放ち、対象を別次元へと飛ばしてしまうアブソーベントバン。

「うっ・・・・」
八幡が目を覚ますと、そこはＤＡＴＳの施設ではなく、森の中だった。
「どこだ？ここは・・・・？」
つい、さっきまで自分はＤＡＴＳの施設に居たはずなのに、それがいきなり森の中に居る。
「よぉ、目が覚めたか？」
「ん？あっ、カマクラ」
「カマクラ言うな」
八幡の下には彼のパートナーデジモンである、ブラックテイルモンこと、カマクラが近づいてきた。
「カマクラ、ここはどこだ？」
「さあ、あたしにも見当がつかねぇ・・・でも、一つ言えることは、ここは人間の世界じゃないことは確かだ」
「人間の世界じゃない・・・・？」
「ああ、周りの空気が人間の世界のモノと違う・・・どこか懐かしい空気だ」
「懐かしい・・・・？」
カマクラの言う懐かしいという部分に引っ掛かる八幡。
「それより、八幡。お前の手に持っているのはなんだ？」
「えっ？」
カマクラの指摘を受けて、八幡は自分の手を見ると、そこには茶色い革紐で吊るされた赤い真珠の首飾りを握りしめていた。
「なんだ？これ？・・・・俺はこんなモノ、持っていた記憶なんてないぞ」

これは一体何なのか？
いつの間にか居る森と、いつの間にか手にしている赤い真珠の首飾り・・・・
自分が置かれている事態にさえもまだ把握できていない。
「それ、ちょっと見せてくれないか？」
カマクラが赤い真珠の首飾りを見せてくれと言う。
「ん？ああ・・・・」
八幡はカマクラに赤い真珠の首飾りを手渡す。
「うーん・・・・どういう構造なのか分からないが、でも、これを手にしているだけで、なんか力が湧いてくる感覚がある」
「それは、普通のテイルモンで言うホーリーリングみたいなモノなのか？」
ブラックテイルモンと違い、ワクチン種のテイルモンの尻尾にはホーリーリングと呼ばれる金色の聖なる力を宿したリングがある。
このホーリーリングを失うと、テイルモンは成熟期ながら、成長期並みの力しか出せないほどにパワーダウンをする。
そういう意味では、ホーリーリングを有していないブラックテイルモンはパワーダウンをする要素がないので、リングの存在を一々気にする必要がないのだ。
しかし、この赤い真珠の首飾りは、ホーリーリングではないが、ブラックテイルモンに何らかの力を与えているみたいだ。
「じゃあ、その首飾りはお前が持っていなよ。見たところ、危険物じゃなさそうだし・・・・」
八幡は紐の長さを調節して、赤い真珠の首飾りをカマクラの首につけた。
「さて、次はここがどこなのかを確認するか・・・・」
八幡はカマクラを連れて、歩きだす。
森の中なのだが、そこに生えている木々は亜熱帯に生えている様な木にも見えるし、普通に日本の山に生えている木にも見える。
しかし、周りに民家のような人が住んでいる様子はない。
人を捜して歩いていると、森の奥から、

ズシーン、ズシーン
と、大きな足がした。
慌てて木の物陰に隠れると、そこから現れたのは赤いティラノサウルスだった。

「ティ、ティラノモン!?」

ティラノモン
成熟期　恐竜型　ワクチン
古代の恐竜のようなデジモン。
発達した2本の腕と巨大な尾で全ての物をなぎ倒す。
知性もあり、おとなしい性格のため、とても手なづけやすい。
そのため、初級テイマーからは重宝がられ、だいじに育てられることが多い。
もっとも基本的なデジモンの代表的存在と言えるだろう。必殺技は身体の色と同じ、深紅の炎を吐き出す『ファイアーブレス』。

「な、なんでこんなところにティラノモンが・・・」
「誰かのパートナーデジモンか?」
とりあえずティラノモンをやり過ごし、再び人を捜す。
あのティラノモンが誰かのパートナーデジモンであれば、テイマーである人間が居るはずだ。
だが、行けども、行けども、人間の姿はおろか、人口建造物も見つからない。
そんな中、八幡とカマクラは、いちご大福の様なデジモン、毛と角が生えたような饅頭の様なデジモン、餅の様なデジモン、ピンク色の球根みたいなデジモン、植物の種みたいなデジモン、豚の貯金箱の様なデジモン、足のない小さな怪獣みたいなデジモン、が奇妙な集団生活をしていた。

コロモン

成長期ii　レッサー型
表面を覆っていた産毛が抜け、体も一回り大きくなった小型デジモン。
活発に動き回れるようになったが、まだ戦うことはできない。
口から泡を出して敵を威嚇する。

ツノモン
幼年期ii　レッサー型
頭部の触手の1つが硬化した小型デジモン。
幼年期の頃より動物的進化をとげ、フサフサな体毛に覆われている。
まだまだ遊びたい盛りで、いたずら好きな性格だが、闘争本能は目覚めていない。

モチモン
幼年期ii　レッサー型
伸縮性のある外皮を獲得し、胴体下部の突起を使ってヨチヨチ歩く軟体のデジモン。
気持ちが高ぶると体を膨らませる様子が、餅の様に見えるところから〝モチモン〟と呼ばれるようになった。
しかし、見ためからは想像もできないくらい高い知性を持っているところから、その発生はコンピュータ内の辞書機能からと推測されている。
人間の言葉を理解し、自由に体を変形させてコミュニケーションを取ろうとする様子が、時折見受けられる。
餅の様に伸縮性のある泡を出して相手の動きを封じる。

ピョコモン
幼年期ii　球根型
頭に大きな花を咲かせた球根型のレッサーデジモン。
根のような触手を器用に動かすことで移動することができ、短い距

離だがフワフワと空に浮かび上がることができる。
好奇心旺盛で、ちょこまかと動く姿は非常に可愛らしい。
群れをなして生活する習性があり、群れによっては数匹から数百匹にもなるという。

タネモン
幼年期ii　球根型
頭部から植物の芽の様なものが発芽している球根型デジモン。
最適な環境を求めて浮遊していたユラモンが地上に降り進化した。
非常に臆病な性格で、外敵の存在を察知すると４本の足で穴を掘り、体の部分を地中に埋めてしまう。
一旦地中に潜ってしまうと頭部から生えた物が植物の擬態をとり、外敵から身を守ることができる。
ただし、草食性のデジモンには効果が無い。

トコモン
幼年期ii　レッサー型
体（頭？）の下に手足のようなものが生えている小型のデジモン。
手足の生えた幼年期デジモンは非常に珍しく見た目にも大変可愛らしい。
しかし、可愛いからといって迂闊に手を差し出すと、突然口を大きく開け、びっしりと生えた牙に噛み付かれるので気を付けなければならない。
かといって、性格はとても無邪気なので悪意は無い。

プカモン
幼年期ii　レッサー型
水棲恐竜の幼生を思わせる外観を持つが、その動きはまるでタツノオトシゴのように軽妙で、ひょうきんなデジモン。
しかし、性格的にはピチモンだったころの人なつっこさは影を潜めてしまい、他者が接近すると素早く逃げてしまう。

外皮はまだ深海の水圧と低温に耐えられず、深海への潜水可能時間も長くない。

「種族が全然違う幼年期iiのデジモンが共同生活している・・・」

八幡が唖然としていると、コロモンが八幡の存在に気づいた。

そして、コロモンたちは八幡に近づいてきた。

「あれ？君誰？」

このコロモンは人語が喋れるみたいだ。

「ああ、俺は比企谷八幡。こっちは俺のパートナーのカマクラ」

「だから、カマクラ言うなって・・・」

「えっと・・・お前らは・・・」

「僕たち・・・」

『デジタルモンスター!!』

「いや、それは知っている。それより、ここはどこなんだ？」

「ここ？ここは、ファイル島だよ」

「ファイル島!?って、ことは、ここはデジタルワールドなのか・・・？」

ＤＡＴＳの施設に居たはずが知らないうちにデジタルワールドに転移していた。

（な、なんで、ＤＡＴＳの施設に居たはずなのに気づいたら、デジタルワールドに居たんだ・・・？）

「な、なぁ、ここら辺で俺みたいな感じの人間を見ていないか？」

「人？」

「見た？」

「ううん・・・」

「見てないなぁ」

「ワイも見てへんわ」

「見てない」

「知らない」

「そ、そうか・・・」

ここがデジタルワールドならば、ＤＡＴＳの隊員が巡回をしていてもおかしくはないと思ったのだが、コロモンたちは人の姿を見ていな

いという。
「ねえ、ねえ、あなた、もしかして、テイルモン？」
ピョコモンはカマクラの事が気になるのか、声をかけていた。
「あん？見りゃ分かるだろう？」
「でも、黒いテイルモンなんて見たことないわね」
タネモンもカマクラ・ブラックテイルモンを見たことがないと言う。
ピョコモンとタネモンがカマクラと話している間、八幡は、コロモンたちにこの奇妙な集団生活について訊ねる。
幼年期の幼くまだ力の弱いデジモンは、集団生活をして互いに身を守っているとデジモンの生体について映像を見たことがあるが、それは同じ種のデジモン同士で、こうして異なる種のデジモン同士が集団生活をしている所を見るのは初めてだ。
しかも見たところ、彼らはパートナーデジモンではなさそうだ。
「みんなは何故ここに？」
「待っているんだ・・・・」
「待っている？」
「そう・・・いずれ、僕たちを迎えに来てくれる誰かが来るんだ」
「わてらはその誰かを守らなアカンのや」
八幡にはコロモンたちが待っている『誰か』とは彼らのテイマーなのだと直感的に気づいた。

3話

ＤＡＴＳの施設に居たはずなのにパソコンの画面に現れた謎のデジモンの力により、八幡とパートナーデジモンのカマクラ（ブラックテイルモン）はデジタルワールドにある島、ファイル島へと強制転移させられた。

彼はそこで、集団生活をしている幼年期のデジモンたちに出会う。

彼らはこのファイル島で自分たちのテイマーを待っている様子だった。

待っているテイマーが居るのであれば、八幡が強引に連れて行くわけにもいかない。

それに島を回っていればそのうち、ＤＡＴＳの隊員が自分を見つけてくれるだろう。

八幡はカマクラと共にその場を後にした。

しかし一日中、島のあちこちを回ってみてもＤＡＴＳの隊員がこのファイル島を巡回している様子はなく、その日はホログラムで出来た木を見つけたので、その中で一夜を過ごした。

「一日待ってもＤＡＴＳの隊員・・・来なかったな・・・」

「ああ・・・でも、デジタルワールドと言っても、人間が観測した箇所はほんの一部だって話だ・・・この島が、まだ人間が・・・ＤＡＴＳが観測していない箇所なのかもしれない」

「どうする?そうなった場合、八幡、お前さんはしばらくの間、ここに住まなければならないぞ。サバイバル生活、できるのか?」

「ボッチを舐めるな・・・夏休み、冬休み、そして春休み、家じゃずっと一人だったんだ・・・これぐらいの事・・・それに、デジヴァイスの中にはデジタルワールドについての情報が書かれているアプリもあるし、何よりも今の俺は一人じゃない・・・お前がいるだろう?」

「むっ!?ま、まぁ、そうだな。ボッチのお前さんを憐れんで一緒に居てやるんだ。精々感謝しろよ」

「分かっているよ、相棒」

それから八幡とカマクラのサバイバル生活が始まった。

ベースはこのホログラムで出来た木を寝床として、まずは食料調達だ。
食べ物に関して、八幡のデジヴァイスの中にはデジタルワールドに関する情報が掲載されているアプリがあり、食べられる植物やキノコ、薬草になる植物などが写真付きで分かりやすく掲載されていたので、八幡とカマクラはそれを頼りに食料と薬草の確保を行った。
「この葉っぱは薬草に使える葉っぱで、こっちのキノコは食べられるデジダケ・・・カマクラ、魚の方は？」
「・・・」
八幡がカマクラに声をかけると、カマクラが真剣な顔でジッと川の中を見ており、一瞬目を細めたと思ったら、
バシャ!!
その鋭い爪が生えた手で川をはたくと、岸にはビタン、ビタンと跳ね飛ぶデジコイやデジマス、デジフナが数匹いた。
食べられるキノコや魚の他にも小さいながらも肉の畑を運よく見つけることが出来た。
マンガ肉を土から引っこ抜くと、不思議なことに肉の表面に土は一切ついていない。
（映像で肉の畑の事は知っていたけど、原理はどうなっているんだ？）
引っこ抜いた肉を見ながら、首を傾げる八幡。
このデジタルワールドで人間界の常識を求めてはいけないが、しかし見れば見るほどこの肉の畑というのは不思議なものだ。
火おこしに関してはカマクラが一度成長期まで退化して、黒ガブモンのプチファイアーで火をおこした。
調理方法もアプリに掲載されていたので、それを参考にして調理。
と言っても鍋やフライパンがないので、基本は、獲った魚や畑から収穫した肉を枝に刺して焼くだけだった。
そんなサバイバル生活を小学生の八幡がしていると、普通ならば心細くなり、不安になり、泣きわめいてしまいそうだが、彼の場合、家庭環境がちょっと特殊な為、こうした環境下でもカマクラが居てくれたおかげで、不安になったりはしなかった。

サバイバル生活を初めて、三日・・・
この日も八幡とカマクラは食料調達に出かけていた。
すると、森の奥の空から、
ブゥ～ン・・・
虫の羽音が聞こえてきた。
ふと八幡が空を見上げてみると、そこには大きな赤いクワガタが居た。

クワガーモン
レベル：成熟期　タイプ：昆虫型デジモン　属性：ウィルス
頭部に巨大な鋏を持った昆虫型デジモン。
強靭なパワーと硬い甲殻に守られており、特に鋏の部分のパワーは超強力で一度敵を挟み込むと、相手が生き絶えるまで締め上げる。
ワクチン属性のカブテリモンとは完全に敵対関係にある。
必殺技は硬質の物質を簡単に切り裂くことができる『シザーアームズ』

「やべぇ、クワガーモンだ」
とっさに身を隠すが、すでにクワガーモンは八幡とカマクラの姿を確認しており、彼らをロックオンしていた。
クワガーモンは八幡とカマクラめがけて急降下してくる。
「くっ・・・」
「ちっ・・・」
八幡とカマクラは左右に跳び、クワガーモンの急降下アタックを躱す。
「やろう・・・」
カマクラがクワガーモンを睨みつける。
キャッツアイもネコパンチも空を飛べるクワガーモン相手では効果が薄い。
クワガーモンは狙いやすい八幡を狙ってくる。
「ネコキック!!」

カマクラは八幡を囮に、クワガーモンの眉間?にネコキックをいれる。
クワガーモンは一瞬怯んだが、首を振り回し、カマクラを薙ぎ払う。
「ぐはっ!!」
カマクラは大木にたたきつけられる。
クワガーモンは八幡から自分の顔に傷をつけたカマクラに標的を変更した。
「はぁっ!!ネコパンチ!!」
真っ直ぐ突っ込んでくるクワガーモンに対してカマクラはネコパンチで応戦する。
クワガーモンの顔面にカマクラのネコパンチが当たるが、決定打ではない。
やはり、相手が空を飛んでいるせいか、衝撃が弱まっているのだ。
クワガーモンは、今度はカマクラを空へと放り投げる。
そして、逃げ場のないカマクラにとどめを刺そうと、その発達した二本の鋏の先端で串刺しするつもりだった。
「やばい、空じゃあ逃げ場が・・・・」
「カマクラ!!」
「くそっ、空を飛べたら・・・・」
その時、カマクラが首にかけている赤い真珠の首飾りが光った。
(なんだ・・・・?力が・・・・湧いてくる・・・・)
赤い光に包まれたカマクラは・・・・
ブラックテイルモン　アーマー進化――――――――ネフェルティモン

ネフェルティモン（黒）
レベル：アーマー体　タイプ：魔獣型デジモン　属性：フリー
ブラックテイルモンがデジメンタルのパワーによって進化した、アーマー体の魔獣型デジモン。
古代種族の末裔でないテイルモンも、体を構成するデータの中に眠っていた特殊能力に目覚めアーマー進化できるようになったよう

に、亜種でもあるブラックテイルモンも同様の進化を遂げた。
必殺技は通常のネフェルティモンと同じ、額の飾りから高熱の赤い光線を出す『カースオブクィーン』と、デジ文字が刻まれた古代碑文の巨石を召還して敵を攻撃する『ロゼッタストーン』。

「進化・・・したのか？」
八幡にはカマクラの変化が分からなかった。
しかし、新たに進化したカマクラはその黒い翼を使って空を自由に飛ぶことが出来るようになった。
そして、下からカマクラを串刺しにしようとしたクワガーモンに対して、
「カースオブクィーン!!」
額の飾りから高熱の赤い光線を出すと、それはクワガーモンの口の中に入る。
「ぐぎゃぁぁぁー!!」
口の中に高熱の光線をぶち込まれたクワガーモンは墜落していく。
「八幡!!」
クワガーモンは完全に倒してはいないので、いつ起き上がるのか分からない。
カマクラは空から降りてくると、そのまま八幡を背中に乗せてこの場から逃げた。
そしてある程度、逃げると地上に降りた。
「ふぅ～・・・ここまでくれば、あのクワガタ野郎も追ってこないだろう」
「それにしても、カマクラ、お前その姿・・・」
「分からない・・・この首飾りが光ったと思ったら・・・」
「その・・・進化・・・だよな、姿が変わっているし・・・」
八幡はもしかして完全体に進化したのかと思い、デジヴァイスに搭載されているデジモンアナライザーで今のカマクラをスキャンする。

すると、そこに表示されていたレベルは完全体ではなく、アーマー体と表示されていた。
「アーマー体？」
聞いたこともないレベルに首を傾げる八幡。
そこで、調べてみると、進化するには一部のデジモンとデジメンタルと呼ばれる特殊なアイテムが必要なのだという。
そして基本、アーマー体のレベルは成熟期と同レベルだと書かれていた。
ただし、これまでの観測の中でアーマー体に進化したデジモンは、ブイモン、アルマジモン、ホークモン、パタモン、ワームモン、そしてテイルモン・・・・
「そうか、カマクラもテイルモンの亜種だもんな・・・でも、デジメンタルなんてアイテムは持っていないはず・・・・」
「いや、進化する直前、首にかかっているこの首飾りが光った」
「その首飾りが・・・・？じゃあ、その首飾りがデジメンタルなのか・・・・それにしても・・・・」
八幡はカマクラの首からぶら下げている赤い真珠の首飾りを見た後、カマクラの顔をジッと見て、
「な、なんだよ・・・・？」
「今のお前の顔、怖いな・・・・鉄仮面で、無表情・・・・夜、暗闇でその顔を見たり、朝起きて、目を覚ました時、隣で寝ていたら、マジで怖いぞ」
ネフェルティモン状態のカマクラの顔が怖いと言う。
すると、
「ふんっ!!」
ゴン!!
カマクラは八幡に頭突きをしてきた。
「いてぇ!!」
相手は鉄仮面で不意打ちな頭突き・・・・
痛い筈である。
「何しやがる!!」
「それはこっちのセリフだ!!いきなり人の顔を見て、失礼なことを言

いやがって!!」
カマクラは顔が怖いと言われ、カチンと来たようだ。
それからカマクラは成熟期のブラックテイルモンに戻った。
「とりあえず、アーマー進化やデジメンタルについてもう少し調べてみよう」
八幡は額をさすりながら、デジヴァイスに入っているアプリを駆使して、アーマー進化、そしてデジメンタルについての情報を集めた。
「何かわかったか？」
「うーん・・・それがどうも妙なんだ」
「ん？」
「これまでＤＡＴＳが確認したデジメンタルは全部で８個・・・そのどのデジメンタルにも所有者がいる・・・」
「じゃあ、これは９個目のデジメンタルってことか？」
「おそらく・・・でも、もう一つ気になることがある」
「なんだよ？」
「デジメンタルの形状だ」
「形状？」
「ああ、これを見ろ」
八幡はデジヴァイスの画面をカマクラに見せる。
そこには、勇気、友情、愛情、純真、知識、誠実、光、希望のデジメンタルの画像が映し出されていた。
それは、今、カマクラが首から下げている様な首飾り状のモノではなく、様々な形の置物の様な形状をしていた。
「これが、デジメンタル・・・」
「ああ、ＤＡＴＳが所有者の人から貸してもらって撮影したモノらしい・・・」
公式で存在が確認されているデジメンタルとカマクラが今、身に着けているとされるデジメンタルとではその形状も異なっていた。
「一体コイツはなんなんだ？本当にデジメンタルなのか？」
八幡はカマクラが身に着けている赤い真珠の首飾りが本当にデジメンタルなのか怪しくなった。

しかし、現にカマクラは今、目の前でアーマー進化を確かにした。
カマクラの証言が正しければ、カマクラが身に着けている赤い真珠の首飾りはデジメンタルと言うことになる。
ネフェルティモンに進化したと言うことはこの赤い真珠の首飾りは光のデジメンタルと言うことになるはずだが、ウィルス種・・・しかも名前からして闇であるブラックが入るのに、光のデジメンタルで進化というモノ妙だ。
それにあの時のネフェルティモンはデジモンアナライザーに表記されているネフェルティモンと異なり、黒い体に黒い翼を持っていた。
まぁ、元となったカマクラがブラックテイルモンなので、当然なのかもしれないが・・・
「あぁ～もう、分からん!!」
平凡な小学生の八幡では、デジモンの謎を解析するのには無理があった。
「まぁ、いいんじゃねぇか、これで空を飛ぶ奴もぶっ飛ばせるわけだし」
カマクラ本人は、そんな難しいことを一々気にせず、飛行可能となったことで、今後はクワガーモンの様に空を飛ぶデジモンとも戦えると不敵な笑みを浮かべていた。
「一応、お前自身のことなんだから、もう少し気にしたらどうだ？」
身体に何らかの影響が出るかもしれな進化にお気楽なパートナーデジモンに呆れる八幡だった。

４話

デジメンタルを使用しなければ進化できないアーマー進化・・・・
そのアーマー進化をカマクラは出来、アーマー体、ネフェルティモンに進化した。
しかし、アーマー進化に不可欠なデジメンタルがない。
カマクラがアーマー進化する際、この世界に始めてきた時、八幡が手にしていた赤い真珠の首飾り・・・・
これが、アーマー進化のカギとなっていることに間違いはない。
しかし、ＤＡＴＳが把握しているデジメンタルとカマクラが身に着けている赤い真珠の首飾りは似ても似つかない形状だった。
だが、八幡はまだ駆け出しのテイマー・・・・
この赤い真珠の首飾りとデジメンタルとの関係が分かるはずもなかった。
そして、カマクラ本人は、ネフェルティモンとなった時、飛行可能になったことで、これで、飛行タイプのデジモンとも戦えると言うことで、むしろ喜んでいた。
まぁ、八幡にしても飛行可能と言うことで、活動の幅を広げることが出来たのは、大きな収穫であった。
サバイバル生活に戻りながら、ＤＡＴＳの隊員を待つ、八幡は、ある日、ネフェルティモンの背中に乗り、海へとやってきた。
このファイル島はあの時、コロモンが言ったように島であり、周りは海に囲まれており、周囲に他の島や大陸は見当たらなかった。
流石に地図もなしに海を渡るのはあまりにも無謀だ。
海を渡っている間、ネフェルティモンの体力が尽きたら、進化は解除され、海に落ちて、デジモンならぬ土左衛門になってしまう。
カマクラもそれは理解しているためか、このまま海を飛んで越えようとは言わなかった。
そして、海岸に来た時、海岸に７個の電話ボックスを見つけた。
「公衆電話!?なんでこんなところに・・・」

八幡の世界では携帯の普及により、今では街中から姿を消しつつある公衆電話・・・
それがどういうわけか、デジタルワールドの海岸に存在している。
しかし、八幡に現金の持ち合わせもテレホンカードも持っていなかった。
そもそも、デジタルワールドから外部に連絡をするにはＤＡＴＳの隊員が所持している特殊な通信機器でなければ、通信が出来ない。
デジヴァイスだけでは、ＤＡＴＳの司令部とコンタクトをとることは不可能だった。
きっと、あの公衆電話も電話をかけたところで外部とコンタクトをとることは出来ないだろうと思う八幡だった。
その時、突然ファイル島の森の中から七つの光の柱の様なモノが空の彼方へと向かって行くのが見えた。
「な、なんだ？」
「流れ星じゃないな・・・」
「何かが飛んで行ったように見えたが・・・」
森の中から突如上がった七つの光・・・
カマクラには何かが空の彼方へと飛んで行ったように見えた。
しかし、それはデジモンには見えず、あまりにも小さいモノだったので、その正体はわからなかった。
それからすぐに今度は、空から七つの光が降ってきた。
「何かが飛んで墜落したのか？」
これまで、このファイル島でサバイバル生活をしていて、このような現象は始めて見た現象だった。
八幡が海で七つの光が空へ向かって飛び、それからすぐに空から七つの光が墜落していく現象を見たその現場では・・・
「太一・・・太一・・・」
コロモンがゴーグルを額にかけた少年に声をかけていた。
その少年は、気を失っていたのだが、コロモンの声によって目を覚ます。
「ん・・・うわぁぁぁぁぁぁぁー!!」

少年はコロモンの姿を見て思わず声を上げ、飛び起き、後退る。
「な、なんだ？コイツっ!?」
「太一気が付いた!?よかった、よかった!!」
「喋っている・・・俺の名前を知っている・・・」
「よかった、よかった、太一、よかった」
コロモンは太一と呼ぶ少年に飛びつく。
「な、なんだ？お前!?」
「ボク、コロモン。太一、待っていた」
「コロモン？・・・俺を・・・待っていた？」
「うん」
「それは一体どういうことなんだ？大体、俺の名前をどうして知っている？」
太一がコロモンに事情を聞いていると、
「太一さん」
「おう、光子郎」
そこへ、オレンジ色のシャツを着たもう一人の少年が太一に声をかける。
「よかった、僕、一人ぼっちになったかと思って・・・」
もう一人の少年、光子郎は、太一と会えて安堵した様子。
そんな彼の足元には、
「なに言うてはります？うちがついているやないか」
関西弁で喋る餅のようなデジモン、モチモンが声をかける。
「光子郎、そいつは・・・」
光子郎も人語を喋る変な生き物を連れていることに驚く太一。
「うち、モチモン言います。よろしゅう」
モチモンは太一に自己紹介をする。
「ここで気づいたら、ずっとついてくるんですよ・・・僕にも何が何だか・・・」
光子郎は訳のわからない生物につき纏われて困惑している様子。
「ここ？ここって・・・」
太一があたりを見渡す。

実は彼らは通っている小学校で行われている夏休みのサマーキャンプに参加していた。
山のキャンプ場に着いたら、夏なのに雪が降り、オーロラが空に現れると、ポケベルの様な機械が空から降ってきた、それを拾ったと思ったら、今度は山なのに、津波が襲い掛かり、気づいたら此処にいた。
「ここはファイル島ですわ」
「そうそう、ファイル島」
「彼らは、そう言っていますけど・・・・」
「うーん・・・確かめて見なきゃな」
太一は木に登り、辺りを見渡す。
しかし、周囲の光景は、キャンプで来た山と全然違う光景だった。
すると、空から一匹の赤いクワガタが襲い掛かってきた。
「こっちゃ!!」
モチモンが太一と光子郎を案内し、二人は赤いクワガタ、クワガーモンから逃げる。
そして、モチモンはホログラムで出来た木へと案内する。
「ここは・・・見せかけの木なんだ・・・」
ホログラムで出来た木を見て光子郎は呟く。
「ん?おい、見てみろ、光子郎」
「えっ?」
太一は、光子郎に声をかける。
「ここ、誰かが住んでいる様な跡がある」
「ほ、ほんとだ・・・僕たち以外にも誰かが居るんでしょうか?」
ホログラムで出来た木の床には落ち葉が敷き詰められ、まるで寝床の様になっていた。
それに木で出来た器の様なモノもある。
そう、ここは八幡とカマクラがベースにしていた寝床だった。
太一たちの姿を見失ったクワガーモンはどこかへと飛び去った。
「もう、大丈夫よ」
すると、外から女の子の声がした。

太一と光子郎が外に出てみると、そこには青い帽子をかぶった少女が居た。
「空」
「危なかったね」
「なあに大したことじゃないさ。あれ？」
太一は空の足元に居るピンクの球根みたいな生物に気づく。
「クワガーモンの音、遠くに行ったよ。空」
「うん、ありがとう。ピョコモン」
「ピョコモンって・・・・」
「植物だけど・・・・これも・・・・」
太一と光士郎はピョコモンを見た後、コロモンとモチモンを見る。
「仲間？」
すると、今度は豚の貯金箱のような生物がやってくる。
「これもそうなの？」
「こっちだよー!!タケルー!!」
豚の貯金箱のようなデジモン、トコモンは誰かに声をかける。
すると、
「トコモーン!!」
「タケル」
太一たちよりも年下の少年と、毛と角が生えた饅頭の様なデジモン、ツノモンを手に持った少年がやってきた。
「ヤマト・・おまえも・・・・」
「太一、みんな居たのか・・・・」
「い、いや、お前の持っているソレ・・・・」
「ん？ああ、コイツは・・・・」
「ボク、ツノモンです」
ツノモンが太一に自己紹介をすると、
「ぎゃぁぁぁぁー!!」
森の奥から眼鏡をかけた少年が悲鳴を上げて走ってきた。
「丈・・・・」
「みんなー!!助けてくれ!!」

眼鏡の少年、丈の後ろからは足のない小さな怪獣の様なデジモン、プカモンが追いかけてきた。
「変な奴に追われて・・・」
「変な奴じゃないよ。プカモンだよ」
プカモンは丈にべったりと抱き着く。
「うわぁぁぁー!!」
プカモンに抱き着かれた丈はまたもや悲鳴をあげる。
そして、太一たちの傍に居るコロモンたちの存在に気づく。
「な、なんだコイツ等?!一体・・・?」
『ぼくたちデジタルモンスター!!』
コロモンたちは、八幡と出会った時の様に声をそろえて自分たちが何なのかを伝える。
「デジタルモンスター?」
太一が思わず聞き返す。
「ぼく、コロモン!」
「ツノモン・・・です」
「ピョコモンだよ!」
「わて、モチモンでんがな」
「プカモンだよ。クワッ!」
「ぼく、トコモン!」
コロモンたちは太一たちに改めて自己紹介をする。
「俺は八神太一。お台場小学校の5年生だ! 同じ5年生の空!」
「武之内空よ」
「やっぱり同じ5年生のヤマト!」
「石田ヤマトだ」
「そっちは丈!」
「城戸丈、6年だ」
「4年の光子郎!」
「泉光子郎です」
太一たちもコロモンたちに自己紹介をする。
「えーっと、それから・・・」

太一の目線がタケルのところで留まった。
どうやら、タケル以外のメンバーとは知り合いの様だが、タケルとは今回が初対面の様だ。
「タケル。高石タケル。小学校2年生だよ！」
「ああ、これで全員だっけ？」
太一はぐるりと周りを見渡した。
「待って、確かもう一人・・・」
空は何か思い当たることがあるようだ。
「ミミさんが、太刀川ミミさんがいません」
光子郎がハッとして、今此処にいるメンバー以外、もう一人のメンバーがいないことに気づく。
「そうだ、4年生のミミくんだ！　僕はあの子に・・・」
「きゃぁぁぁぁぁー!!」
丈が何か言いかけた途端に、女の子の悲鳴が聞こえてきた。
太一たちは悲鳴が聞こえた方へと向かう。
「ミミちゃん！」
「ミミさん！」
森の中からピンクのテンガロンハットを被った女の子と植物のような姿のデジモン、タネモンがクワガーモンに追いかけられていた。
「大丈夫？」
「タネモン・・・」
「しっかりして！」
空がミミの肩を掴んで励ます。
「また来るぞ!!」
クワガーモンは旋回して、太一たちに狙いを定める。
太一たちはクワガーモンから逃れるために森の中を走る。
「伏せろ!!」
ヤマトが叫びに、とっさにみんなはひれ伏す。
その間にクワガーモンは頭上を通り過ぎた。
「なんなんだよ、これは・・・うわ！」
丈の近くにクワガーモンのシザーアームズで切られた木の枝が落

ちた。
「一体ここはどういうところなんだー!?」
平穏な日常が一変し、訳の分からない場所、そして見たことのない生物に懐かれ、そして見たことのない別の生物に追いかけられ、踏んだり蹴ったりな状態・・・・
「くそー!　あんな奴にやられてたまるか!」
「太一、無理よ!」
「そうだ、俺たちにはなんの武器も無いんだぞ!」
太一が戦おうと意気込むが、それを空とヤマトが止める。
「ここは逃げるしか・・・・・」
「くっ・・・・」
ヤマトの言う通り、武器もない状況下ではクワガーモンに勝てない。
光子郎の意見を聞き、太一たちは再び駆け出す。
しかし、森を抜けた先は崖。
このまま突き進んだら、下へ真っ逆さまだ。
「こっちは行き止まりだ!　別の道を探すんだ」
「べ、別の道って・・・・!?」
皆がどうしようかと思っていた次の瞬間、クワガーモンが後ろからすごい勢いで突進してきた。
先の方にいた太一もとっさに伏せていた。
「今のうちに!」
クワガーモンは少し遠くの上空にいた。
空のその声に、太一が立ち上がって走る。
しかし、早くも戻ってきたクワガーモンが再び太一に襲いかかろうとしていた。
「太一!!」
太一を飛び越え、コロモンがクワガーモンに泡を吹き出した。
だが、効いている様子はなく、コロモンはそのままクワガーモンのハサミが直撃し、地面へ落ちていった。
「コロモン!!」

クワガーモンは、今度は空たちに襲い掛かるが、ピョコモン、モチモン、タネモン、トコモン、ツノモン、プカモンたちが飛びあがってクワガーモンに泡を吹く。
パートナーデジモンたちは、クワガーモンの体当たりをくらって地面に落ちるが、クワガーモンも森の木に激突する。
ダメージを少しでも与えられたかと思っていたが、姿を現したクワガーモンは、ダメージを全くと言っていいほど受けていない。
太一たちは崖っぷちに追いやられた状況となった。

5話

小学校の夏休み企画であるサマーキャンプに参加したお台場小学校に通う太一たちは、突如、ファイル島と言う島へ送られた。
そこにデジタルモンスター、通称、デジモンと呼ばれる生物が暮らしており、太一たちにはそれぞれにパートナーデジモンが自分たちを待っていた。
見たこともない場所、そして見たこともない生物との出会いに困惑している中、ファイル島に住む、凶暴なデジモン、クワガーモンに襲われる太一たち。
とうとう崖っぷちに追いやられ、絶体絶命のピンチとなる。
「あいつ、まだ生きてやがった！」
パートナーデジモンの泡攻撃をくらって木に激突したクワガーモンは全然ダメージを受けた様子がなかった。
「くそー、このままじゃ・・・・」
「いかなきゃ・・・・」
「え？」
コロモンの呟きに、太一が聞き返す。
「ぼくたちが戦わなきゃ、いけないんだ……！」
「何言ってるんだよ！」
太一は困った顔でコロモンを見つめる。
コロモンはこれまでのクワガーモンとの戦いで傷ついているし、さっきの攻撃だって全然効果がないことは分かり切っている。
それでも、コロモンはクワガーモンと戦うと言う。
「そうや、わいらはそのために待っとったんや」
「そんな……！」
光子郎も心配そうな表情でモチモンを見る。
「いくわ」
「無茶よ！　あなたたちが束になっても、あいつにかなうはずないわ！」

空が必死に叫ぶ。
「でも、いかなきゃ！」
「ボクもーっ！」
「オイラもーっ！」
ツノモンにトコモン、プカモンもそれぞれのパートナーの腕の中で暴れる。
「・・・タネモン、あなたも？」
「うん」
ミミの問いかけにタネモンは頷く。
「いっくぞー!!」
コロモンが掛け声を出すと、パートナーデジモンたちはクワガーモンへと向かって行く。
「ピョコモン！」
「モチモン！」
「ツノモン！」
「トコモン！」
「プカモン！」
「タネモン！」
「コロモオオオオオン!!」
太一たちがそれぞれのパートナーの名前を叫んだ、その時だった。
空から七色の光が降り注ぐと、その光はコロモンたちに真っ直ぐと伸びた。
コロモン進化――――――アグモン
ピョコモン進化――――――ピヨモン
モチモン進化――――――テントモン
ツノモン進化――――――ガブモン
トコモン進化――――――パタモン
プカモン進化――――――ゴマモン
タネモン進化――――――パルモン
「な、なんだ……!?」
幼年期iiのコロモンたちは成長期のデジモンに進化した。

アグモン
レベル：幼成長期　タイプ：爬虫類型デジモン　属性：ワクチン
成長して二足歩行ができるようになった、小型の恐竜の様な姿をした爬虫類型デジモン。
まだ成長途中なので力は弱いが、性格はかなり獰猛で恐いもの知らず。
両手足には硬く鋭い爪が生えており、戦闘においても威力を発揮する。
力ある偉大なデジモンへの進化を予測させる存在でもある。必殺技は口から火炎の息を吐き、敵を攻撃する『ベビーフレイム』。

ピヨモン
レベル：成長期　タイプ：ひな鳥型デジモン　属性：ワクチン
翼の部分が腕の様に発達している雛鳥型デジモン。
翼を器用に動かし、物をつかんだりする事ができるが、そのために空を飛ぶ事は苦手。
普段は地上で生活しているが、危険が迫ると空を飛んで逃げる。
しかし飛行能力は低い。
必殺技は幻影の炎『マジカルファイアー』。

テントモン
レベル：成長期　タイプ：昆虫型デジモン　属性：ワクチン
硬い甲殻を持つが、まだ攻撃性の低い昆虫型デジモンの原初タイプ。
前肢に1本、中肢と後肢に4本の硬質爪を持ち、特に中肢は人間の手並に器用に物をつかんだりできる。
必殺技は、羽で増幅させた静電気を飛ばす『プチサンダー』。

ガブモン
レベル：成長期　タイプ：爬虫類型デジモン　属性：ワクチン
毛皮を被っているが、れっきとした爬虫類型デジモン。

とても臆病で恥ずかしがりやな性格で、ガルルモンの残留データで作られた毛皮を被っている。
必殺技は『プチファイアー』。

パタモン
レベル：成長期　タイプ：哺乳類型デジモン　属性：ワクチン
大きな耳が特徴的な哺乳類型デジモン。この大きな羽を使って空を飛ぶことができるが、時速１ｋｍのスピードしか出ないため、歩いたほうが断然に早いと言われている。
その飛行速度はピヨモンとほぼ同じ。
とても素直な性格で教えたことは良く守る。
またパタモンはホーリーリングを身に付けなくても、秘められた聖なる力を発揮することができる、古代種デジモンの遺伝子を受け継いでいるらしい。
必殺技は空気を吸い込んで一気に空気弾を吐き出す『エアショット』と大きな両耳で敵を叩く『ハネビンタ』。

ゴマモン
レベル：成長期　タイプ：海獣型デジモン　属性：ワクチン
陸上での活動が可能になり、体温を保つ毛皮で覆われた海獣型デジモン。
体を覆う短く白い体毛は成長するほど長くなり、更に成長すると茶色く変色していくという。
性格は、見るもの全てにちょっかいを出すやんちゃ坊主タイプ。
頭から背中にかけて生えている赤い毛はゴマモンの感情に合わせて動き、怒っているときは毛が逆立つ。
ゴマモンの爪は硬い氷を簡単に砕くほどで、侮っているといたい目をみる。
必殺技は子分の小魚達を操る『マーチングフィッシィーズ』。

パルモン

レベル：成長期　タイプ：植物型デジモン　属性：データ
頭にトロピカルな花を咲かせた植物型デジモン。
昼間は花と葉の様な腕を広げ光合成をしている。
普段は地中に根の様な足を埋め、養分を吸っているが、歩行することも可能。
頭部の花は、楽しい時や嬉しい時は甘い香りを漂わせ、怒った時や危険を感じた時は大型デジモンも逃げ出すほどの臭い匂いを放出する。
必殺技は強烈な毒性を帯びたツタを敵に絡ませる『ポイズンアイビー』。

「みんな、行くぞ!!」
太一たちが唖然としている中、アグモンの掛け声でパートナーデジモンたちは一斉に飛び出した。
進化してもさほど驚かないのか、クワガーモンは再び襲ってきた。
アグモンたちがなぎ払われ、地面に突っ伏す。
「これくらい大丈夫！」
しかし、すぐに立ち上がり、体制を整えていた。
進化したことで、防御力もアップしていた。
「ポイズンアイビー!!」
「エアショット!!」
「プチサンダー!!」
空に飛び上がろうとするクワガーモンをパルモンが自らのツタを絡ませ、動きを鈍らせる。
そこへ、パルモンとテントモンが上から必殺技を当てる。
その隙にゴマモンがクワガーモンの足元に上手く入り込み、クワガーモンを転ばした。
「みんな離れろ！　ベビーフレイム!!」
「プチファイアー!!」
「マジカルファイアー!!」
片膝をついているクワガーモンに、アグモンとガブモン、そしてピ

ヨモンが炎を放った。
「よし、もう一度だ!!」
パートナーデジモンが今度は一斉にそれぞれの必殺技をクワガーモンに当てると、身体を炎に包まれクワガーモンは倒れた。
これで、クワガーモンを倒したかと思い、パートナーデジモンと太一たちが喜んでいたら、クワガーモンはまだ倒されておらず、クワガーモンはハサミを地面に突き刺した。どんどんヒビが入っていき……そして、ついに割れた。
『うわぁぁぁぁぁー!!』
太一たちとパートナーデジモンは崖下に落ちていった。

コロモンたちがクワガーモンと戦っている時、海岸に居た八幡は、海岸を散策しようとしていたら、
ジリリリリン・・・・
公衆電話が鳴りだした。
八幡が電話に出てみると、
「も、もしもし・・・・」
「今日は7月65日、時刻は84時12分です」
「はぁ?」
受話器の向こうからはいたずら電話のようなでたらめな時報が聞こえてきた。
そして最後に、
「電話をかけても、無駄ですよ、むーだ!!」
(イラッ)
そう言って切れた。
「なんだ?これ?本当にイタ電だったんじゃ・・・・」
当然、これが外部からの連絡だとは思えないが、これが外部からのイタ電だったら、マジで質が悪い。
カマクラが出ていたら、きっと公衆電話にネコパンチをくらわせて破壊していただろう。
八幡が受話器を戻した時、コロモンたちを進化させた進化の光は海

岸に居た八幡も確認できた。
「ん？なんだ？あの光は・・・？」
「あれは・・・進化の光だ・・・」
「進化の光？」
「ああ・どこかの誰かが進化したんだ・・・」
「七つの進化の光・・・」
カマクラが言うには同時に七体のデジモンが進化したことになる。
同時に七体のデジモンが進化することなんてあるのだろうか？
「行ってみるか？」
八幡が疑問に思っていると、カマクラが確認のために見に行ってみるかと聞いてきたので、
「ああ」
八幡はネフェルティモンの背中に乗り、七つの進化の光が灯った箇所へと向かった。
しかし、その場に居たのは一体のクワガーモンだった。
進化の光は七つあった・・・
だが、この場に居るのはクワガーモン一体。
どう見ても、さっきの進化の光はこのクワガーモンではない。
では、進化の光を浴びたと思われる七体のデジモンたちはどこへ行ったのだろうか？
「あっ、このクワガーモンは・・・」
「あの時のクワガーモンか・・・」
八幡とカマクラはこのクワガーモンに見覚えがあった。
初めてカマクラがネフェルティモンの進化した時に出会ったクワガーモンだった。
クワガーモンは、あの時の屈辱を返すつもりなのか、ネフェルティモンに襲い掛かってきた。
「単純馬鹿め・・・ロゼッタストーン!!」
自分に向かってくるクワガーモンに対して、ネフェルティモンは、クワガーモンの頭上にデジ文字が刻まれた古代碑文の巨石を召還してそれをぶち当てた。

「ぐわぁぁぁぁぁー!!」
ロゼッタストーンを頭上からくらったクワガーモンはその一撃でノックアウトされた。
「ふん、口ほどにもねぇ」
最初はあんなに苦戦していたクワガーモンだったが、サバイバル生活を経て、野生のデジモンと戦い経験を積んだカマクラはパワーアップしていた。
ノックアウトされたクワガーモンをカマクラはつまらなさそうに一瞥した。
一方、崖下に落ちた太一たちは、ゴマモンの必殺技、マーチングフィッシィーズで、魚たちを筏代わりにして川を下った。
そして、無事に岸についた。
「これからどうする?」
ヤマトはみんなに今後の方針を訊ねる。
「とりあえず、元の場所に戻ろう。大人たちが助けに来るのを待つんだ」
丈は元の場所へ戻り、そこで救助を待とう言う。
「戻るって言ってもなぁ・・・・」
「随分流されちゃったし・・・・」
「戻るって言っても、簡単じゃなさそうだぞ」
空とヤマトは丈の意見に難色を示した。
「じゃあどうしたらいいんだ? まず、道を探して・・・・」
「大体ここはどこなんだ? どう考えてみてもキャンプ場の近くじゃないぜ」
丈の言葉を遮り、ヤマトが疑問をぶつけた。
「そうですね、植物がまるで亜熱帯みたいだ」
「ほんまや!」
「え、わかるの!?」
「いんや」
テントモンの適当さに、光子郎は思わず肩を落とした。
「降りてきたんだから、戻る道もあるはずだ」

「そうね。とにかく戻ってみたら、どうしてこんなところに来たのか何か手がかりがあるかも」
丈の考えに空が賛同した。
「ええ!?　でもさっきみたいのが他にもいるんじゃない？」
ミミはクワガーモンがトラウマになっているみたいだ。
「いるわよ」
そんなミミに対して、パルモンは森には普通に凶暴な野生デジモンが居ると伝える。
「ほらぁ!!」
「危険はおかしたくないな・・・・」
「他の人間は？」
太一が話題を変えてアグモンに訊ねた。
「にんげん？　太一みたいな？」
「うん」
「そういえば、この前一人会ったな・・・・」
「えっ？」
アグモンの答えに太一は唖然とする。
「本当にいたのか!?人間が・・・・」
「うん。黒いテイルモンを連れている人間だった」
「黒いテイルモン・・・・？」
聞いたことのないデジモンの名前に首をかしげる太一。
「そういえば、あの見せかけの木・・・・あそこには確かに誰かが生活をしている跡がありましたし・・・・」
光子郎は最初にクワガーモンに襲われた際に逃げ込んだホログラムで出来た木の中で、あそこには確かに生活感会ったことを思い出す。
「なぁ、ソイツ、どこに居るのか知っているか!?」
「わかんない。一回しか会っていないし・・・・」
「テントモンも知りませんか？」
「わてもあの人がどこへ行ったのか皆目見当もつかへん。すんまへんなぁ」

折角、人が居ることが分かったのだが、その人物がどこに居るのか、分からないことに落胆する太一たちだった。

6話

ファイル島と呼ばれる見たこともない聞いたこともない島に突然送られた太一たち・・・

そこで、彼らはデジモンと呼ばれる未知の生物と出会う。

そして、クワガーモンと呼ばれる凶暴なデジモンに襲われ崖から落ちるが、ゴマモンのおかげで何とか助かった。

岸へと無事についた時、アグモンに自分たち以外の人間の姿を見たことがないかと訊ねると、アグモンは、黒いテイルモンを連れた人間の姿を見たと言う。

しかし、アグモンたちはその黒いテイルモンを連れた人間がどこに行ったのかは分からないと言う。

「確か、ファイル島・・・って言っていたわね」

「本当に島なのか？」

「聞いたことない名前ですよね」

「日本じゃないのか・・・・？」

「まぁ、少なくとも・・・」

「どうする？さっきいた場所に戻りますか？もしかしたら、あのホログラムで出来た木に人が戻ってくるかもしれませんし・・・」

「えぇ～あの森に戻るの!?」

最初に落ちた場所に戻るか、それとも別の場所に行くか、今後の方針が決まらない中、

「とにかく行こうぜ！　ここでじっとしていてもしょうがないよ」

太一は行動あるのみと言わんばかりに歩き始める。

「おい、どこに行く気だ!?」

ヤマトは意気揚々として歩き出す太一を止めた。

「さっき、海が見えたんだよ！」

「海？」

「そう。だから、行ってみようぜ！」

太一はみんなの返事も聞かず、アグモンを連れてずんずんと進んで

いった。
「行ってみるか？」
「ええ」
人が居るのが分かったのだが、肝心の居場所が分からない。
いつまでもここにいては先程のクワガーモンみたいな凶暴なデジモンに襲われかねない。
だからと言って、先程ほどの場所へ戻るにしても距離があり過ぎる。
それならと思い、ヤマトも空も太一についていく。
他のみんなも同じだった。
ただ一人、力説していた丈を除いて・・・・
「丈ー！　早くおいでよー！」
彼はゴマモンの呼ぶ声で自分が取り残されていることを知り、慌ててみんなを追いかけた。
太一を先頭に、一同は川沿いに道を進んでいった。
なお、ゴマモンは歩くよりも泳いだ方が早いのか、川で泳ぎながら進んでいる。
「見たことのない木ね」
「亜熱帯かと思ったけど、どうやらそれも違うようです」
空と光子郎が辺りを見渡しながら呟く。
「やっぱり日本じゃないのかな、どうも妙だ」
丈は未だにここが日本だと思い込んでいる様だ。
「大体このデジタルモンスターっていうもんからして妙だぞ」
「へ？」
ヤマトの言葉に、ガブモンが首を傾げる。
「デジタルモンスター……電子的なモンスター……」
「普通はデジモンでよろしいで」
デジモンたちの中では、略称で呼ぶのが常識のようだ。
「デジタルって言うような電子的な感じしないなぁ・・・・」
「え？　電気でっか？　出せますで、ほれ」
テントモンはバチバチと電気を出す。

「やめろよ！」
光子郎は慌てて止める。
こんな近くで電気なんて出されて感電したら大変だ。
「そういえば、黒いテイルモンを連れた人は、わてらの事を見ても、そんなに驚いてへんかったなぁ・・・」
「それはデジモンを連れた後だったからじゃないんですか？」
「そうかもしれへんけど・・・」
テントモンはあの時、出会った黒いテイルモンを連れた人間が光子郎たちとは異なり、あまりにもデジモン慣れをしている印象を感じていた。
「パタモンってさっき飛んでいたよね？」
「飛べるよ、ほら」
パタモンは耳らしき部分を一生懸命にはばたかせながら、飛んでいた。
「うわあ！　すごーい！　でも歩いた方が速くない？」
しかし、タケルの歩くスピードより遅いのが難点のようだ。
「あたしの方が速いわよ、ほら！」
ピョコモンも対抗心からか、両手の翼を羽ばたかせながら飛ぶが、
「どっちも変わらないわよ」
ピヨモンも歩いていた空に先を越されていた。
まさに団栗の背比べであった。

「パルモンって、何だか植物みたいよね」
「そうよ。光合成も出来るのよ」
「すごーい。やってやってー！」
「ミミ、光合成って何かわかっている？」
「えっ？よく知らないわ。どんなことなの？」
「いやあ、あたしもよく知らないんだけど」
ミミとパルモンの漫才の様なやりとりはみんなから気づかれずにスルーされた。
「ここにはデジモンしかいないんだよな？」

「そうだよー。でも、太一たちが来る前に確かに一人は居たよー」
「さっきのクワガーモンもデジモンなのか？」
「そうだよ」
　太一の質問にアグモンが答えていく。
「あんなでっかいのがいるなんて……他にもいるのかな？」
「ここにはデジモンしかいてませんって、でも、アグモンの言うとり、確かに光子郎はんらが来る前に一人、人間が居てはったわ・・・・」
　アグモンもテントモンも太一が来る前、確かに自分たちは黒いテイルモンを連れた人間と出会ったと主張する。
　彼らが嘘をついている様子もない。
「ん？　海の匂いがしてきた！」
「おお！　見えたよ！　海だーい！」
　ガブモンに続いて、ゴマモンが叫ぶ。
　一同は海岸へとやってきた。
　すると突然、
　ジリリリリ・・・・ン
　と、電話の音が鳴り響いた。
「ああ？」
「こんなところで電話の音……？」
　気になった太一たちは、海に向かって走り出した。
　海には七基の電話ボックスがあった。
　こんなところに電話ボックスなんて妙だと感じながらも、太一はさっそく家に電話しようと電話ボックスに駆け込み、電話をするが、受話器の向こうから聞こえてくるのは出鱈目な情報ばかり。
　太一たちは早々に切り上げたが、丈は諦めずに電話をかけ続けている。
「結構しつこい性格しているんですね」
　光子郎はそんな丈を見て、何気に酷いことを言う。
「丈らしいよ」
　太一は笑いながら言った。
「どこにかけても、聞こえてくるのはでたらめな情報ばかりだな」

「もう諦めて移動しようぜ」
「ちょっと待て！」
立ち上がる太一をヤマトが止める。
「こっちからかけられなくても、向こうからかかってくる可能性があるんじゃないか？　さっきみたいに」
「ここでじっとしていても、時間の無駄だよ」
「しばらく様子を見たらどうだと言っているんだ！　みんな疲れているんだぞ！」
ヤマトの言う通り、にみんな、疲れた表情をしている。
特に体力のないタケルとミミの疲労は目に見えている。
「お腹も減ってきましたね」
「そうだなー。お昼もまだだったもんな・・・よし、休憩だ！　休憩！」
休憩することになり、空はみんなの持ち物を訊ねる。
その時、皆は、空から落ちてきたあのポケベルの様な機械を持っていたことに気づくが、今は役立ちそうにない。
今は自分たちの空腹を満たす食べ物が役立つ。
何か食べ物はないか？
役立つモノはないか？
その結果、タケルが持っていたお菓子、丈が持っていた非常食、ミミが持っていたサバイバルキットが役立ちそうだった。
タケルのお菓子と丈の非常食を人数と日数で分ける。
デジモンたちは自分で食料調達はするので、大丈夫だと言うが、お腹が減っている様子に見える。
太一は自分の分の非常食をアグモンに食べさせていた。
「どうだ？うまいか？」
「うん」
「あぁーそれは人間用だって言ったのに!!」
「いいじゃねぇか、別に」
パートナーデジモンの中でアグモンだけはこうして食にありつけた。
休憩していると、ピヨモンがバッと立ち上がった。

「どうしたの？」
「……来る！」
海の方をキッと鋭い目で睨みながらピヨモンはそう言った。
次の瞬間、砂から水が吹き出した。
その水で、どんどん電話ボックスが破壊されていく。
そして砂の中から現れたのは大きなヤドカリのようなデジモンだった。

シェルモン
レベル：成熟期　タイプ：軟体型デジモン　属性：データ
「ネットの海」の浅い海底に棲むヤドカリの様なデジモン。
貝殻の中に住み着いたカメの様な風体をしているが、実際は軟体動物のように柔らかい体をしている。
成長すると体がどんどん大きくなるため、その度に住処を替え小さな岩山程の大きさになってしまう。
また、体がすっぽり入るものなら、何にでも住み着いてしまう習性を持っている。
知性は低く、好戦的な性格なのでシェルモンに出会ったら気をつけねばならない。
必殺技は、液体を高圧で発射する『ハイドロプレッシャー』。

「シェルモンや！」
「シェルモン!?」
「この辺はあいつの縄張りやったんか！」
「シェールー!!」
「皆、こっちへ！」
丈が崖を登るが、シェルモンに見つかり水鉄砲で落とされる。
「うわぁぁぁぁぁー!!」
「丈ー！」
海で泳いでいたゴマモンがこちらに戻るが、水鉄砲でやられていた。

「行くぞ、みんなー！」
「頼んだぞ、アグモン！」
「ベビーフレイム！」
「プチファイヤー・・・・あれ？」
「マジカルファイヤ・・・・あ？」
「プチサンダー・・・・ああ？」
アグモン以外のデジモンの必殺技は不発に終わる。
そしてシェルモンの水鉄砲でデジモンたちが吹き飛ばされてしまった。

「アグモン！」
「くそぉ・・・・」
アグモンだけは立ち上がり、再びシェルモンに向かっていく。
「エアーショット・・・・あれ？うわぁぁー！」
「ポイズンアイビー・・・・・あら？いやぁぁぁぁぁー！」
「ベビーフレイム！」
やはり、アグモン以外のデジモンの必殺技は不発に終わる。
「なんでアグモンだけが!?」
「すんまへん、腹がへって・・・・」
「え？」
「ガブモン！」
「力が出ない～」
テントモンとガブモンは息絶え絶えにそう答えた。
「そうか、さっきアグモンはご飯食べたから！」
空がピヨモンを抱えて声を上げた。
「アグモン、俺たちだけでなんとかするぞ！」
「わかった太一！」
アグモンは太一さんの声に頷くと、再びシェルモンの元へ駆け出した。

その頃、八幡とカマクラは、クワガーモンを倒し、一度ベースとな

るホログラムで出来た木に戻ったその時、
「ん？靴の後・・・」
そこには人間の靴の痕があった。
「誰か来たってことか？」
「もしかして、ＤＡＴＳの隊員か？」
「いや、靴の大きさからして俺と同世代の大きさだ・・・誰か他にも俺と同世代の人間が・・・あっ・・・」
そこで八幡は、ここに来た時、奇妙な集団生活をしているデジモンたちの事を思い出した。
たしかあの場に居たデジモンは七体・・・
そして海に居た時、見た進化の光も七つ・・・
「もしかして・・・」
八幡はここに来たのは、あの奇妙な集団生活をしていたデジモンたちのテイマーではないかと思った。
テイマーならば、デジヴァイスを所持している筈だ。
近くに居るなら、デジヴァイスに反応がある筈。
八幡はデジヴァイスをサーチャーモードにして、他のデジヴァイスの反応を探る。
すると、さっきまで自分たちが居た海岸に七つのデジヴァイスの反応があった。
「入れ違いかよ!!」
デジヴァイスの反応に思わず突っ込んでしまう。
「いくぞ、カマクラ」
八幡は寝床に隠してあった食料や薬草を持ち、ネフェルティモンに進化したカマクラの背中に乗り、海岸を目指した。
その海岸では太一のアグモンが成熟期のグレイモンに進化した。

グレイモン
レベル：成熟期　タイプ：恐竜型デジモン　属性：ワクチン
頭部の皮膚が硬化して甲虫のような殻に覆われた恐竜型デジモン。
鋭い爪、巨大な角を持った全身凶器のような体で、非常に攻撃的な

デジモンである。
しかし、知性が高く手なづけることが出来れば恐らくこれほど強いモンスターはいない。
必殺技の『メガフレイム』は口から超高熱火炎を吐き出し全てを焼き払う。

「メガフレイム!!」
グレイモンが口から超高熱火炎を吐き出し、シェルモンは頭部から水鉄砲を放った。
水が蒸発して、水蒸気が湧き出ている。
互いに必殺技をぶつけ合うが、成熟期に進化したばかりのグレイモンと成熟期の時間が長いシェルモンの戦いは、時間が長引けばシェルモンの方が有利であった。
徐々にシェルモンの水鉄砲がおしてくる。
このまま負けてしまうのか？
その時、
「ロゼッタストーン!!」
シェルモンの頭に岩の塊が落ちてきた。
「シェェェルゥゥゥゥー」
突然の頭部への奇襲によろめくシェルモン。
グレイモンはその隙を見逃さず、頭の角にシェルモンを乗せて海へと放り投げる。
「シェェェルゥゥゥゥー」
叫び声を上げながらシェルモンは海の彼方へと落ちた。
そして、グレイモンは光を帯びて、アグモンに戻った。
「ア、アグモン！　戻ったんだ・・大丈夫か？アグモン!?」
「太一ぃ～・・・・」
「ん？」
「腹減ったぁ・・・・」
「は、はは」
思わず太一は笑みをこぼした。

そして、太一たちが空を見上げると、そこには黒い翼の生えた鉄仮面を被った猫の様なデジモンとその背中に乗る同世代の少年が居た。

7話

ファイル島の海岸において、野生の成熟期デジモン、シェルモンとの戦いで、太一のアグモンは成熟期のデジモン、グレイモンに進化した。

しかし、いくらグレイモンの力が強力でも成熟期に進化したばかりのグレイモンと成熟期に進化した期間が長いシェルモンでは、長期戦はグレイモンには不利だった。

徐々に押され始めるグレイモン。

そこへ、突然、シェルモンの頭に岩が落とされる。

頭部に奇襲を受けたシェルモンに隙が生まれる。

その隙を見逃す事無く、グレイモンはシェルモンを海へと放り投げる。

シェルモンを追い払ったグレイモンは成長期のアグモンに退化する。

そして、空には鉄仮面を被り、黒い翼を生やした猫の様なデジモンとそのデジモンの背中に乗る一人の少年の姿があった。

「だ、誰だ?お前!?」

太一が声を上げる。

「あっ、あの人だよ!!黒いテイルモンを連れた人間」

「なにっ!?あいつが・・・・」

「間違いあらへん」

「うん。でも、前に連れていたのは黒いテイルモンだった・・・・」

「あんなデジモン、見たことないよ・・・・」

パートナーデジモンもネフェルティモンは見たことがないと言う。

そりゃ、ネフェルティモンは通常の進化とは異なる進化をしたデジモンなので、彼らが知らないのも無理はない。

ネフェルティモンは海岸の砂浜に降りる。

太一たちは砂浜に降りたネフェルティモンを警戒する。

しかし、先程進化したアグモンも初めての成熟期の進化にて、エネ

ルギーを使い果たし空腹状態。
戦える状態ではなかった。
だが、このファイル島で初めて出会った人間。
パートナーデジモンの話では彼は自分たちよりも先にこのファイル島に来ていたので、この島の事を知っているかもしれない。
ネフェルティモンは光ると黒いテイルモンに戻った。
「あっ、やっぱりあの時の人間だ」
「それで、お前は誰なんだ？」
「失礼な奴だな、他人の名前を聞くときは、まずは自分の名前を名乗るのが礼儀じゃないか？」
「お、おい、カマクラ」
黒いテイルモンはギロッと太一を睨みつけ、テイマーらしき少年は黒いテイルモンを諌める。
「あ、ああ・・・そうだったな・・・俺は八神太一。お台場小学校の５年生だ」
「武之内空よ」
「石田ヤマトだ」
「城戸丈、６年だ」
「泉光子郎です」
「高石タケル。小学校２年生だよ！」
「太刀川ミミよ」
太一たちは自己紹介をする。
「俺は比企谷八幡、千葉の総武小学校の５年で、こっちは俺のパートナーのカマクラ」
（こいつ等の親って、ミーハーなのか？子供に有名人の名前をつけるなんて・・・）
八幡は太一たちの名前を聞いて、テレビとかで聞いたことのある有名人の名前が含まれていることに気づく。
「かまくら？そいつ、かまくらって名前なのか？」
変わった名前をしているデジモンだと思った太一。
「黒いテイルモンじゃないんだ・・・」

「あっ、カマクラって言うのはコイツのニックネームだ。デジモンの名称じゃ、ブラックテイルモンだ」
「そのまんまだね」
　アグモンは黒いテイルモン＝ブラックテイルモンと安直だと思った。
「アグモンたちはあの時、会ったコロモンたちでいいのか？」
「うん、そうだよ」
「成長期に進化できたんだ・・・それにテイマーとも無事に出会えたようだな」
「成長期？テイマー？なんだ？そりゃ？」
　聞いたことのない単語に首を傾げる太一。
「と、とりあえず、デジモンたちも疲れているみたいだし、ご飯食べながら話しましょう」
　空が食事をしながら話そうと提案し、デジモンたちも子供たちもそれに賛成する。
「えっと、比企谷君も加わったから、食料は・・・」
　光子郎は、八幡が加わったことで、自分たちがもっていた食料を更に分ける計算をするが、
「あっ、食べ物は俺、持っているから大丈夫だ」
　八幡はこれまでのサバイバル生活にて確保した食料があるので大丈夫だと言う。
「えっ？食料もっているの!?」
　ミミは八幡が食料を持参していることに声をあげる。
「これまでのサバイバル生活でカマクラと確保した食料だ。食べられる植物や魚、あとは肉かな？」
「えっ!?お肉!?」
「どこで手に入れたの!?」
「ファイル島の森の中」
「・・・それってもしかして、デジモンの肉じゃないよな？」
　太一は八幡が確保した肉がデジモンを殺して得た肉じゃないかと疑う。

「いや、畑から取った」
「畑⁉」
「肉が畑にあるわけないだろう⁉」
「？」
八幡はどうも太一の言動に違和感を覚える。
テイマーと言う単語も知らなければ、デジモンのレベル、肉の畑についてもしらない。
これらのことはテイマー講習の講習内容に入っていることばかりだ。
それを太一は知らないという。
「それより早くご飯にしよう」
タケルはもうお腹がペコペコなのか、両手でお腹を押さえながら食事にしようと言う。
「そうだな」
タケルのお菓子と非常食をデジモンと分けながら食べる太一たち。
八幡はマンガ肉をカマクラに与え、自らもマンガ肉を食べている。
太一たちとパートナーデジモンたちは気になるのか八幡とカマクラをチラチラと見ている。
（き、きまずい・・・・）
「えっと・・・少し食べる・・・？」
「えっ？くれるの⁉」
「欲しい⁉欲しい⁉」
パートナーデジモンたちは非常食やお菓子では足りないのか、八幡に近づく。
八幡がカバンからマンガ肉を取り出し、
「カマクラ」
「はぁっ⁉」
カマクラが爪でマンガ肉を真っ二つに割り、
「ほれ」
「ありがとう⁉」
「僕にも頂戴⁉」

「はいよ」
デジモンたちに配る。
パートナーデジモンたちは半分になったマンガ肉を食べ始める。
太一たちは羨ましそうに見つつも、あの肉が何の肉なのか分からないので、食べたくても食べられなかった。
「それで、比企谷君はいつからこのファイル島に？」
空は八幡にいつからファイル島に居るのかを訊ねる。
「うーん・・・かれこれ、一週間ぐらいかな？」
『一週間!?』
八幡がファイル島に一週間滞在していることに驚く太一たち。
「それで、その間、人間は!?人間は見なかったのかい!?」
丈は、八幡に一週間の間、人間の姿を見なかったと問う。
「居たら、此処にいないって・・・」
もし、ＤＡＴＳの隊員に見つけてもらっていたら、とっくに人間界へ戻っている。
「そりゃそうだ」
ヤマトが納得するようにうなずく。
「比企谷さんは何故、どうやってここに？」
「パソコンの画面に変なデジモンが表れて、気づいたら・・・そちらは？」
「俺たちはサマーキャンプで山に来ていたら、空からこれが降ってきて、津波に呑まれたと思ったら、ここに居たんだ」
太一は八幡に自分のデジヴァイスを見せる。
「そ、それはっ!?」
(なんで、初期型のデジヴァイスを持っているんだ・・・？よく言えばプレミアム品、悪く言えば骨董品だぞ、それ・・・)
「比企谷さんも此処にいて、デジモンを連れているってことは持っているんですか？」
光子郎は八幡にデジヴァイスを持っているのかと訊ねる。
「ん？あ、ああ・・・デジヴァイスね。俺のはコレ」
「僕たちの機械と全然違う形ですね」

太一たちのデジヴァイスはポケベルの様な形であるが、八幡のデジヴァイスはスマホの様な形状をしている。
「それで、比企谷君はこれからどうするの？」
ミミが八幡に今後の方針を聞いてくる。
「うーん、最終的には人を見つけて、元の世界に戻らないと・・・・」
「じゃあ、俺たちと一緒に行かないか？」
太一が八幡を誘う。
「えっ？いいんですか？」
「こうして、出会ったんだ。困った時はお互い様だろう？」
「どうも」
こうして八幡とカマクラは、太一たちと一緒に行動することとなった。
「それで、さっき言った、成長期やテイマーってなんだ？」
太一は八幡がさっきアグモンに言った言葉の意味を聞いた。
「ああ、まずテイマーって言うのは、デジモンの育成師・・・・パートナーデジモンを持つ人間の名称だ」
「パートナーデジモンを持つ人間・・・・」
「なんだか、比企谷さんの口調だとデジモンを持つ人間が沢山いるみたいな感じがするのですが・・・・」
光子郎が八幡の説明を聞いて違和感を覚える。
「それで、成長期ってやつは？」
ヤマトは次に成長期について聞いてくる。
「成長期はデジモンのいわばレベルのランクの内の一つですね」
「レベルのランク？」
「デジモンにもレベルがあるのか？」
「ええ、下から幼年期、幼年期ii、成長期、成熟期とデジモンは進化していきます」
「じゃあ、どうして、アグモンはグレイモンからアグモンに戻っちまったんだ？」
「僕にもよくわかんないや」
「多分、エネルギー切れでしょう」

アグモン自身、なぜ退化してしまったのか、原因は分からないというが、八幡は、単にエネルギー切れだと言う。
それから一行は海岸を後にして、また森の中に入る。
「ねぇ、カマクラ」
「カマクラ言うなよ・・・・」
森を歩いていると、ピヨモンがカマクラに話しかける。
「それで、なんだ？」
「さっき、変わったデジモンに進化していたけど、カマクラはもう、成熟期以上に進化できるの？」
「ああ、あれか・・・実はあの進化はあたしにもよくわかんねぇんだ・・・・」
「えっ？わからない？」
「ああ・・・これが関係しているって、八幡は言うが・・・・」
カマクラは首からぶら下げている赤い真珠の首飾りをピヨモンに見せる。
「それはなに？」
「八幡がここに来た時に、手に持って倒れていた・・・お前さんらのテイマーの下にデジヴァイスが送られたのと同じような要領さ」
「へぇー・・・・」
それから、しばらく歩くと、ミミがへばってしまった。
「もう疲れたー!!」
「もう少し頑張れよ、ミミ」
太一がミミを励ます。
「足が太くなっちゃう……」
「太い方がいいんだよ、ミミ。その方が体を支えるにも、土を蹴るにも」
アグモンはミミに足が太くなるメリットを話すが、
「あなたと一緒にしないで！」
ミミはアグモンに不機嫌そうに言った。
女の子なのに、アグモンみたいに太い足はちょっとねぇ・・・・
「そうよー！　足っていうのは根っこみたいな方が素敵なの！」

パルモンが足について別の意見を述べるが、
「それも嫌だー!!」
ミミはそれも拒否した。
「それにしても奇妙な色の夕焼けですね」
八幡にしては、もう見慣れたこのファイル島の夕焼け・・・
しかし、今日初めてこのファイル島にやってきた太一たちにとっては、それは奇妙な光景に見えたのだ。
「そろそろ日が暮れるみたいね」
「どうします？　暗くなってから進むと危険ですよ」
「そうですね・・・・・」
とは言っても、ここで野宿は気がのらない。
この辺には寝床にしていたホログラムで出来た木もなさそうだ。
直に野宿では凶暴なデジモンに襲われる危険性が高い。
「匂う・・・・」
「え？」
テントモンが急に飛び立った。
「匂いまっせ!!真水の匂いや!!」
そして、そのまま木の上にいく。
「あー!　飲み水確保や!　湖、湖でっせ!　あそこでキャンプにしまへんか!?」
「あたし賛成。もうこれ以上歩けない!」
「オイラ泳ぐー!」
「ゴマモン待てよ!」
丈はゴマモンの尻尾らしき部分を持って止めた。
「俺も今日はここまでにした方がいいと思う」
疲れて座り込むタケルを見ながらヤマトが言った。
「みんな疲れて腹も減ってきたしな」
「よーし、今日はあそこでキャンプだ!」
というわけで、一行は湖に向かった。

8話

ファイル島と呼ばれる未知の島に呼び寄せられた太一たちは海岸にて、シェルモンに襲われる。
その最中、太一のアグモンは成熟期のグレイモンに進化した。
しかし、徐々にシェルモンに圧される太一のグレイモン・・・
そこへ助けに入ったのは、鉄仮面を被った黒い翼をもつ猫の様なデジモン。
そして、そのテイマーである比企谷八幡と出会った。
八幡は、太一たちと話し合いの中で、違和感を覚えながらも、元の世界に戻るという共通の目的から、太一たちと行動を共にすることにした。
そして、今日は湖の近くで一夜を明かすことになった。
湖に到着するとそこなそれなりの大きさの湖だった。
「うわあ！　大きな湖！」
「ここならキャンプに最適ね！」
空が嬉しそうに言う。
「ねぇ、キャンプってつまり野宿ってこと？」
「まぁ、そうなるな」
「うそー！」
ミミと太一とのやり取りの中でこのようなことがあった。
（もともと、サマーキャンプでキャンプ場に来ていたんだろう？）
（あっ、でも、テントやロッジはないか・・・）
同じようなキャンプでも、野宿とテント泊では、大きく異なる。
（もし、アイツが一人でここに流れ着いていたら一人で、やって行けただろうか？）
そして、ミミがもし一人でファイル島に流れ着いたら、一人でやって行けただろうかと思った。
すると、湖の中州にあった一台の路面電車のパンタグラフにバチバチと電気が走ると、正面のライトが点いた。

「ライトが点いた！」
「路面電車だー！」
「どうしてこんなところに？」
「ねぇ、中に誰かいるんじゃないの？」
「行ってみようぜ！」
　路面電車に電気が点いたと言うことで、誰かいるのかもしれないと思い、路面電車に行ってみると、車内には誰も乗っていなかった。
「誰もいない・・・・」
（やっぱりね・・・・）
　八幡は何となく察しがついていた。
「まだ新しいですね」
「ふふ、ちゃんとクッションが効いている!!」
　車内には人間どころかデジモンもいなかったが、車内はまるで新車の様に綺麗で、座席のクッションも痛みや汚れなどなく、今夜はこの路面電車の中で眠れそうだった。
　ミミが嬉しそうに座席に腰かける。
「しかし分かんねえなぁ・・・この間の海辺の電話といい、どうなってんだ？」
「この世界で常識を求めるのは間違っているぞ」
　カマクラが太一にファイル島・・・デジタルワールドで人間界の常識を求めること自体間違っていると忠告する。
「ん？どういうことだ？それは・・・？」
「ここは、情報があふれるお前たち人間の世界の情報が集まり、それが歪んで実体化している世界だからな・・・」
「なんだか、まるで、この世界が異世界みたいに言うな・・・」
「異世界か・・・まぁ、当たらずとも遠からずだ」
「それって・・・」
「そろそろ飯にしまへんか？」
　テントモンの言葉をきっかけに、皆は分担して夕食の準備を始めた。
　太一もカマクラの言葉にもっとツッコミたかったが、彼自身、お腹

が空いたので、今は夕食のための準備を優先にした。
光子郎とタケル、そしてカマクラは魚釣りの担当になった。
「こら、ゴマモン邪魔するな！　そんなところで泳いだら魚が釣れないだろ!?」
釣り針を投げ付けようとしたら、ちょうどその場所でゴマモンが泳いでいた。
それを光子郎が叱る。
八幡はデジヴァイスのアプリを頼りに食べられる植物やキノコ、果物を取る。
その他に夜、路面電車の床に敷き詰める葉っぱなどもついでに集めた。
ミミが明らかに毒キノコっぽいキノコを取ろうとしていたので、八幡とパルモンが慌てて止めた。
「ミミ!!それ毒キノコ!!」
「イタリアの配管工の兄弟が食べていそうなキノコだけど、それを食べると幻覚症状による頭痛と腹を下すぞ」
「えっ!?うそっ!!」
ミミは慌てて毒キノコを捨てる。
「流石、植物を頭に生やしているだけあるわね。比企谷君もよく知っているわね」
「デジヴァイスにある程度の情報が入っているからな」
「すごーい!!私のデジヴァイスにはそんな情報ないのに・・・」
そんなやり取りをしながら、今日の夕食の食材は何とか集めることが出来た。
火に関しては、アグモンが焚き木に火をはいて火を点ける。
すると太一は火の上で魚を炙り始めた。
それをヤマトが止める。
「そんなことしたら身がくずれるだけだろ。それに、魚は遠火で焼くもんだ」
「やけに詳しいな、ヤマト」
辺りがすっかり暗くなった頃、皆は夕食を食べていた。

「タケル」
「なに、お兄ちゃん？」
「骨取ってやろうか？」
「頭からガブッといけ！」
タケルは太一からそう言われると頷くと、魚を頭から食べ始めた。
「・・・・」
すると、ヤマトの表情が曇ったように見えた。
（こいつも俺と同じ、下の兄弟には甘いみたいだな・・・・）
（まぁ、分からなくもないぞ・・・・石田よ・・・・）
八幡自身も下に妹がいる分、ややシスコンなところがある。
一方、カマクラは八幡の両親が彼に対して半ば育児放棄をしているのに、妹に愛情を注ぎこんでいるのを間近で見ているため、カマクラはあまり八幡の妹には好印象を抱いてはいなかった。
食事が終わり、
「空」
「ん？」
太一は水を汲んでいた空に話しかけた。
八幡も空の傍で水をくんでいた。
「タケルはヤマトのことお兄ちゃんって言っているけど、あの二人名字が違うよな？」
「うん」
「何でだ？」
「あたし、知らない」
「ふーん・・・・」
空は知らないというが、あの表情は知っているな・・・・
人間観察を得意とする八幡は空が本当は事情を知っているのだが、ヤマトの家の事情なので、他人である自分が口を出すのははばかれると思って嘘をついたのだろう。
（八神よ、少しは空気を読め、でないと将来苦労するぞ・・・・）
太一は真っ正直な性格なのだろうが、正直だけで世の中はやっていけない。

空が察しているように八幡もヤマトとタケルの関係を何となく察していた。
あれは近所のお兄さんや従兄弟に向ける信頼ではなく、血の繋がった兄弟に向ける信頼だ。
血がつながるのに、名字が異なると言ったら、原因は一つしかない。
「うーん……」
「どうしたんです？　先輩」
すると、丈が頭を悩ませながらこちらにやって来た。
「方角を確かめようと思って・・・・でも北極星が見つからないんだ」
（そりゃあ、ある筈がない・・・・ここは人間の世界じゃないんだから・・・・でも、何故それを理解していなんだ？）
八幡はここがデジタルワールドであることをまだ理解していない太一たちにますます違和感を覚える。
「そういえば、さっきカマクラがここは異世界みたいなところだと言っていたけど・・・・」
「確かに北極星がないんじゃ、そうかも・・・・」
「南半球なら、南十字星もあるはずだしね・・・・でも、南十字星もないとなると、やっぱり、カマクラ君の言う通り、ここは異世界なのかもしれないな・・・・」
「ふわぁ～」
「眠いの？パタモン」
パタモンが大きなあくびをして、地面に伏せてしまった。
他のデジモンたちも眠そうだ。
「ふわぁ～そろそろ寝ようぜ」
「交代で見張りをした方がよくないですか？」
光子郎がこちらに歩み寄って言った。

「そうだな、順番を決めよう」
「女の子はやらなくてもいいだろ？」
「タケルもだ！」
「僕平気だよ！」

タケルがむっとして、ヤマトの服を掴む。
「いいから、お前はゆっくり休め」
タケルはあまり納得していない表情だ。
「だったら・・・・」
そこで、八幡が助け船を出す。
「君は明日の朝、一番に起きて見張りをするのはどうだ？」

「えっ？朝」
「そうだ。最後の見張りをする奴も、出発前少しでも休ませてやらないとキツイだろうし・・・・」
「わかった！それでいいよ！」
タケルは笑顔で元気良く返事をした。
「でも、寝るって言ってもお布団とかないのになぁー」
ミミが不満そうに言う。
この騒動に巻き込まれず、キャンプに参加していてもきっと寝袋だろうから、どのみち布団では眠れないだろう。
「おい、ガブモン。毛布がわりにその毛皮貸してくれよ！　俺、すっごく気になってたんだよな！　ガブモンの毛皮の下って、どうなってんの!?」
太一がガブモンの毛皮をひっぱがそうとしていた。
毛皮を剥がされたくないのか、嫌がっているガブモン。
「よせ！」
すると、ヤマトが太一を突き飛ばした。
「なにすんだよ!?」
「嫌がっているだろ!!」
「突き飛ばすことないじゃないか!!」
「やめて二人ともー！」
喧嘩している兄や太一の姿を見たくないのか、タケルが目に涙を溜めて二人を止める。
太一とヤマトはお互いを掴んでいた手を離すと、プイっと反対側を向いた。

「え、えーっと・・・最初の見張り番は・・・？」
「俺がやる！」
「次は俺だ」
　空気を変えようとした勇者丈を遮り、太一とヤマトは競い合って名乗り出た。
「わ、わかった。比企谷がヤマトの次、光子郎が比企谷君の次で、最後は僕だ。さあ、みんな路面電車の中で寝るんだ」
　見張りの順番を丈が決めて、太一とアグモンが外に残り、それ以外の皆は路面電車の中に入る。
「なぁ、カマクラ。退化・・・」
「しないからな!!」
　太一とガブモンのやり取りを見て、八幡は、カマクラに成長期の黒ガブモンに退化してくれと頼むが、速攻でカマクラから拒否された。
「えっ？カマクラってガブモンよりも上なの？」
　それを聞いたミミが意外そうに聞いてくる。
「あ、ああ・・・カマクラはこんなナリだけど、成熟期・・・グレイモンと同じレベルだ」
「へぇ～、てっきりパルモンと同じレベルだと思っていた・・・あれ？でも、なんで、アグモンは元に戻ったのに、カマクラは成熟期のままなの？」
「うーん・・・経験値とエネルギー消費の差かな？グレイモンはあの巨体を維持するのにエネルギー消費が多いんだろう」
「そっか、カマクラは小さいもんね」
「小さい言うな!!」
　カマクラはミミに怒鳴った。
　路面電車の床には食料調達の際についでに集めた柔らかい葉っぱが敷き詰められており、デジモンたちはそこで寝て、テイマーたちは座席の上に横になる。
　カマクラは八幡の腹の上に乗り、そこで丸まって眠る。
　それからどれくらいの時間が経っただろうか？
　突如、路面電車が揺れた。

地震かと思ったが、どうやら違った。
「モンスターが、出たんだ！」
「あれはシードラモンや!!」
窓の外を見ると、蛇の様な長い体を持つデジモンが居た。

シードラモン
レベル：成熟期　タイプ：水棲型デジモン　属性：データ
大蛇のような長い体を持った水棲型デジモン。
この長い体を使い、襲い来る敵に体を巻きつけ、敵が息絶えるまで締め上げる。
元来、知性というものを持ち合わせておらず、本能の赴くままネットの海を泳ぎ回っている。
必殺技は口から絶対零度の息をはきだし、水を瞬時に凍らせて敵に放つ『アイスアロー』。

皆が路面電車から出ると、
「うう、やっぱり地震だわ！」
ミミが地面に座り込んで叫んだ。
「島が……浮いて居ている！」
「動いているんだ！」
「何だかこの島をシードラモンが引っ張っているみたいだ！」
太一と光子郎は島の動向を見守っていた。
「そんなアホな！　シードラモンは殺気を感じん限り襲ってやきやしませんで！」
「うわぁ、止まった！」
突然島の動きが止まった。
「あんさんら、なにか悪いことしよりましたんかな!?」
「何にもしてない、何にもしてない！」
太一とアグモンは声を揃えて言ったが、
（本当か？）
シードラモンがあそこまで怒っているなんて、こちらからシードラ

モンにちょっかいを出した以外に考えられない。
「う、うわあ！」
テントモンが大きい葉っぱに乗った途端、吹っ飛ばされた。
「テントモン!!」
「なんで葉っぱがテントモンを!?」
光子郎は、どうして葉っぱがテントモンを襲ったのか分からなかった。
「いや、葉っぱじゃない!!あれはシードラモンの尻尾だ!!」
八幡があれはシードラモンの尻尾であることを指摘する。
「えええっ？あれって葉っぱじゃなくてアイツの尻尾だったのかよ!?」
「なんか心当たりがあるのか？」
「さっき、焚火の火が爆ぜて・・・」
「やっぱり、お前らのせいじゃねぇか!!」
カマクラがそう叫んだ途端シードラモンが島に尻尾をぶつけ、地面がさらに揺れた。
「うわあ！　やつがおこっている！」
シードラモンが沈んでいくと、島が再び動き始めた。
「うわぁ、島が流されていく！」
「あたし船酔いしそう・・・」
「吐くなら、向こうで吐けよ!!」
ミミが顔を青くし、手で口元を押さえる。
八幡はすぐそばでゲロをされてはかなわないので、離れた場所で吐けと言う。
すると島が電波塔に当たり、ようやく止まった。

9話

ファイル島での一夜を明かす為、湖の中州にある路面電車の中で、休んでいたら、突如、中州を大きな揺れが襲った。
地震かと思いきや、それはシードラモンによるものだった。
こちらから攻撃を仕掛けない限り、そこまで好戦的ではないシードラモンが暴れている。
その理由は見張りの為に焚いていた焚火が原因だった。
暴れ狂うシードラモン。
そして、中州は湖から飛び出ていた電波塔に当たり、ようやく止まった。
「やっと止まった・・・」
「でもこれじゃどこにも逃げられませんよ!!」
それを狙ったのかどうか分からないが、シードラモンが再び姿を表した。
「うわあ！　襲ってくるぞー!!」
「みんな、行くよ！」
「おっけぃ！」
アグモンたちはシードラモンへ向かっていく。
「マジカルファイヤー!!」
「エアーショット!!」
ピヨモンとパタモンの攻撃は効いている様子がない。
「ポイズンアイビー!!」
パルモンの蔦はシードラモンまで届かなかった。
「プチサンダー!!」
「ベビーフレイム!!」
テントモンとアグモンの攻撃も効果がなかった。
当然、カマクラ自慢のパンチやキックも今の状況ではシードラモンには届かない。
「アグモン、進化だ!!」

太一はアグモンを成熟期デジモン、グレイモンに進化させようとするが、
「さっきからやろうとしているんだけど、出来ないんだ・・・」
アグモンが振り返り、困惑の表情を浮かべる。
「カマクラ、お前の方は!?」
「あたしの方もダメだ・・・真珠から力を感じない・・・」
カマクラの方もどういうわけかネフェルティモンに進化できない。
カマクラが言うには赤い真珠の首飾りから力を感じないのだと言う。
「くっ、カマクラの方もか・・・」
カマクラがネフェルティモンに進化できれば、空からシードラモンを倒すこともできるし、数回に分けることになるが、この中州から脱出することもできる。
しかし、肝心のカマクラがネフェルティモンに進化できないので、どちらも実行不可能だった。
「タケルー!!」
そんなときヤマトの声が聞こえた。
彼の声を聞き、タケルはそちらに向かう。
「お、お兄ちゃん!!」
ヤマトは必死に泳いで中州に向かっている。
彼はシードラモンが出て来る前、中州から出ており、向かい側の岸でハーモニカを吹いていた。
「お兄ちゃん!　うわあ!」
がくんと中州が揺れ、タケルが湖に落ちた。
湖に落ちたタケルはゴマモンが助けた。
ゴマモンに助けられたタケルを見て、ヤマトはホッとした表情をした。
「いいぞ、ゴマモン!」
「ヤマト、早く!」
「ヤマト、シードラモンやー」
そんなヤマトにシードラモンがすぐ傍に迫っていた。

中州にいる連中よりも、湖の中に居る相手の方が狙いやすいと判断したのだろう。
「ゴマモン、頼むぞ！」
ヤマトはタケルをゴマモンに託し、
「おーい、シードラモン！　こっちだ！」
ヤマトが泳いでシードラモンを挑発した。
「プチファイヤー!!」
ガブモンの攻撃をするが、動きは全く止まらない。
「うわぁ！」
そうこうしているうちに、ガブモンが島の方へ吹き飛ばされる。
「ガブモン！　うわあ!!」
ヤマトが叫ぶと、シードラモンの尻尾に捕らえられ、水中に引き込まれた。
「お兄ちゃん!!」
島にあがったタケルが叫ぶ。
空とミミが心配そうに駆け寄る。
「僕のせいだ！　僕を助けようとしてお兄ちゃんは!!」
「ヤマト!!」
湖から出てきたヤマトはシードラモンの尻尾で締め付けられていた。
「まずい、まずいでっせ！　シードラモンは1度掴んだ相手は息絶えるまで締め付けるんや!!」
「お兄ちゃーん!!」
ヤマトは更に締め付けられた。とても苦しそうだ。
「パタモンお願い、お兄ちゃんを助けて!!」
「ぼ、僕の力ではシードラモンに通用しない・・・・ガブモン、お前なら」
「無理です！　俺にはそんな力は・・・」
「うわあ!!」
そんな間にもどんどんヤマトは締め付けられる。
「お兄ちゃん!!」
「おい、ガブモン！　無理とか言っている場合じゃないぞ！　ガブモ

ン、お前は本当にこれでいいのか!? このままじゃあ、お前のテイマーがシードラモンの餌になるぞ・・・お前は長い間、石田を待っていたんじゃなかったのか?」
八幡が、ガブモンに檄を飛ばす。
「そ、そんな・・・」
ガブモンはシードラモンに締め付けられているヤマトを見つめた。
「ヤマトォ!!」
ガブモンがヤマトの名前を叫ぶ。
その途端、ガブモンは光り始めた。
ガブモン進化――――ガルルモン
すると、ガブモンの姿は大きな狼の様なデジモンに進化した。

ガルルモン
レベル：成熟期　タイプ：獣型デジモン　属性：ワクチン
青白銀色の毛皮に体を覆われた、狼のような姿をした獣型デジモン。
その体毛は伝説のレアメタルと言われている「ミスリル」のように硬く、肩口から伸びているブレードは鋭い切れ味を持っており、触れるものを寸断してしまう。
極寒の地で鍛えられた筋肉と激しい闘争本能を持ち、肉食獣のような敏捷性と標的を確実に仕留める正確さを持っており、他のデジモンからは恐れられている存在。
しかし、知性が非常に高く、主人やリーダーと認めた者に対しては忠実に従う。
必殺技は口から吐き出す高熱の青い炎『フォックスファイアー』。

ガルルモンに進化したガブモンはヤマトを助けるべくシードラモンの尻尾に攻撃をした。
そして見事に救出成功し、ヤマトはそのまま湖の中に落ちた。
ヤマトから目を移すと、ガルルモンはシードラモンに噛み付いていた。

その間にヤマトは泳いで島へ向かう。
しかしガルルモンは尻尾で叩かれ、湖へ沈んでいった。
「お兄ちゃん大丈夫!?」
タケルがヤマトに駆け寄る。
「俺よりガブモンが・・・」
ヤマトが心配そうにガルルモンを見つめる。
だが、予想に反して、ガルルモンは平然と浮かび上がった。
そして、何故かシードラモンはガルルモンに触れる度に痛がっている。
「ガルルモンの毛皮は伝説の金属ミスリル並の強度なんや!」
「何ですか、伝説の金属って?」
「伝説やさかい、わても見たことないさかい、知りません」
「物知りなんだかそうじゃないんだか分かんねえやつだな、テントモンって」
「んなアホな!」
テントモンのコントはさておき、ガルルモンとシードラモンの戦いはまだ続いている。
シードラモンが口から冷気を吐くと、ガルルモンが凍っていった。
「あれはシードラモンの必殺技、アイスアローや!!」
「解説どうも・・・」
しかし、毛皮が伝説の金属並に硬いおかげか、ガルルモンは凍らずに氷が崩れていった。
「フォックスファイアー!!」
ガルルモンの必殺技がシードラモンの口向かって放たれる。
火と氷のぶつかり合いが続いていたが、火の勢いの方が強く、シードラモンに見事命中した。
「ぐぎゃぁぁぁぁぁー!!」
口から煙を吐き、シードラモンは湖に沈んでいく。
(うーん・・・でも、事の詳細を考えると、悪いのはこっちだったからな・・・なんか、アイツには悪いことをしてしまったな・・・)
元々、寝ていたであろうシードラモンの尻尾に火を落としてしまっ

たのはこちら側のミスだったので、シードラモンが怒るのも無理はなかった。
　それから、電波塔に引っ掛かっていた中州はゴマモンのマーチングフィッシーズに動かしてもらい、元の位置に戻した。
　すべてが終わったころには夜が明けていた。
「は、八幡・・・」
「ん？」
　ガブモンが恐る恐る八幡に話しかけてきた。
「さっきはありがとう。八幡の後押しがなければ俺は進化出来なかったよ」
「いや、進化できたのは、お前自身の力だ・・・俺はただきっかけを与えただけにすぎない」
「そうかもしれないけど、結果的に進化出来て、ヤマトを助けることが出来たのは事実だから、お礼は言わせてもらうよ。ありがとう」
「・・・」
　ペコっと頭を下げて礼をいうガブモンに八幡はガブモンをギュッと抱きしめる。
「は、八幡？」
　突然、自分を抱きしめる八幡に困惑するガブモン。
「ガブモン、お前って素直な奴だな・・・俺のカマクラとは大違いだ!!」
「オイ・・・」
　そんなガブモンと八幡のやり取りをカマクラはジト目で見ていた。
「ふわぁ～疲れたー！」
　一行は陸に上がり、地面に座り込んだ。
　寝不足なせいもあり、全体的に元気がない。
「でも、どうして今度はガブモンだけが進化したんでしょうね？」
　光子郎が疑問を口に出す。
「あ！　もしかするとヤマトくんがピンチだったから？」
「この前、アグモンが進化したときも俺が危機一髪のときだった」
　太一は少し考え込んだ後、そう呟いた。
「彼らが進化するのは、僕たちに大きな危機が迫ったときですか？」

「そうよ、きっと」
　そのとき、空にミミが寄りかかった。
「ん、なに？　ミミちゃん？」
「もうここで寝る」
　そう言うとミミさんは地べたで眠り始めた。
「ふふ、たった一日ここで過ごしただけなのに、たくましくなったね」
「そのうち僕みたいなガッチリした体になるね、きっと！」
「あたしみたいな翼も生えるかもね！」
「そんなのいやぁ・・・・」
　ミミは寝言のように呟いた。
「翼は翼でも、飛べない翼はあってもねぇ・・・・」
　八幡は飛べない翼をもらってもただ邪魔になるだけだとボソッと呟く。
　それから、一行はその場でゴロッと横になり、ひと眠りをしてから、出発することにした。

　湖の岸でひと眠りした後、一行が森の中を歩いていると、変な音をした何かが上空を通った。
「ん？」
「何の音だ？」
　皆が空を見上げると円形の何かが空を飛んで行った。
「歯車みたいだったな」
「空飛ぶ円盤じゃない？」
「歯車型の隕石だったりして」
「何にしても、いい感じのするもんじゃないな」
「そうですね」
（何か嫌な予感がする・・・・）
　皆が空の彼方に飛んで行った黒い歯車を見ていると、
「うわぁっ！」
　そのときタケルが足を踏み外し、転んでしまった。

「いててて……」
「大丈夫か？えっと・武石」
八幡がタケルを抱き上げる。
「いったぁ……けど、大丈夫。我慢する」
「我慢しなくていいのよ？　痛かったら痛いっても言っていいんだから」
「そうだぞ」
「……うん。本当はちょっとだけ痛い」
空と八幡のその言葉に、タケルは正直に言った。
「大丈夫？怪我してない？」
「うん！」
タケルは頷いてくれたが、やはり痛いのだろう。
彼の無理やりの笑顔だった。
しかし、大きなけがはなく、軽い打ち身だった。
「大丈夫？　タケルー！」
パタモンがタケルに駆け寄る。
「あんさんに言われたないなぁ」
テントモンがパタモンに鋭いツッコミをかました。
「もし、痛かったり、腫れてくるようならば、遠慮なく言え、一応、薬草は持ってきたから」
「うん、ありがとう」
八幡が鞄の中の薬草を見せると、タケルは八幡に礼を言う。
「さっ、行きましょうか」
「そうだ。泣き言言ったって始まらないからな！」
「そうは言っても……どっちに行ったらいいなんて誰にも分からないし……」
空とヤマトは先に進むよう促したが、太一は珍しく渋っていた。
「それは確かにそうだけど……」
「あたしは空がいてくれればそれであーんしん」
ピヨモンは空にずっと擦り寄っていた。
「そんな１００％安心されちゃっても……困るんだけどなぁ。責任と

れないよ？」
「ひゃくぱー？」
「い、良い良い。気にしなくて」
「せきにんとれ？」
「いいってば！　気にしないで」
「あたし、空が喋っていること、いーっぱい知りたい！　教えて！ねー？」
「そんなの知らなくていいよ」
　ピヨモンは空のことが大好きなようだ。
　口調もなんか真似ているし・・・・
（オウムか？あいつは・・・・）
　鳥で真似をすると言うことで、八幡の脳裏にはオウムの姿がチラつく。
（そういえば、オウムっぽいデジモンっていたよな・・・あのピヨモンもあれに進化するのか？）
　ピヨモンが将来進化したら、オウムっぽいデジモンに進化するのかと空にじゃれついているピヨモンを見ながらそう思う八幡だった。
「何じゃれてんだよ！」
「余裕だな」
　ヤマトと太一がそんな空とピヨモンをちゃかす。
　空たちはいつの間にか最後尾になっていた。
「好きでじゃれているんじゃないわよ！」
　空は少し怒りながら、皆を追いかけた。
「ピヨモンは人懐っこいデジモンなんや」
「なるほど。デジモンによってそれぞれ性格が違うんですね」
（姿形も十人十色・・・人間だって同じだからな・・・）
　光子郎とテントモンの会話を聞いて、それぞれのパートナーデジモンを見た後、自身のパートナーデジモンを見る八幡。
「ん？なんだ？」
「いや、なんでもない」
「？」

八幡の視線に気づいたカマクラが何か自分に用があるのかと訊ねるが、八幡は何でもないと言い、カマクラは首を傾げる。
「そらーそらー！」
ピヨモンはニコニコと笑いながら、空と手を繋いでいた。
（はぁ～・・・カマクラもあれぐらい愛想がよければな・・・）
ちょっと、ピヨモンと空の関係を羨む八幡だった。

１０話

湖の中州で一夜を明かそうとしたら、焚火の火が爆ぜてシードラモンの尻尾に火が燃え移り、シードラモンが大激怒。
タケルが湖に落ち、ヤマトはタケルを助けるため、自らを囮として、シードラモンの注意を引く。
しかし、シードラモンに捕まり、絞殺されそうになった時、ガブモンは成熟期デジモン、ガルルモンに進化して、ヤマトを助ける。
湖を後にして、森を歩いていると、空に黒い歯車が飛んでいるのを見つける一行。
だが、この時、この黒い歯車がこの島における騒動の原因だと知る者はまだ誰もいなかった。
森を歩いている中、ピヨモンが過剰なスキンシップを空にしており、空はなんだか迷惑な様子・・・・
(こんな甘えん坊とこれから先、やっていけるのかしら?)
「あ、森から抜けるぞ!」
標識がたくさんある森をようやく抜けると、その先にあったのは砂漠だった。
ただし、森に標識があったようにこの砂漠には何故か電信柱が立っていた。
「ここ、テレビで見たアフリカのサバンナってとこに似ている・・・・」
光子郎が汗を拭いながらそう呟いた。
「ええ!? じゃあライオンとかキリンとか出てきちゃうのか!?」
(ライオンに似ているデジモンはいたけど、キリンはどうだったかな・・・・?)
「さあ。そんな普通のやつだったらまだマシだけどな」
ヤマトはそう言っているけど、肉食動物が出てきたら、大変なことになりそうだ。
「ここにはそんな動物いないよ?」
「その通り! ここにはデジモンしかいてまへん」

（デジモンは動物にそっくりな形をしているから、あながち間違いではないと思うが・・・）
「光子郎の見たサバンナって、電柱とか建っていたか？」
「いいえ。建っていませんでしたね」
　ヤマトの問いに光子郎が答える。
「サバンナに電柱を建てる意味なんてないだろう」
「まっ、普通はそうだよな」
　八幡の意見にヤマトが頷く。
「きっと人間が近くにいるんだ！　きっと、そうに違いない!!」
　丈は随分と力を込めて宣言していた。
「ええ？　でも、海岸の公衆電話とか、湖の電車みたいなことだってあるじゃん」
　太一は案外とまだ冷静なようだ。
「いや、違う！　絶対絶対人間がいるんだって！」
　丈はあくまでもこの世界には人間が居ると信じていた。
　八幡自身もＤＡＴＳの隊員がいると信じてい吐いたのだが、一週間待ってもこなかったので、この島はまだ人間が、ＤＡＴＳが発見していない未開発エリアだと判断し、いつかはＤＡＴＳの調査隊が来るかもしれないが、それはいつになるのかは分からないので、敢えて口にはしなかった。
　するとミミが丈の背後にゆっくりと歩み寄った。
「ここは一体どこでしょう！　じゃーん！」
　ミミが差し出したものは方位磁石だった。
　それをみんなでそれを覗き込む。
「やーん！　なにこれぇ!!」
　すると、方位磁石は方角をしめさず、くるくると回り続けていた。
　それを見て光子郎は足元の砂を拾い上げた。
「砂みたいに見えるけど、これよく見たら鉄の粉だ。磁石にくっつきますよ」
「あぁーそりゃ回り続けるわな。こんなに地面が鉄まみれじゃ、方角なんてわかるはずがないな」

「やっぱりあたしたち、とんでもないところに来ちゃったのかしら？」
空が困った顔で問いかけた。
「それにしても暑いですね。早く水を確保した方がいいな・・・このままだと熱中症になっちまう」
「うーん……確かにな」
一同は空を見上げた。
太陽の光がこれでもかというほど皆に降り注いでいる。
「うわーん!! ここは一体どこなのー!!」
ミミの叫び声が砂漠に響いた。

砂漠をそのまま突き進んでいたが、全く景色は変わらなかった。
一面砂、砂、砂、砂、そして時々電信柱。
そして、とにかく暑い。
このままではホントに熱中症になりそうだ。

「うわぁ～暑い!!」
「やっぱり森の中にいた方が良かったんだよ」
「このままじゃ、全員干上がっちまうな」
みんなそれぞれ辛そうだが、ゴマモンとパルモンは特にそうみたいだ。
「暑いのか、ゴマモン？」
丈が汗をたらしながら訊ねた。
「氷が欲しい・・・せめて水ぅ～・・・」
「帽子貸してあげようか？パルモン」
「ありがと」
ミミは自分の帽子をパルモンの頭に被せた。
「うん、似合うじゃない！」
「ミミちゃん・・・まっ、いいか」
「カマクラ、お前は大丈夫か？」
カマクラは八幡の隣を歩いているが、なんかヘトヘトな様子で歩いている。

全身が黒い毛皮なため、太陽の熱を吸収しやすい色合いなので、へばっているようにも見える。
「あ、ああ・・・まだ、ギリギリ大丈夫だ・・・お前は？」
「ま、まぁ、俺もギリギリ大丈夫だ・・・」
本当は水をがぶ飲みしたいし、歩きたくもないが、ここで弱音を吐くわけにはいかない。
「そーら！　そーら！　頑張って歩こう？」
「あなた元気ね・・・」
「そーらー！　そーら！」
皆がへばっている中、ピヨモンは意外とテンションが高い。
「アイツはなんであんなにテンション高いんだ？全身、羽毛だらけなのに暑くないのか？」
このクソ暑い中、テンションが高いピヨモンをジト目でみる八幡。
「あぁーもう、いい加減にしてよ！　あたしはね、今喉が渇いていて疲れているし、歩いていて疲れているし、無邪気にじゃれつかないの！
余計に疲れるわ！」
暑い中ピヨモンがベッタリくっついていることにしびれを切らした空はついに怒ってしまった・・・と言うか、キレた。
（ちょっとピヨモンと武ノ内の関係を羨んだけど、あそこまで纏わりつかれたら、キレるのも分かるわぁ～・・・）
八幡は空の態度も分かるものだと納得した。
「空、疲れているんだ……ごめん、ピヨモン大人しくする」
空に怒鳴られ、シュンとするピヨモン。
「うーん、わかった、わかった。一緒に歩こう！」
空は両手を上げ、落ち込んでいるピヨモンを誘った。
「あは！　あたし嬉し!!　空、だーい好き!!」
「しかし、歩いても、歩いても何も見えてこないな。本当に森に戻った方がいいかもしれないな」
ヤマトは空とピヨモンを見て笑みをこぼした後、そう提案した。
「うん、うん」
丈は何回も頷いている。

「ちょっと待ってよっと……」
太一がポケットから単眼鏡を取り出して、先を覗き始めた。
「うーん？　うん？　あっ、村だ!!」
「ええ!?」
太一の言葉を聞き皆は驚きの声をあげた。
「ほら、ほら、ほら、村だって！　やっぱり人間がいるんだよ！」
人がいるかもしれないと言うことで、丈はいい笑顔だ。
「何にせよ、行ってみる価値はありそうですね」
光子郎はそう言うとすたすたと歩き始めた。
「喉渇いたね、パルモン」
「うん」
「あぁーお腹空いたよー」
「空いた、空いたー！」
「よーし！　あの村へ行こう!!」
「おー!!」
というわけで、一行はその村へ向かった。
行く先に村があると言うことで、先ほどとは違って足取りが軽い。
（村、村か・・・人の存在は望み薄だが、とりあえず水が飲みたい）
そして、一行は無事村に着いた。
うん、それはいいのだが・・・
「うわぁ・・・」
その村には頭に植物が生えたピンクのデジモンたちがぴょこぴょこ動いている。
村は村でも、ここはピョコモンの村だった。
まぁ、人間が居るなんて思っても居なかったが太一たちは落胆している様子。
「ピョコモンの村だったのか・・・」
「ピョコモン！　みんなピヨモンの仲間！」
「ねぇねぇ、なんていうデジモンなの？」
ピョコモンたちが興味津々で空に訊ねてくる。
「ええ？　あたし？」

空が困惑した表情で聞き返した。
「違うの、違うの！　この人たちはデジモンじゃないの。人間って生き物。とーっても、いい人たち」
ピヨモンがピョコモンたちに空たちの事を教える。
「にんげん？」
「デジモンじゃないの？」
「いい人たち？」
ピョコモンたちは疑問を口々に出していた。
「あーあ、人間がいると思ったのに・・・」
「何もかも全てピョコモンサイズだぜ！」
村の建物も幼年期iiのピョコモンたちの家なので、ドールハウスの大きさだ。
「あたし、前にママに読んでもらったガリバー旅行記を思い出しちゃった！　ふふ！」
ミミが無邪気に微笑む。
「うまくしたらここで一泊くらい出来るかと思ったけど・・・無理みたいだな」
成長期のデジモンでも、ピョコモンの家は狭そうだ。
当然、小学生とはいえ、人間である八幡たちが入れるわけがない。
「これじゃあ、家に入ることもできませんね」
「僕たちならなんとかなるけどね！」
「人間は無理か・・・」
丈はがっくりと肩を落とした。
まぁ、足先くらいなら何とか入るかもしれないが、それなら出ていた方が自由に寝返りをうてるので、外で寝た方がマシだ。
（ピョコモン・・・確か球根型のデジモンだけど、進化したら、鳥形デジモンのピヨモンに進化する・・・植物から鳥に・・・どんな構造をしているんだ？）
八幡がピョコモンに触ろうとしたら、
「ひっぃ!!」
何故か、怖がられた。

「・・・解せぬ」
「八幡の目、怖いもんな、ハハハハハ・・・」
カマクラがピョコモンに怖がられた八幡を指さしながらゲラゲラ笑う。
「そーら！　ピョコモンたちがみんなにご馳走してくれるって！」
「ほ、本当!?」
空が思わず立ち上がった。
ピヨモンがピョコモンと交渉して、村の食糧を分けてくれるみたいだ。
「ひゃっほー！」
「ピョコモン様大感謝！」
丈はすごい喜びようだ。
どうやら、今日はこのピョコモンの村でお泊りの様だ。
そして、今日の晩御飯も探す手間が省けるみたいだ。
「あたし、お腹ぺこぺこ！」
「腹いっぱい食っちゃおうぜ！」
「一体どんなご馳走なんでしょうね？」
光子郎が首を傾げた。
「植物にも虫を食べる植物があったし、ピョコモンの進化先はピヨモン・鳥だから、意外と虫だったりして・・・」
「えええー!!」
八幡の予想にミミは思わず声を上げる。
「噴水がある！　水だ水だー！」
タケルは村にある噴水の前へ駆け出した。
「この辺りはみはらし山に水源があるの！　とっても美味しいんだー！」
「この水があの有名な、みはらし山の美味しい水ですわ」
「みはらし山？」
「あの山！」
「あの山？」
ピョコモンたちが示した方を向く・・・なるほど、普通の山だ。

でも、標高があるので、確かに山の上からのみはらしは良さそうだ。
「うわっ!?」
山を眺めていると、噴水の水が止まり、急に噴水から炎が吹き出した。
「そんな、喉渇いていたのに!」
「まだお水飲んでない!」
タケルとミミが落胆する。
「さきに水を確保しておくべきだったな・・・」
水が枯れ、水ではなく火が出ている噴水を見ながらぼやく八幡。
「どういうことだ!?」
「一体どうしてー!?」
「だ、大丈夫! あっちに池があるから!」
「行ってみよう!」
ピョコモンたちの案内の下、皆は池へと走る。
「ああ!」
たどり着くと、池は完全に干上がっていた。
『水がないー!!』とピョコモンたちが騒ぐ。
・
(池の水が一瞬で干上がるのは流石のデジタルワールドでも、これは異常だ・・・さっきの噴水から飛び出た炎・・・もしかしたら、なにかデジモンの力が関係しているのかもしれないな・・・)
カマクラは干上がった池を見て、この現象はデジモンの仕業かと思った。

今度は、井戸があると聞き、皆はまた走る。
太一が桶を井戸の中に入れると、井戸の底で燃え尽きるような音が聞こえてきた。
「ん?」
「とにかくあげてみろ!」
「わ、わかった!」

そのまま太一が引き上げると、桶の部分がなくなっていた。
「うわぁぁぁ!?」
その途端、井戸から火が吹き出した。
太一がピョコモンと一緒に飛び跳ねている。

「実は、みはらし山に何かが落ちるのを見た！」
「ああ、俺たちが見たあれか！」
ピョコモンの言葉にヤマトがハッとした。
「黒い歯車ですね」
「でも、みはらし山に歯車が落ちたからって、どうして？」
「な、何が起きているんだ・・・・!?」
丈が不安げに言って、光子郎は考え込んでいた。
「この辺りは全てみはらし山の泉が水源なの。だからみはらし山に何かあったら、水は全部干上がっちゃう！」
「そうなんだ……」
「でも、みはらし山にはメラモンがいるの！」
「みはらし山はメラモンが守ってくれているはずなの！」
ピョコモンたちが必死にそう話す。
どうやら、みはらし山にはメラモンと言う守護者が居るようだ。
「みはらし山だな、見てみようぜ！」
太一が単眼鏡を覗いた。
「なんだ、あれ!?」
太一が単眼鏡を降ろす。
すると、みはらし山の頂上からは火が吹いていた。
「火山の噴火か？」
「メラモンが山から降りてくるー！」
「メラモンが山を降りてきたー！」
「どうして？」
「いつものメラモンじゃない！」
ピョコモンたちが再び騒ぎ出した。
「メラモン……あれが……」

そのデジモンは人型のデジモンなのだが、全身が火だるまのデジモンだった。

メラモン
レベル：成熟期　タイプ：火炎型デジモン　属性：データ
全身に紅蓮の炎を纏った火炎型デジモン。
その身を包む炎のように激しい気性を持っており、触れるもの全てを焼き尽くそうとする。
必殺技は両腕を燃え上がらせ、相手を殴りぬける『バーニングフィスト』。

「あいつ、何か言っている・・・」
メラモンは何かを叫びながら山を下りてきた。

11話

標識の森、そして電信柱が突き刺さった砂漠を越えるとその先にあったのはピョコモンの村だった。
ピヨモンがピョコモンに交渉してくれて、今夜はこの村で一夜を明かすことになった。
しかも一食付きで・・・
砂漠を歩いてきたと言うことで、まずは食事よりも水分補給をしたかったのだが、突如、村の噴水も池も干上がってしまう。
村の水源である、みはらし山で何かが起きたみたいで、その山の守護者であるメラモンが理由もなく、叫びながら山を下りてきた。
メラモンが通ったところには火が燃え移っていた。
「山火事を起こしているぞ、アイツ・・・」
カマクラは冷静につっこむ。
「みんな！　逃げろー!!」
村に居たピョコモンたちと共に避難をする。
村はずれに船があった。――砂に半分沈んでいるが。下の辺りに穴があったので、そこに逃げ込む。
元は池に半分沈んでいる沈没船だったのだが、今は水が枯れ果てているので、簡単に逃げ込むことが出来た。
「タケル、早くしろ！」
人間はタケルと光子郎、八幡で最後のようだが、ピョコモンはまだ後ろに続いている。
（こいつら、こんなにいっぱいいたっけ？）
村のピョコモンがいきなり増えたように感じる八幡。
そんな中、
「いたっ!!」
避難中のピョコモンの一体が転ぶ。
「あっ!!」
八幡はそれに気づき、慌てて引き返すと、

「大丈夫か!?」
転んだピョコモンを抱き、逃げる。
この時は、ピョコモンは八幡の事を怖がることなく、彼に黙って抱かれていた。
八幡が甲鈑に行って下の様子を見ると、空が崖の方へ向かっていた。
「戻ってこい、空!!」
ヤマトが叫ぶ。
崖の上にはピヨモンがいた。
その後ろにはメラモンが迫る。
メラモンに殴られ、ピヨモンが地面へ落ちていった。
「ピヨモン!」
地面に激突する寸前のところで空がピヨモンをキャッチした。
ピヨモンはすぐに空から飛び立ち、メラモンに攻撃をした。
「マジカルファイアー!」
ピヨモンの攻撃はしっかりと当たっていた。
しかし、攻撃をする度にメラモンは大きくなっていった。
「あいつ、ピヨモンの炎を吸収しているんだ」
ピヨモンだけじゃ敵わない――そう思ったのか、デジモンたちが飛び出した。
太一と光子郎もその後に続いている。
「バーニングフィスト!」
ピヨモンはメラモンの攻撃で再び落とされてしまった。
「ピヨモン!」
「ベビーフレイム!」
「プチサンダー!」
「プチファイアー!」
「エアーショット!」
デジモンたちが必殺技を放った。
しかしいくら攻撃をしかけても、メラモンには効かず、それどころかアグモンとガブモンの炎の技を吸収して、大きくなる。

「炎系の攻撃はよせ!!かえって逆効果だ!!」
八幡は慌ててアグモンとガブモンに炎系の攻撃は控えるように言う。
メラモンは八幡の見立て通り、どうやら炎系の攻撃を吸収しているようだ。
かといって、素手でメラモンを殴れば逆にこっちがダメージを負う。
「俺は燃えているんだぜー!」
「いや、見りゃ分かるよ、そんなこと・・・お前は松○修○か!?」
メラモンはそんなことを言いながら、どんどん大きくなっていく。
八幡がメラモンに思わずつっこむ。
「どうしたらいいの!?」
「あぁーもうダメだ!」
「燃えているぜー!」
「あ、危ない!」
メラモンが太一たちを襲おうとしたのを見て、たまらず叫んだ。
その時だった・・・ピヨモンがバッと翼を広げた。
そして、進化の光がピヨモンを包む。
ピヨモン進化――――バードラモン

バードラモン
レベル：成熟期　タイプ：巨鳥型デジモン　タイプ：ワクチン
燃え盛る炎を纏った姿をした、巨鳥型デジモン。
その巨大な翼を羽ばたかせ、大空を飛びまわる。決して好戦的な性格ではないが、襲い掛かる敵に対しては狂暴なまでに反撃を繰り出す。必殺技は翼を羽ばたかせ流星のように羽を飛ばす『メテオウィング』。

「ピヨモンが進化した・・・」
「ピヨモーン!!」
バードラモンはメラモンを掴み、上空を飛んだ。

そして崖の上に落とす。
その衝撃で、地響きが起きた。
「俺は……メラメラに燃えているんだぜ――――!!」
バードラモンが向きを変え、船側へ飛んだ。
「バーニングフィスト!」
背を向けているバードラモンに、メラモンが攻撃を放つ。

「バードラモン!」
「俺は……俺はメラメラに燃えているぜ! 燃えているぜ!」
メラモンは燃えているぜ、と叫ぶ度に攻撃をぶつける。
しかしバードラモンは怯まずに近づいていった。
「キャッツアイ!!」
カマクラの鋭い眼光でメラモンを睨みつけると、メラモンが体勢を崩した。
「ナイス、アシスト。カマクラ!!」
「バードラモン、頑張って!!」
「メテオウィング!!」
そのままバードラモンはメラモンに必殺技を放った。
「うわあああああ!!」
バードラモンの炎を吸収しきれなくなったのか、メラモンの体が小さくなっていった。
その際にメラモンの体から黒い歯車が飛び出し、そのまま空の上で消滅した。
「あの黒い歯車が、メラモンの体の中に入っていたんだ…そのせいで、メラモンが凶暴化したんだ!」
「バードラモンの勝ちだぁ!!」
タケルが両手を上げて喜んだ。
ふと丈を見ると、ゴマモンを腕に抱えながらピョコモンたちを背負っていた。
「モテモテみたいだな」
「そういう比企谷君も同じじゃないか…」

「えっ？」
八幡が自分の体を見ると、丈と同じくピョコモンたちが引っ付いていた。
「緊急事態で気づかなかった・・・」
八幡も丈もだけど、ピョコモンを背負いながら応援していたのか、傍から見ていたら思わず吹き出したかもしれない。
空は降りてきたピヨモンの体を受け止め、ぎゅっと抱きしめていた。
なおこの時、ピヨモンはバードラモンから退化して成長期のピヨモンに戻っていた。
夕暮れ時になると、みはらし山と辺りの火はすっかり収まっていた。
「メラモン、目が覚めた？」
「どうして、俺はここに……？」
メラモンは何故、山のふもとのピョコモンの村に居るのか記憶がないみたいだ。
「よかった、メラモン目が覚めた！」
「どうして暴れた？　メラモン何があった？」
「空から歯車が落ちてきて、それから……」
「メラモンにも分からない？」
「メラモン！　また元のようにみはらし山守って！」
守護者だけあって、ピョコモンたちはメラモンが大好きみたいだ。
普段はいいデジモンみたいだ。
（それにしてもあの歯車、一体どこから？　何か目的でもあるのだろうか？）
（メラモンの様子やピョコモンの話を聞く限り、もしかして、あの黒い歯車は温厚なデジモンを暴走させる力があるのか・・・？）
八幡はあの黒い歯車が、ただの歯車ではなく、デジモンを暴走させる力があるモノだと推測する。
（しかし、そんな歯車を一体誰が、なんのために・・・）

歯車事態に意志があるとは思えない。
歯車を作り、歯車をばら撒いている黒幕が存在している筈・・・
今回の事件の首謀者は、一筋縄ではいかぬ奴かもしれない。
それが人間なのか？
それともデジモンなのか？
それさえもまだわからない状況だった。
「もう悪いデジモンに戻んなよ!!」
「これからもみはらし山を守ってねー！」
メラモンを見送っていると、誰かのお腹が鳴った。
「そうだ！　ピョコモンたちにご飯ご馳走してもらう約束！」
「僕、お腹ぺこぺこ……」
タケルがお腹をさする。
「任せとけっ！」
ピョコモンたちが声を揃えて言った。
「やったー！」
（大丈夫か？）
太一たちはピョコモンのごちそうに期待している様子だが、八幡はやや不安だった。
そして、ピョコモンたちが、太一たちにもてなしのご馳走を差し出す。
そのご馳走を見た太一たちは・・・
「ご馳走って、これかよ……」
ピョコモンたちから差し出されたご馳走は雑穀だった。
（やっぱりね・・・鶏の気分で味わえばいいのか？）
「空、どうして食べないの？　美味しいよ」
「そうそう、ミミも食べたらいいのに」
ピヨモンとパルモンは美味しそうに雑穀を食べている。
「人間は、こういうのを普段食べないのよ」
空は困惑気味だ。
そりゃあ、鶏じゃないんだから、雑穀なんて普段は食べることはないだろう。

「ねぇ、比企谷君、海で食べていたお肉ってもうないの？」
「そうだ、あの肉ってもうないのか？」
ミミが八幡に肉の畑でとれた肉がないのかと聞いてくると、太一も聞いてきた。
ヤマト、タケル、空、光子郎、丈も期待に満ちた目をしている。
「残り少ないが、半分にすれば、皆に行き渡るな・・・」
「半分で良いから、頂戴!!」
「俺にもくれ!!」
「俺にも・・・」
「ボクも!!」
「僕も欲しい!!」
「ぼ、僕も・・・」
「私も・・・」
八幡は肉を取り出し、カマクラがそれを真っ二つに切り、それを太一たちに分ける。
「いいのか？これで、肉はもう売り切れだぞ」
カマクラがもう肉が品切れだと言う。
「しかたないさ、ここでいざこざを起こすわけにはいかないだろう？」
食べ物の恨みは恐ろしい。
こういう非常識な環境下では物資を巡っての争いが起きやすい。
それを避けるためにも八幡にしては珍しく協力姿勢を見せたのだ。
八幡からもらった肉とピョコモンたちから振る舞われた雑穀が今日の夕飯となった。
八幡は肉を一口食べ、次に雑穀を食べる。
「おっ、意外といけるな」
八幡はもしゃもしゃと食べ始めた。
空腹は最高のスパイスってやつだった。
「えっ？八幡、お前それを食ったのか？」
太一は雑穀を食べた八幡を信じられないと言った顔で見ている。
「この状況下だ。食い物は無駄には出来ないし、なによりもピョコモンたちの好意を無駄にする」

そう言って、八幡は再び雑穀を口に運ぶ。
「比企谷君の言う通りね・・・」
「僕も食べちゃおう！」
「背に腹は代えられねぇか」
「食っちゃお、食っちゃお！」
なんだかんだ言いつつ、空と男性陣は雑穀を食べ始める。
空腹はなによりのスパイスなのだ。
「うん、よく噛めば食べられないこともないよ」
「いやー！　あたしやっぱりお家に帰りたーい!!」
丈のその言葉がトドメで、ミミはついに叫んでしまった。
そんなミミを見て、皆は笑い合った。
しかし、ミミも空腹には勝てなかったのか、ピョコモンからもらった雑穀を食べ始めた。
そして、食べる前は引いていたのだが、いざ、雑穀を食べてみると、
「おいしい!!」
と言って、雑穀を食べていた。

12話

ピョコモンの村を出て、一行は再びサバンナの様な場所を歩き続ける。
もう、どのくらい歩いただろうか？
このままだと倒れそうだ。
「ああ～もうダメ・・・」
「もう、一歩も歩けないよー」
そんな中、ミミとタケルが座り込んでしまった。
ゴマモンとパルモンもぐったりしている。
毛皮が黒いカマクラもややバテ気味だ。
「大丈夫か？二人とも・・・」
八幡も額に浮かぶ汗を拭いながら、タケルとミミの二人に訊ねるも、他のメンバーもそろそろ限界の様子・・・
「限界かな」
「ずーっと、歩きっぱなしだもん」
「よし、ここで休憩しよう」
太一のその言葉に力が抜けて、皆はその場に座り込む。
タケルとミミは木の下で寝息をたてていた。
そのすぐ近くで、光子郎はパソコンを操作している。
（確か、八神たちはキャンプに来ていたんだよな・・・？）
（なんで、キャンプにパソコンを・・・？）
キャンプなのに、パソコンを持ち込んでいた光子郎の行動に首を傾げる八幡とカマクラだった。
「やっぱり動かない・・・」
光子郎がキーボードをいくら叩いてもパソコンは起動しない。
「バッテリーが切れているんじゃないか？」
八幡が光子郎にパソコンが起動しないのは、パソコンのバッテリーが切れているからではないかと訊ねるが、
「最後に見た時はバッテリーは、まだ容量があるはずなんです」

「じゃあ、壊れたとか？」
　これまで自分たちが通った環境下で、パソコンが壊れたのではないかと指摘する。
「うーん・その可能性もありそうですけど・・・・」
　光子郎は顎に手を当てて、本当にパソコンが壊れていしまったのかと思っていると、
「こういうときはこう叩けば直るって！」
　太一はにやりと笑って光子郎のパソコンを奪ったかと思うと、バンバンと叩き始めた。
「うわ、うわ!!やめてくださいよ!!」
　光子郎はバッと太一からパソコンを奪い返した。
「昔のテレビじゃないんだから、そんなことをしたら、余計に壊れるぞ」
　八幡が太一につっこむ。
「俺は、お前のためを思って……」
「それはわかるけど、誰だって大切にしている物を他人に触られたくないでしょ？」
　空が太一をまあまあと宥める。
　その時、太一が何かを見つけ、走っていく。
　その後ろをアグモンが慌てて後を追う。
「八神の奴、どうしたんだ？」
「トイレだろう」
　ヤマトはどうでもよさそうに言った。
　意外と太一の扱いがひどい。
「やった、直ったぞ!!」
　光子郎が嬉しそうに声をあげた。
「ん？」
　八幡が覗き込んでみると、光子郎のパソコンが起動した。
「でも、バッテリーがゼロになっているのに動いている・・・・」
　パソコンの右隅に表示されているバッテリー残量は確かに０になっているにも関わらず、パソコンは起動している。

もちろん、コンセットに接続もされていない。
（まぁ、ここは常識が通じない世界だからな・・・）
光子郎は首を傾げているが、八幡はこのデジタルワールドでは人間界の常識が通じないので、まぁ、こんなこともあるだろうと思い特に疑問には思わなかった。
「おーい、みんな!!」
そこへ、太一の呼ぶ声が聞こえた。
どうやら、トイレではなかったみたいだ。
そこで、八幡たちはそちらへ駆け寄った。
「工場だ!」
丈が目を見開いて驚く。
見下ろすと、そこには確かに丈の言う通り工場があった。
煙突から煙が出ているので、稼働しているようだが、一体あの工場では何を作っているのだろうか？
何かあるかもしれないと思い、一行は工場の中へ足を踏み入れる。
とても大きい工場で、上を高く見上げないと、全貌が見えない。
通った通路の横では歯車がせわしなく動いていた。
ただ、この歯車は、先日、メラモンの体内に入っていた黒い歯車ではなかった。
工場の奥へと進むと、ベルトコンベアーの上で何かが組み立てられていた。
「ねぇ、何を作っているの？」
「何だろう。調べてみないとわからないな」
タケルの問いにヤマトが答える。
ベルトコンベアーの上のモノを見る限り、ロボットのパーツにも見える。
「調べるんなら、人がいるかどうかも調べようよ！　これだけの工場なら絶対誰かいるはずだ！」
丈の力説により、皆は二手に分かれることになった。
ひとつは太一、空、丈のグループ。
もうひとつはヤマト、タケル、ミミ、光子郎のグループだ。

そして八幡は――。

「八幡はどうする？　こっちに来るか？」

太一が八幡に自分たちと来るかと訊ねると、

「俺は、石田たちといくよ」

八幡はヤマトたちのグループに行くことにした。

「何か理由でもあるのかい？」

丈が理由を訊ねてくると、

「泉は、何か夢中になると止まらなくなるみたいだから、それで注意散漫になるだろうからな」

「わかったわ。比企谷君、よろしくね」

「うす」

八幡は空に一礼する。

「じゃあ、俺たちも行くか」

「ああ」

太一たちのグループを見届けた後、八幡たちも出発した。

順調に進んでいると、ある一つのドアを見つけた。

「動力室だ！」

光子郎が声を上げる。

そのドアには『ＰＯＷＥＲ　ＳＵＰＰＬＹＲ』と書かれていた。

「中に入ってみよう」

ヤマトはそう言うと、ドアを開けた。

「うわぁ～・・・・」

「お化け電池とモーターだ！」

光子郎は一足先に動力室に入った。

そこにはとんでもなく大きい電池とモーターがあった。

なぜお化け電池かはわからないが、語呂がいいので採用しよう。

「こんなので動かしているなんて・・・・」

「これで動くようならば、元の世界でもエネルギー問題も解消できるんだろうな・・・・」

八幡はお化け電池と巨大モーターを見て、これが人間界でも稼働出

来たら、人間界におけるエネルギー問題も解消できるか、環境問題にも貢献できると思った。
　それから、光子郎は長い間、あちこちこの部屋を調べていた。
「まだ調べるのか？」
　ヤマトはさすがにしびれを切らしたようだ。
「はい、先を急ぐんでしたら皆さんだけどうぞ。僕は残って、もう少し調べます」
　ヤマトは困った様子でこちらを見た。
「比企谷はどうする？」
「石田たちは先に行ってくれ、俺が泉を見ているから」
「でも、大丈夫か？」
「カマクラもテントモンもいるし、いざとなったら、デジヴァイスの追跡機能で追いかける」
「そうか、わかった」
　ヤマトさんを見送る間、光子郎はこちらのことは全く気に止めず調べ続けていた。
（多分、俺たちの事も既にアウト・オブ・眼中なんだろうな・・・）
　既に光子郎の中では、八幡もカマクラもテントモンの存在も背景なのだろう。
「あれ？　こんなところにドアが……」
　お化け電池を探っていると、光子郎が入り口を見つけた。
「入ってみましょう！」
「そうだな」
　光子郎がドアを開けて中に入る。
「なんだ？こりゃ？」
　電池の中に入ると部屋全体に色とりどりの文字が並んでいた。
「これなんでっか？」
「コンピューターのプログラムだ・・・」
　光子郎がすっと文字をなぞると、電気が突然消えた。
「停電か？」
「ありゃ、工場中の機械が止まってまっせ」

「この電池が動力源だからか？」
　テントモンとカマクラが外を覗いて言った。
「プログラムを間違って消したせいかな……」
「どうでっしゃろ……ああ、せや。消したとこ直せばわかるんちゃいますか？」
「それもそうだ」
　光子郎がマジックで文字を直すと、電気が復旧した。
「あっ、明るくなった」
　一体どうなっているのだろう――。
　光子郎はパソコンを取り出して床に座り込んだ。
「それにしても不思議だ」
「何がでっか？」
　テントモンが光子郎に訊ねた。
「電池は金属と溶液の化学変化によって電気を起こすんだ。でもこれは違う。この壁に書かれてあるプログラム、それ自体が電気を起こしている」
「うーん、何や難しそうな話でんなあ」
「そもそも電池が電力源なんて聞いたことないよ」
　電池の中身がプログラムというのもかなり驚きだ。
「そうだ！」
「今度は何しはるんです？」
「このプログラムを分析してみるのさ！　やっと僕のパソコンの出番ってわけさ」
　光子郎はうきうきとした様子で答えた。
「俺にはパソコンのプログラムはよくわからないけど、まぁ、頑張れ。一応、護衛はしてやるから」
「はい。ありがとうございます」
「光子郎はんの顔、なんや今までになく生き生きしてまんな」
「そうかい？」
「はいな！」
　光子郎自身、分からないみたいだが、キーボードを打っている彼の

顔は生き生きしていた。
「どこが楽しいんでっか？」
「暗号や古代文字を解読するのに似た楽しさかな」
「ふーん、解読する楽しさねえ……。んで、解読して何かええことあるんでっか？」
「もしかすると、謎が解けるかもしれないよ。この世界がどういう世界で、君たちが何者かとか」
「ここがどこで自分が何者かなんて、うちさっぱり興味おまへんなあ」
「そう？」
まぁ、デジモンたちにとっては、ここがどこだろうが関係ないのだろう。
「光子郎はんは自分が何者かなんて、興味ありまっか？」
「僕は……」
光子郎はそこで何かを考え込んだ。
テントモンの質問に八幡も一緒に考えてみた自分が何者なのかを・・・・
当然、そんな哲学的な問題の答えを小学生である光子郎も八幡も答えを出せる筈がなかった。
「なに、生言っている」
「カマクラ？」
「あたしら、デジモンが言えることじゃねえが、自分が何者かなんて、お前らの年で分かるものなのか？」
「・・・・」
「将来何になりたいって話なら分かるが、自分の存在が何者かなんてまだ分かるはずがないだろう」
「・・・確かに、カマクラの言う通りだな」
「そうですね」
まだ自分たちは小学生・・・
将来の夢を語るところから始め、その夢をかなえるための努力をしなければならない。
まずは、自分が将来何になりたいかを決める所から始めよう。

「光子郎はん、比企谷はん！」
「な、何？」
「どうした？」
「おかしいで、これ」
　テントモンがパソコンを指差す。
「ほれ、見てみなはれ!!」
　パソコンの画面を見てみると、今まで光子郎が打った文字がバラバラに動いていた。
「うわ、なんだ？これ!?」
「文字が勝手に動いている……！」
　常識が通じないデジタルワールドであるが、さすがにこんな現象を見れば、驚きもする。
　そうこうしているうちに、光子郎の機械が光り始めた。
「あっ、こっちも光り出したぞ！」
「一体何が・・・・!?」
　そしてパソコンに３Ｄで描かれた島のような画像が浮かび出てきた。
「ああ！」
「こ、これは……」
「あて、あて、あちち!!」
「あつ、あつ、あつい!!」
　その声にテントモンとカマクラを見ると体が内側から光っていた。
「あちち！　あちちちち！　体が熱いがな！」
「だ、大丈夫ですかテントモン!?」
「か、身体が燃える・・・・あたしはメラモンじゃねぇぞ・・・・くそっ!!」
「か、カマクラ!!」
「どうした!?」
「どうしたか、うちにもさっぱり!!　あち、あちー!!」
　この時、光子郎のデジヴァイスにはゲージのようなものが表示されており、そのゲージは一番上まで到達している。
　おまけにチカチカと点滅している。

それは八幡のデジヴァイスでも同様の事が言えたのだが、二人とも自らのパートナーデジモンの異変に動転しており、気づかなかった。
「あちゃちゃちゃ、もうたまらんわ！」
「体が燃えそうだ!!」
ついにテントモンとカマクラの体から煙が出てきた。
熱さからか、テントモンとカマクラはのたうち回っている。
「テントモン！」
「カマクラ!!・・・・泉!!これ以上は危険だ！一旦ここを出よう!!」
「は、はい」
光子郎がパソコンの電源を落とすと、テントモンとカマクラの熱も収まった。
「大丈夫、テントモン!?」
「カマクラも大丈夫か!?」
「なんとか・・・・・」
「ああ、死ぬかと思ったぜ・・・・」
萎れていたテントモンとカマクラに声を掛ける。
二体とも熱は治まり、異状は治まったみたいだ。

13話

ピョコモンの村を出て再びサバンナを旅していると、サバンナのど真ん中に何かの工場があった。
工場に入ると、そこには巨大と電池とモーターがあり、なんと電池の中に入れた。
電池の内部にはパソコンのプログラムらしき文字の羅列があり、光子郎がパソコンを駆使してそれを調査するとテントモンとカマクラに異常が出始める。
慌てて光子郎がパソコンの電源を切ると、テントモンとカマクラの異変は治まる。
それから後すぐに八幡たちはヤマトたちを追った。
「みなさーん、すごい発見がありました！」
ようやくヤマトたちを見つけ、光子郎が呼びかけた。
「光子郎、八幡！　なんだよ？」
「はい。この工場ではプログラムそのものがエネルギーを作っているんです！　つまり、この世界ではデータとかプログラムとか本来ではただの情報でしかないものが実体化して……」
光子郎があの電池の中で分かったことをヤマトたちに説明していると、
「おーい！」
「あっ、太一さん！　どうしたんですか？」
光子郎の説明の途中、太一たちがこちらに向かって走ってきていた。
その様子は心なしか慌てているようにもみえる。
「何か見つかったか!?」
「逃げろ、アンドロモンが!!」
「アンドロモン？」
ヤマトが太一に聞き返した瞬間、太一たちの後ろからサイボーグのようなデジモンが現れた。

アンドロモン
レベル：完全体　タイプ：サイボーグ型デジモン　属性：ワクチン
人型タイプのサイボーグデジモン。
完全体になりきれていないデジモンなど一撃で倒すことのできる高い戦闘力を持っている。
アンドロモンはサイボーグデジモンの試作型として開発され、機械ベースのアンドロモンと肉体ベースのサイボーグ「ボルトモン」は同時期に製造された。
その技術はメタルグレイモンやメガドラモンに流用されている。
試作型のデジモンのため意志や感情は持っておらず、プログラムされた行動に忠実である。
必殺技はアーム部分から発射されるエネルギー状の刃物『スパイラルソード』と胸のハッチの部分から繰り出す『ガトリングミサイル』。

「うわあ!!」
「やべぇ、アンドロモンは確か完全体のデジモンだ!!」
「侵入者捕捉……ガトリングミサイル!!」
アンドロモンは八幡たちの姿を確認すると、胸の八ッチからミサイルを二発放った。
「うわっ!!」
八幡たちは二手に分かれて避けたのだが――。
「やだあ!!」
タケルが逃げ遅れてしまった。
このままだと当たってしまう!!
「タケルー!!」
「俺に任せて！」
ヤマトの叫びに反応してガブモンが飛び出した。
それと同時にヤマトのデジヴァイスが光る。
ガブモン進化――――ガルルモン

ガルルモンが前足でミサイルを叩くと、一つはそのまま空中で爆発した。
しかしもう一つが太一たちの方へ飛んで行く。
ミサイルは口の部分を開けると、そこからガトリングガンを出して太一を銃撃してくる。
「うわ、うわ、うわ!!」
太一たちは後ろに下がりながら避けていく。妙に笑えるのは私だけだろうか。
タイミングを見計らって、アグモンが前に飛び出した。
そして太一のデジヴァイスが光り始める。

アグモン進化――――――グレイモン
グレイモンが尻尾でミサイルを壊したので、なんとか事なきを得た。
グレイモンとガルルモンはアンドロモンに飛びかかったが、簡単に払われた。
やはり、完全体のデジモン・・・二体とはいえ成熟期のデジモンでは荷が重いようだ。
そのまま落ちたガルルモンとグレイモンを追い、アンドロモンは下に飛び降りる。
「グレイモン!」
「ガルルモン!」
太一たちは下を覗き込んで、戦いを見守った。

「スパイラルソード!!」
アンドロモンの攻撃がガルルモンに命中する。
「メガフレイム!」
「フォックスファイヤー!!」
アンドロモンは成熟期デジモン二体の必殺技でさえ、軽くあしらっていた。

「なるほど、確かに進化している！」
「パワー、スピード……どれをとってもあたしたちのデジモンよりレベルが上だわ！」
「どうやったら勝てるんだよ!?」
「それなら、もう一体増えたら変わるかもな……」
「えっ？」
「カマクラ？」
　カマクラはアンドロモンを見て、不敵な笑みを浮かべている。
「お、おい、カマクラ、お前もしかして……」
　八幡は何か嫌な予感がした。
「まさか、完全体とこんなところでやり合えるとはな……」
「お、おい!!」
　八幡が止める間もなく、カマクラはアンドロモンに向かって行く。
「むっ？」
　アンドロモンもカマクラを捕捉する。
「スパイラルソード!!」
　アンドロモンは右手にエネルギー状の刃物を形成させてカマクラに飛ばす。
　カマクラはその体の小ささを利用してアンドロモンのスパイラルソードを躱し、アンドロモンの懐まで入ると、
「ネコパンチ!!」
　アンドロモンの胸部にパンチを撃ちこむが、やはり効果がない。
「ネコキック!!」
　続いて、キックを撃ちこむがやはり効果がない。
　それでもカマクラはキックとパンチのラッシュをアンドロモンの胸部に打ち込む。
「カマクラ!!」
「ふん!!」
「がっ!!」
　アンドロモンもパンチを繰り出すと、カマクラを吹っ飛ばす。
「ぬぉぉぉぉー!!」

グレイモンが噛み付こうと口を開け、アンドロモンとの攻防戦を続けている。
その隙にガルルモンが飛び掛ろうとしたが、アンドロモンが投げ飛ばしたグレイモンの下敷きになってしまった。
「頑張れ、グレイモン！」
「ガルルモンしっかり！」
「光子郎はん！」
「ん？」
そんなときテントモンが光子郎に声を掛けた。
「さっきのあのプログラム！」
「いいのか？」
「はいな！」
「……よし」
光子郎はパソコンの電源を入れた。
「行くぞ！」
光子郎はさっきと同じようにキーボードを叩いていく。そして文字が動き始めて――！
「うおお!?　なんや、力がみなぎってくるー!!」
テントモンの全身が光り始めた。
「大丈夫か!?」

テントモン進化――――――カブテリモン

カブテリモン
レベル：成熟期　タイプ：昆虫型デジモン　属性：ワクチン
新たに発見されたデジモンのなかでも、かなり特異な昆虫型デジモン。
どのような経緯で昆虫タイプに進化したのかは不明だが、蟻のようなパワーと甲虫が持つ完璧な防御能力を併せ持っている。
頭部は金属化しており、鉄壁の防御を誇る。
必殺技は青白いエネルギー弾を発生させて相手にぶつける『メガブ

ラスター』。

テントモンはなんとも形容しがたい大きな昆虫型デジモンに進化した。

しかし、その間もグレイモン、ガルルモン、カマクラはアンドロモンに一方的な戦いをされていた。

カブテリモンは空中からアンドロモンに突進したが避けられて地面に突っ伏した。

それでも飛び上がって再び体当たりをしたが、アンドロモンに投げ払われた。

「ガトリングミサイル!!」

ミサイルがカブテリモンを追跡する。

「くそぉ、アンドロモンに弱点はないのか!?」

「弱点……」

丈の言葉にアンドロモンを見つめる。

すると右足から電流が出ていた。

しかも、右足の部分はアーマーの部分が少なく、人間の筋肉とわずかな金属部品がむき出しの足となっている。

「あ！　右足だ！」

「ええ！　……カブテリモン、右足だ！　アンドロモンの右足を狙え!!」

カブテリモンはミサイルを避けて、アンドロモンへ向かう。

「メガブラスター!!」

光子郎の指示通り、カブテリモンは右足に必殺技を放ち、見事命中した。

すると、アンドロモンの右足から、メラモンの時と同じ黒い歯車が出てきた。

「あれはっ!?」

「黒い歯車・・・・」

アンドロモンの右足から出てきた黒い歯車は空中で消滅した。

「消えた・・・・」

ふとアンドロモンを見ると、地面に四つん這いになっていた。
黒い歯車が抜けて、正気になったアンドロモンと話をした。
「機械に紛れ込んだ黒い歯車を取ろうとして、あんなことになってしまった」
「黒い歯車？」
「また？」
アンドロモンの話を聞く限り、やはりこの前のメラモンと同じようだ。
「助けてもらったのに、本当に申し訳ないことをした・・・・」
「気にすんなって、故障なんだから」
さらりとヤマトがアンドロモンにフォローを入れた。
「君たちの疑問に答えてあげたいが、私も答えを知らない……その代わり、ここから出る方法をアドバイスできる。地下水道を行くといい」
アンドロモンはそう言うと、後ろにあった地下に降りるための穴を指差した。
「ありがとう、アンドロモン」
「君たちの幸運を祈る……無事、元の世界に帰れるように」
アンドロモンは、アグモンたちが言うようにいいデジモンだった。
八幡たちはアンドロモンが記した工場の穴から地下水道に辿り着いた。
「よいしょっと！」
最後尾のミミが地下道の穴から飛び降りてきた。
「よーし、これで全員出てきたな！」
太一が確認をし、みんなで歩き始めた。
下水道を歩いていると、
「なんか、ジメジメして気持ちの悪いところだな」
「ああ……」
水の滴る音もずっとしていて、気分が晴れるようなところではない。
まぁ、下水道なのだから仕方がない。

（この環境下だとアイツらがいるかもしれないな・・・）
八幡はこのジメジメとした薄暗い環境下を好むあのデジモンが多数生息しているのではないかと思った。
しかし、実際にその姿も痕跡も確認していないので、何とも言えなかった。
「ねえ、光子郎さん。さっきパソコンでテントモンを進化させたんでしょ？」
タケルが光子郎に訊ねた。
「そうだよ」
「僕のパタモンも進化させられるの？」
「出来るかもしれないな」
「ほんと!?」
タケルが喜びの声をあげる。
「あ、あたしも進化出来るかもしれないのか!?」
すると、カマクラも光子郎に訊ねる。
「えっ？ええ、できるかもしれません」
「じゃあ、やってくれ!!」
「僕も!!」
カマクラとパタモンが光子郎に自分たちも進化させてくれと頼む。
「いいですよ。……あれ？」
光子郎がプログラムを打ちながら歩いていると、パソコンの電源がいきなり切れた。
「あれ？おかしいな……」
「どうした？また壊れたのか？」
「じゃないと思うんだけど……」
光子郎は首を捻る。
「工場から離れたから、とか？」
「そうなんですかね……」
さっきはバッテリーなくても動いていたのに・・・・
（携帯電話かよ・・・）
光子郎のパソコンの現状に思わず心の中でツッコミを入れる八幡。

「そういうときは、叩くに限る！」
「そうさ！」
すると太一とアグモンがうきうきと拳を上げて、光子郎に近づいてきた。
「うわ！」
光子郎が前に逸れると太一とアグモンはそれぞれの拳にぶつかり、頬と頭にたんこぶが出来た。
「いてえ……!!」
「いたい・・・・」
「あんたたちの能天気は、叩いたって直らないって！」
空は腰に手を当て、太一とアグモンを叱った。
二人が肩を落とすのを見て、みんなは思わず笑い出した。
しかし、そんな中でカマクラは、
（あたしだって、完全体に進化出来れば・・・）
自身が完全体のデジモンに進化できるかもしれないチャンスだったのだが、それが今回は、お流れとなったことに悔しがっていた。
とはいえ、光子郎に工場に戻って進化させてくれとは言わなかったことはカマクラも八幡のことを思って、それをグッと言葉を飲み込んだのだろう。
それに光子郎のやり方で進化したのは成長期のデジモンが成熟期デジモンに進化した。
既に成熟期ある自分が光子郎のやり方で完全体のデジモンに進化できると言う確実な保証はなかった。
カマクラが光子郎に強くせがまなかったのはそうした要因もあったからだ。
しかし、今回の件でカマクラに完全体への進化に対して、執着を抱かせるには十分な出来事であった。

１４話

サバンナのど真ん中に変な工場があった。
その工場にて、八幡たちは初めて完全体のデジモンと遭遇し、戦闘を経験した。
そして、光子郎もある発見をして、自身のパートナーデジモン、テントモンを成熟期のデジモン、カブテリモンに進化させることに成功した。
現在、八幡たちは工場に居たデジモン、アンドロモンが教えてくれた地下水道を通っていた。
地下水道を通っている中、人間チームとデジモンチームに別れてしりとり歌合戦をしていた。
「遠いふるさと思い出すー」
「はい、デジモンチーム思い出すーのす！」
太一がデジモンチームに振る。
「すっぱいなーすっぱいなーは成功のもとじゃないない！」
「はい子どもチーム、ないないなーいの『い』！」
『い』？」
太一たちは『い』からの歌が思いつかないみたいだ。
（いや、『犬のおまわりさん』とかあるだろう・・・）
八幡は『い』で思いつく歌を思いついたが、そこはボッチ体質なのか？恥ずかしいのか、提案しなかった。
「いけないー人ー」
すると、ミミが『い』で思いついた歌を歌いだすが、
「なに、それ？」
ミミが歌いだす歌は聞き覚えのない歌だった。
「よく、お父さんがカラオケしていた演歌！」
「そんな歌知らないー」
小学生で演歌を知っているのは珍しい部類に入る。
当然、八幡も太一たちも知らなかった。

「今はー何もー」
そこで、次に太一が『い』で始まる歌を思い出し、歌いだす。
「ああ！　それなら知っている！」
「俺も！」
「僕も知っています！」
（知らない・・・）
光子郎に続いて、みんなで歌い始めた。
ただし、八幡は知らなかったので、口パクで歌っているふりをした。
「今はー何もー」
「きゃあ！」
空の突然の悲鳴に歌声が止まる。
「ん？どうした？空」
「大丈夫か？」
「どうしたんだ？」
「水が落ちてきたの……」
すると空の服にまた水が一滴落ちた。
「汚れましたよ？」
「えっ？　ああ……」
光子郎の指摘に、空は服を擦った。
下水道なので、ここの水滴は汚れていた。
「洗濯したい……」
空はぽつりと呟いた。
目からは涙も滲んできている。
服が汚れてそのままの状態は女の子にはキツイ。
「武ノ内、これで拭え」
「えっ？」
八幡は空に布切れを渡した。
これで、少しは気持ちが落ち着くといいけど・・・・
「俺だって風呂に入ってのんびりと……」
そんな空を見てか、太一も自分のしたいことを言い出した。
「僕は……」

そう言うとタケルはその場にしゃがもうとするので、
「武石、座るとズボンが汚れるぞ」
「あっ、そっか」
八幡が指摘したので、タケルは立ったままの状態で、コントローラーをいじる動作をしていた。
「タケルお前なぁ、こんなときにテレビゲームはないだろ？　あははは！」
ヤマトはタケルの動作に呆れたように笑っていたが、すぐにやめた。
「俺も、タケルのこと笑えない」
と、真顔でそう言いながら八幡たちの方へ体を向ける。
「今、俺のしたいことは……ジュージュー焼ける焼き肉、腹いっぱい食いたい！」
「誰も笑えないさ……。僕は勉強。宿題山ほどやりたい！」
眼鏡をくいっと上げながら、丈も続けて言った。

「変わっているわね……。あたしは、冷たいコーラが飲みたい！」
「確かに・・・・」
ミミはピンクのテンガロンハットを脱ぎ、腰に手を当ててコーラを飲む真似をした。
そして、丈のしたいことに対して八幡はミミの意見に賛同した。
「ミミさん、それいい！　僕も！」
「でしょ？」
「僕は、インターネットで友達にメールを送りたい！」
光子郎も便乗して自分のしたいことを言っていた。
「で、八幡はなにしたいんだ？」
太一が振り返って、八幡に訊ねる。
「んー・・・俺は・・・・」
全員の視線が一斉に集まった。
「俺は、マッ缶が飲みたい」
「マッ缶？」

「なんだ？それ？」
「あっ、そういえば皆は東京のお台場だったな・・・マッ缶ってのは、千葉のソウルドリンクだ」
「ソウルドリンク？」
「ドリンクってことは飲み物なんですよね？」
「そのとおり、マッ缶は千葉限定の缶コーヒーだ」
「缶コーヒー？」
「あたし、苦いのダメ」
　ミミがコーヒーは苦いので無理と言う。
「マッ缶をバカにするな!!マッ缶は他の缶コーヒーと比べて甘い!!」
「甘いの？」
「ああ、甘い」
「それなら飲めるかも」
　八幡の説明を聞いてミミもマッ缶なら飲めるかもと言う。
「ああ、ぜひ、千葉に来たら飲んでみてくれ!!」
　と、八幡にしては珍しく女子と会話が弾んでいるように見えた。
　あれから一気に空気が重くなった。
「みんな疲れているんだ……」
「かわいそう……」
　パートナーデジモンたちはそんな八幡たちを心配している。
　そんな中、下水道の奥ら何らや声がしてきた。
「あ、あの声は……」
　テントモンがそう呟いた。
　耳を傾けてみると確かになにやら音が聞こえる。
「ヌメモン！」
「げっ、マジかよ・・・」
「やっぱり居やがった!!」
　ヌメモンの名前を聞いて、八幡とカマクラは顔を引き攣らせる。
「ヌメモン？」
　しかし、太一たちはヌメモンについて何も知らないため、首を傾げている。

「暗くて、ジメジメしたところが好きで、知性も教養もないデジモン」
「強いの？」
「弱い」
「弱いけど、汚い」
「汚いの？」
「デジモン界の嫌われ者って言われている」
「嫌われ者……？」
「それよりも逃げた方がいいぞ」
八幡は忠告するが、ヌメモンがどんなデジモンなのか気になるのか、太一たちは逃げようとしない。
奥を見つめていると、緑のなめくじのようなものが大量にやってきた。

ヌメモン
レベル：成熟期　タイプ：軟体型デジモン　属性：ウィルス
ナメクジのような体を持った軟体型デジモン。暗くてジメジメした環境を好み、攻撃力も知性も無い。
外敵から身を守るため、自分の排泄物（ウンチ）を投げつける最低の攻撃をする。

「やっぱりヌメモンだ！　に、逃げろ!!」
「急げ!!早く!!」
アグモンと八幡の必死な叫びに、とりあえず太一たちは走り出した。
「弱いのにどうして逃げなくちゃいけないんだよ!?」
「今に分かる!!」
するとヌメモンたちは自分が排泄したウンチを投げ出した。
「なんなのこれー!?」
近くにウンチがぶつかると、ミミは叫んでまた走り出した。
「あいつらのクソだ！」
「なんで、そんなものを投げてくるの!?」

「それしか防衛手段を持っていないからだ!!」
ミミはなんでウンチなんかを投げてくるのかと大声で叫び、八幡はそれに答えるかのように、ヌメモンにはそれしか技がないことをミミに教える。
「でも、かなりの攻撃力だろう?」
カマクラもさすがにウンチまみれにはなりたくないので、極力ヌメモンには手を出さずに生きてきた。
「そうね、あんなのを大量にまかれて身体に浴びたら・・・」
空はヌメモンのウンチまみれになった姿を想像して身震いする。
「あ、こっちー!」
先を走っていたタケルが逃げ道を見つけた。
みんなで横道に逸れたが、ヌメモンはまだ追ってきていた。
だんだんと光が強くなっていく。
出口はもうすぐのようだ。
穴から出ると、太陽の光が眩しくて思わず目を細めた。
「ああ!?」
太一の声に振り向くと、ヌメモンたちが後ろへ下がっていっていた。
「ヌメモンたちは太陽の光が苦手なんだ」
「ふぅ〜」
太一がアグモンと顔を見合わせてひと息ついた。
下水道でヌメモンに追われた後、八幡たちは小さな川沿いに歩いていた。
「……あっ!」
不意にミミが声をあげた。
前をみると大量の自動販売機がある。
「こんな所に自動販売機が……たくさん!!」
「ミミ、まさか飲みたいなんて……」
「そのまさか!」
「ミミくん、どうせ出やしないよ!」
「出ても飲めるか分からないが、でもマッ缶があるなら俺も飲みたい

!!」
八幡は太一たちよりも長くファイル島にいたのだが、これまでの捜索範囲に自販機はなかった。
そして、自販機にマッ缶があるのであれば飲みたかった。
しかし、自販機にはマッ缶はなく、ミミもお目当てのコーラは変えず、自販機の中にはヌメモンが入っていた。
そして、ヌメモンはミミにナンパしてきた。
当然ミミはそれを拒否して、ヌメモンにボロクソな罵倒をする。
その間になんだか、天候が怪しくなり、ヌメモンの天敵の一つである太陽が雲に隠れた。
太陽が照っているかぎり、ヌメモンは無力だと思っていたミミはその太陽が雲に隠れたことにより顔を引き攣らせる。
反対にヌメモンたちは、ミミからボロクソ言われたことに腹を立てて、ウンチを手に持って追いかけてきた。
皆はバラバラに逃げたが、その過程で一体の黄色い大きなクマのぬいぐるみの様なデジモンと出会った。

もんざえモン
レベル：完全体　タイプ：　パペット型デジモン　属性：ワクチン
すべてが謎に包まれているデジモン。
見た感じは、そのまま熊のぬいぐるみで、背中の部分にチャックが付いているところから、中に何者かが入っているという噂。
この可愛らしい（目が恐い）体から溢れる愛で敵を包み込んで幸せな気持ちにしてくれる。必殺技はハートを飛ばす〝ラブリーアタック〟

「ま、また完全体のデジモンかよ・・・」
もんざえモンと鉢合わせをした八幡は引き続き、完全体デジモンとの遭遇に顔を引き攣らせる。
なりはこんなデジモンでも、完全体のデジモン。
馬鹿には出来ない。

それは成熟期レベルにおいて、テイルモン、ブラックテイルモンを侮るのと同じことだ。
「カマクラ、ここは逃げ・・・って、カマクラ!!」
「ネコパンチ!!」
カマクラは八幡が止める前にもんざえモンの腹にパンチを打ち込むが、もんざえモンの身体がぬいぐるみのようにできており、カマクラの拳がめり込む。
「乱暴な方ですね・・・ラブリーアタック!!」
もんざえモンは腹部から青いハートを出すと、カマクラはそのハートの中に閉じ込められる。
「カマクラ!!」
「貴方もお仲間にして差し上げます」
もんざえモンが怪しい目つきでニヤリと笑みを浮かべながら近づいてくるので、八幡は逃げ出した。
その途中、原っぱに出来た溝に落ちる。
「どこですか〜?でてきなさーい」
もんざえモンは八幡を見失ったらしく、どこかへと行ってしまった。
「くそっ、カマクラ・・・」
八幡はカマクラを助け出す為、もんざえモンの後を追いかけた。
すると、もんざえモンは森の中にあるおもちゃの町へと入っていった。
おもちゃの町はその名前の通り、おもちゃだらけの町で、まるで遊園地のようだった。
しかし、人の姿もデジモンの姿もなかった。
町の中を警戒しながら進んで行くと、ミミとパルモンの姿があった。
「太刀川、パルモン」
「あっ、八幡」
「他の皆は!?」
「わからない。はぐれちゃったみたいで・・・」

「八幡、カマクラは？」
「もんざえモンの奴に捕まっちまって助けに来たんだ」
　八幡がカマクラの事をミミとパルモンに伝えると、物音がした。
「まさか、もんざえモンか!?」
「えええっ!!」
　もんざえモンかと思っていたら、やってきたのは・・・
「楽しいなぁ・・・楽しいなぁ・・・」
「太一さん？」
「八神？」
「おもちゃの町は、楽しいなぁ・・・楽しいなぁ・・・楽しいなぁ・・・」
　顔を引き攣らせた笑みを浮かべておもちゃの車に追いかけられている太一だった。
「全然、楽しそうじゃない・・・」
「そりゃあ、おもちゃとは言え、車に追いかけられちゃあ、そうだろう」
　すると、太一の他にも、
「とってもとっても面白ーい・・・」
「どこが面白いの？」
「いや、俺に聞かれてもな・・・」
　猿のぬいぐるみに追いかけられる空。
「愉快だな、愉快だな・こんなに愉快なことはない」
　おもちゃの兵隊たちに追いかけられる光子郎
「ちっとも愉快そうじゃない。」
「うん」
「兵隊に追いかけられて愉快だなんて、マゾか？」
「超、超、超嬉しーい・・・」
　汽車のおもちゃに追いかけられているヤマト。
「石田よ、その光景から見て取れるのはお前が泉と同じくマゾではないかと言うことだけだぞ」
「最っ高、文句なしの最っ高!!」
　丈は大きな鳥もおもちゃに追いかけられ、
「ばんざーい、ばんざーい、ばんざーい」

タケルはラジコンのヘリコプターに追われていた。
みんな無理に笑みを浮かべている様子で、感情が楽以外のモノを取られたように見える。
「みんな、感情を取られちゃったみたい・・・・」
「それにパートナーデジモンが居ない・・・・」
現状で太一たちを助ける方法がみつからないので、まずは行方不明になっているカマクラを始めとするデジモンたちを捜す八幡たち。
すると、一軒の家の中にある宝箱が不自然に揺れており、中から声が聞こえた。

15話

サバンナのど真ん中にある工場から、地下水道へと降りて、歩いていくとそこにはナメクジの様なデジモン、ヌメモンが沢山生息していた。

ヌメモンはデジモンの中でも最弱のデジモンで、成熟期デジモンながら、成長期はもとより、幼年期iiレベルのデジモンと同レベルの強さしか持ち合わせていないかもしれない。

しかし、そんな最弱デジモンながら、多数で迫られると厄介なデジモンでもある。

なにせ、ヌメモンの攻撃手段が自らの排せつ物を投げつけてくると言う技なのだ。

汚物系デジモンであるならば、こうしたヌメモンの攻撃に対してもなんら影響はないが、通常のデジモンならば、汚物まみれにはなりたくないので、多数のヌメモンの前では、逃げるしかなかった。

ましてや、人間ならば当然の反応であり、八幡たちも逃げた。

地下水道から逃げると今度は大きなクマのぬいぐるみの様なデジモン、もんざえモンが襲い掛かってきた。

パルモン曰く、もんざえモンはおもちゃの町の町長で、良いデジモンのはずだった。

それが、一体何があったのかは不明だが、八幡たちに襲い掛かってきた。

カマクラはもんざえモンと戦うが、完全体のデジモンであるため、レベルの差があり、あえなく敗北した。

八幡自身は何とか、逃げたが、カマクラはもんざえモンに捕まっておもちゃの町に連れていかれた。

もんざえモンを追いかけておもちゃの町にやってきた八幡は、そこでミミとパルモンと再会することが出来た。

しかし、おもちゃの町には人間はおろかデジモンも見当たらない。

そこで、八幡、ミミ、パルモンはおもちゃの町を探索していると、お

もちゃに追いかけられている太一たちを見つけた。
彼らは口では「楽しい～!!」と言っているが、表情と言動が矛盾していた。
おそらくもんざえモンの仕業であることは容易に想像がついた。
しかし、太一たちのパートナーデジモンの姿は見当たらない。
どこにいるのだろうか？
そんな中、ある家の中にある宝箱から物音が聞こえてきた。
八幡たちがその家に入ると、宝箱の中から、アグモンたちの声が聞こえてきた。
「その声は!?もしかして、アグモンか!?」
八幡が宝箱に声をかけると、
「その声は八幡か!?」
「ああ、そうだ」
「なぁ、アグモン。カマクラを知らないか？」
「それにガブモン、テントモン、ピヨモン、パタモン、ゴマモンは？」
八幡とパルモンはパートナーデジモンの行方を訊ねる。
「みんな、この中に居る」
どうやら、この宝箱の中にパルモン以外のパートナーデジモンが監禁されているみたいだ。
「どうして箱に閉じ込められているの？」
「もんざえモンにやられたんだ。それで、気が付いたら・・・」
「ここに・・・」
「この箱を壊すことが出来ないのか？」
「何をやってもダメだ!!」
「カマクラのパンチでもか？」
「残念ながら・・・」
成熟期デジモンのカマクラのネコパンチでもこの宝箱を破壊するのは不可能だと言う。
「ど、どうしよう・・・」
「もんざえモンを倒すしかないわ」
「えええーっ」

「む、無理よ」
この宝箱を開けるにはもんざえモンを倒して、カギを手に入れるしかない。
しかし、パルモンはまだ成熟期に進化することが出来ない。
成長期のデジモンである自分が完全体デジモンであるもんざえモンに勝てる筈がないと言う。
だが、現状で太一たちやカマクラたちを救う手はアグモンの言う通り、もんざえモンを倒すしかない。
「パルモン、もんざえモンは確か良いデジモンなんだよな？」
「そうよ、おもちゃを愛し、おもちゃから愛される良いデジモンの筈よ」
「良いデジモンの筈が突然、１８０度異なる行動をする・・・それって、メラモンやアンドロモンの時と同じじゃないか？」
「そういえばそうね・・・」
「って、ことは、もんざえモンの体の中にも例の黒い歯車が入り込んでいる可能性がある。だからある程度のダメージを与えるだけで何とかなるはずだ」
八幡はもんざえモンの異変に例の黒い歯車が関係している可能性を示唆するが、
「でも、もし、黒い歯車のせいじゃなかったら？」
「・・・」
ミミは万が一、黒い歯車の影響でなかった場合を訊ねる。
「でも、このままじゃあ、太一たちは▪おもちゃのおもちゃにされたままなんだ」
「ヤマトを助けてくれ!!」
「今、頼りにあるのはミミとパルモンだけなんだ」
アグモンに頼られ、ミミとパルモンはイヤイヤながらも、もんざえモンと戦うことになった。
八幡はパートナーデジモンが捕まっているので、足手まといになってしまう。
その為、なんとかこの宝箱を開けられないかと、落ちていたピンで

ピッキングに挑戦した。
八幡が宝箱のピッキングをしている時、ミミとパルモンはおもちゃの町を歩いていた。
すると、
「バンザイー!!バンザイー!!」
ヘリコプターのラジコンに追いかけられているタケルとすれ違う。
顔は引き攣っており、無理に笑みを浮かべている。
アグモンが言うには、太一たちはもんざえモンに感情を取られておもちゃのおもちゃにされているのだと言う。
だから、おもちゃに追いかけられているのに、表情と矛盾している言葉を発していたのだろう。
それからすぐにミミとパルモンはもんざえモンに見つかった。
もんざえモンは目から赤いレーザーを撃ちながら襲い掛かってきた。
ピンチな中、ミミとパルモンの窮地を救ったのは、なんとヌメモンたちだった。
どうやら、ヌメモンたちはミミに惚れたみたいだった。
力もなく、排泄物を投げるしかないヌメモンたちが、ミミを助けるために完全体のもんざえモンに立ち向かう姿を見て、パルモンの中の何かが弾けた。
すると、ミミのデジヴァイスが光ると、
パルモン進化――――トゲモン
大きなサボテンの姿をしたデジモンに進化した。

トゲモン
レベル：成熟期　タイプ：植物型デジモン　属性：データ
巨大なサボテンの姿をした植物型デジモン。
体内に栄養素データを保存することができ、何も無い砂漠地帯でもしばらくは生きていくことができる。
その表情からも見てとれるように、普段は何を考えているか全く分からず、1日中ボーッとしていることがほとんど・・・しかし、ひとた

びトゲモンを怒らせるとその形相が一変し、暴れ出して手が着けられなくなる。
必殺技は腕先のトゲを更に硬質化させてバンバン殴る『チクチクバンバン』。

成熟期に進化したばかりのトゲモンであるが、完全体のもんざえモン相手にボクシングの様に殴り合い、必殺技のチクチクバンバンでもんざえモンの身体をトゲまみれにすると、もんざえモンの背中のチャックが開き、そこから黒い歯車が飛び出すと、消えた。
トゲモンともんざえモンの戦いが終わった時と同時に、八幡はパートナーデジモンたちが閉じ込められている宝箱の鍵のピッキングに成功した。
「よし、開いた!!」
鍵を外して、宝箱の蓋を開けると、
「ふんっ!!」
「へぶっ!!」
いきなり、カマクラからアッパーをくらった。
「いってぇなぁ!!いきなり何しやがる!!」
顎を手でさすりながら、カマクラに怒鳴る。
「遅い!!」
カマクラは八幡が助けに来るのが遅いと言うが、実際はそれだけでなく、連続して完全体に敗北したことがイライラを募らせたようだ。
もんざえモンを正気に戻したことで、もんざえモンになぜ、こんな事をしたのかを訊ねると、彼は不遇な目に遭っているおもちゃの為に歪んだ思想を持ったのだと言う。
そうした歪んだ思想が黒い歯車の影響で増大されて、凶暴化したらしい。
お詫びとして、もんざえモンからは気分を幸せにする本物のラブリーアタックをしてもらった。
このラブリーアタックで、カマクラのイライラが少しでも緩和できればと思う八幡だった。

おもちゃの町を出て、なんかだんだんと山間部みたいな場所へと入ってくると、寒気が押し寄せてきた。
「寒いよ・・・・」
「萎れそう・・・・」
タケルとパルモンは寒そうに体をさすっている。
「約二匹やけに元気だよな」
丈はゴマモンとガブモンをちらりと見た。
「なるほど、ガブモンは毛皮を着ていて、ゴマモンはアザラシだから寒いところが得意なのか」
八幡はパルモンとは打って変わって、元気そうな二体のデジモンを見ながら呟く。
「カマクラは大丈夫か？」
進化前のカマクラならば、黒ガブモンなので、きっとヤマトのガブモンみたいに元気だろう。
しかし、今は進化した状態なので、もしかしたら、感じ方が異なるかもしれない。
「暑いよりはマシだ」
確かにサバンナ気候の場所ではカマクラの毛皮は熱を吸収しやすい色をして、結構バテぎみだった。
それならば、暑いよりは寒い方がマシなのだろう。
「まっ、でも寒いのもわるかないよな」
「えー!?」
「そんな、勘弁してください！」
太一の発言にタケルとミミが驚く。
そして光子郎も文句を言っていた。
「だーって雪が降れば雪合戦出来るぜ？」
「雪合戦!!」
タケルとミミは雪合戦と聞いて、はうって変わって喜んだ。
「雪合戦か・・・・」
「なんやそれ、食べもんかいな？」

「違いますよ。雪合戦というのは雪玉をぶつけ合う遊びの一種ですよ」
「なんや」
　食べものじゃなかったらすぐ興味を失ったテントモン。
「久しぶりに勝負できるな！」
「負けないぜ！」
「楽しみだねー！」
「僕、かまくら作りたい！」
　太一とヤマトに続いて、空とタケルもはしゃいでいる。
「かまくらって作るの？」
　パルモンは『かまくら』と聞いて、カマクラを見る。
「なんや？ブラックテイルモンを増やすんでっか？」
「違うよ」
「そなら、食べ物に違いあらへん！」
「それも違う」
　パルモンとテントモンの会話に八幡と光子郎が突っ込んだ。
「気楽なんだから。雪なんて降られたらたまらないよ」
　雪に対してはしゃいでいる太一たちとは異なり、丈はみんなと離れた場所で嘆いていた。
「まぁ、確かにな・・・」
　丈の愚痴を聞いた八幡はそれに同意した。
「というか、八神たち、あの格好で寒くないのか？」
　太一たちは夏休みのサマーキャンプに来ていた。
　夏休みなので、当然身に纏っている服は薄手の服だ。
　しかし、ここは今にも雪が降りそうな気温な場所。
　もし、吹雪にでもなったら、凍死しないだろうか？
「丈先輩、比企谷君も何で深刻な顔しているの？」
　空が丈と八幡に声をかけてきた。
「はあ、深刻にもなるさ。考えてもみろよ、これ以上気温が下がれば野宿だって難しくなる。寒冷地では、食料の調達だって大変になるだろうし……頭が痛いよ。僕はみんなを守らなくちゃいけないからね」

他の子がはしゃいでいるのを見ながら、丈は真面目にこれからのことを考えていた。
「僕は、一番年上なんだから……」
彼はまるで自分に聞かせるかの様に呟いた。
そして、彼の予感は不幸にも的中した。
森を抜けた先は一面の銀世界だった。
「ほら見ろ、僕の心配した通りだ」
丈が不機嫌そうに呟いた。
「これからどうするの？」
「とりあえず、先へ進む。ここでボケっとしていてもしょうがないだろう」
「ええっ!?この雪原をか!?」
「そうだよ、これ以上は無理だよ！」
太一の意見に、ヤマトと丈が反論する。
「じゃあどうするんだよ？　前は雪原、後ろはあの山、どっちにしろ、どっちかに進むしかないだろう？」
背後にある山を指しながら、太一は言った。
一方、三人が険悪なムードとなっている中、ミミとタケルは無邪気に雪原を駆け回っていた。
「ん？なんか変な臭いがしないか？」
カマクラが鼻をヒクヒクさせて、変な臭いがすると言う。
「えっ？ん～・・・ホントだ、変な臭いがする」
アグモンも鼻をヒクつかせて辺りのにおいを嗅ぐと、確かに変な臭いがした。
「これってもしかして・・・・」
「あっ、あれだ！」
辺りを見回していた光子郎が灰色の煙を指差した。
「煙が出ている！」
「そうか、この臭いは・・・・」
「温泉だ!!」
「温泉!?」

雪原を駆け回っていたミミとタケルが同時に嬉しそうに叫んだ。
変な臭いは温泉が放つにおいだった。
温泉に入れるかもしれないと言うことで、煙が立っている場所へと行くと、そこは・・・
「・・・って、これ沸騰しているぜ！」
太一が思わず嘆く。
そう、確かに温泉はあったのだが、そこはボコボコと言う音を立てて煮えたぎっている源泉だった。
「地獄にありそうな感じのシロモノですね」
「これに浸かるんかいな・・・」
「まさか」
光子郎はテントモンの問いに即答していた。
こんな沸騰している温泉に入ったら、それこそ本物の極楽に召されてしまう。
「うわーん、これじゃあお風呂に入れない！」
「でも、あったかいわ」
「とりあえず、寒さはしのげるな」
パルモンとヤマトは湯気に当たって暖を取っている。
「呑気な事言っている場合か!?　食料はどうするんだよ?　ここには食料なんて・・・」
「あるよ！」
丈の台詞を、タケルが遮った。
「何言っているんだよ、こんな岩だらけのゴツゴツしているところに」
「ほら」
その指差す方向をみてみると、そこにはなんと、この場にはあまりにもそぐわない家電・・・冷蔵庫があった。

16話

おもちゃの町を後にして、山間部に入った八幡たち。
すると、天候は悪化して、雪が降り始めた。
真夏の服装で、雪の中に居ては凍死してしまう。
そんな中、山間部で沸いている温泉を見つけた。
しかし、源泉は沸騰しており、入れない。
だが、熱気のおかげで寒さだけは凌げる。
あとは食料なのだが、こんな雪山に食料がある筈もない・・・・
と、思ったら、彼らの目の前に冷蔵庫がポツンとあった。
「そんな馬鹿な!?」
冷蔵庫を見て丈のメガネが思わずズレる。
山間部の源泉地帯に冷蔵庫なんてあまりにも不釣り合いなのだが、
空腹状態の一行にはそんなの関係ない。
「……ひ、非常識だ！　何でこんなところに冷蔵庫が!?」
しかし、丈は冷蔵庫の存在に対してツッコミをいれる。
「城戸先輩、この世界で人の世界の常識を求めてはやっていけないぞ。
今までにもこういうのがあったじゃないか」
八幡が丈の肩をポンポンと叩き、彼に諭す。
「何が入っているのかな？」
「そういう問題じゃないだろう!?」
「とりあえず開けてみたら？」
「だから！」
丈の言葉を無視して冷蔵庫を開けようとする太一たち。
（先輩なのに哀れだ～・・・・）
丈は哀れむ八幡。
「ミミ、ゼリーがいいな―！」
「ゼリーってなに？」
「よーし、開けちゃえー！」
冷蔵庫を開けてみると、そこには・・・・

「たまごだ!!」
冷蔵庫の中には沢山の卵があった。
それもデジタマではなく、人間界におけるニワトリの卵が・・・・
「今日の夕食はこれで決まりだな!」
「ちょっ、ちょっと待てよ!」
今日の夕食のメニューを想像してウキウキな様子の太一に丈が食いかかった。
「食べられるかどうか分からないじゃないか!」
「確かに、腐っているかもしれないし・・・・」
八幡もその卵が食べられるのかやや懐疑的だ。
「大丈夫だよ、毒味だったら俺がやるからさ」
「殻を割ってみたら、卵の中身じゃありませんでしたってことも考えられるからな、この世界じゃあ・・・・」
デジタルワールドなので、その卵を割ってみても中身が卵の黄身なのかも不明であり、怪しむ要因となる。
「それは、割ってみればいいことさ」
「まっ、確かに・・・・」
「何言ってんだよ! 食べられるにしても、人の物を勝手に食べるなんて泥棒と変わりないじゃないか!」
「いや、人の物じゃないと思うが・・・・」
カマクラが丈にツッコミを入れる。
「仕方ないだろ、腹減っているんだから」
「事情を話せば分かってくれるわよ」
「何しろ、非常事態ですからね」
「夕食はこれで決まりや!」
ヤマトと空、それに光子郎とテントモンも卵を食べることには賛成のようで、丈の意見は結局聞き入れてもらえなかった。
「城戸先輩・・・・」
八幡は再び丈の肩に手をポンと置く。
「ひ、比企谷君・・・・」
「諦めましょう。こうなったら止められませんよ。もし持ち主が現れ

たら俺も一緒に謝りますから・・・それに、人間だった場合、結果オーライじゃないですか」
（持ち主が仮にいたとしてもソイツは多分、人じゃないだろうけどな・・・）
「そ、そうだね・・・」
丈はそう返事をしながら、ため息をついていた。
確かに丈自身、お腹も減っているし、それに八幡の言う通り、人が来てくれるなら、結果オーライだった。
しかし、八幡はたとえ卵の持ち主は現れたとしてもそれはきっと人間じゃなくて、デジモンだろうと思っていた。
こうして、みんなは夕食の準備をする。
空は蒸された石の上に卵を落として目玉焼きをつくり、デジモンたちは周辺の木を倒して、それを削り、食器を作る。
八幡はタケルと一緒にゆで卵を作っていた。
なお、かごに関してはデジモンたちが食器と共に制作したものを使用した。
「できた！」
「いい茹でぐあいだな」
「うん！」
それぞれの準備が終わり、八幡たちは食事の席についた。
テーブルには目玉焼きにゆで卵、卵焼き――色々な卵料理が並んでいる。
「いただきます！」
「……いただきます」
丈はワンテンポ遅れていたが、とにかく八幡たちは卵料理を食べ始めた。
「うん、うまい。こんなまともなメシって久しぶりだよ」
「これで白いご飯でもあれば言うことなしだな」
「ほかほかご飯にゆで卵！」
「確かにいいな・・・ＴＫＧ・・・」
温かいご飯なんてしばらく食べていない。

今日は卵を食べることができてラッキーだった。
卵の元の持ち主には悪いけど――。
「なんだ？丈、食べないのか？」
ゴマモンが丈に話しかける。
目線を自分のお皿から移すと、丈は卵料理に手をつけていなかった。
「ああ……うちに帰れば、こんな苦労しなくていいんだなと思ってさ」
丈のその一言で、一気に場の空気が重くなった。
「……あたし、お家に帰りたい」
「みんな、どうしているかな」
「あれからもう、三日も経っているんですよね」
ミミが呟くと、タケルと光子郎も続けて言った。
「……ねぇ、みんな、目玉焼きには何かけて食べる？」
沈黙が続く中、空はみんなにそう訊ねた。
おそらくこの重い空気を拭おうとする彼女なりの気遣いなのだろう。
「目玉焼きには塩コショウって決まっているじゃないか」
「俺、醤油」
「何もかけない。そのまま・・・・」
「マヨネーズ」
「あたしはソース」
丈に続いて太一と八幡、ヤマト、そして空がテンポ良く回答する。
「僕はポン酢を少々」
光子郎がそう答えたとき、流れがピタッと止まった。
「へへへへへ……」
「ポン酢ね……」
「気持ち悪ーい……」
太一とヤマト、タケルがドン引きする。
「ええー!?　みんな変よ！　やっぱり目玉焼きって言えばお砂糖よね、あたしその上に納豆のっけたのも大好き！」
ミミの発言に、さすがに今回ばかりはフォロー出来ないほどみんな

ドン引き、八幡もカマクラもドン引きであった。
（太刀川ってゲテモノ好きか？）
（腹壊さないのか？）
「納豆!?」
「それ変過ぎだよー!!」
　空とタケルが叫んだ後、太一とヤマトは変な笑い声をあげていた
「ええ!?　みんな目玉焼きにそんな変なものをかけるのか……ショックだ……日本文化の崩壊だぁぁぁぁー!!」
「落ち着つけって」
「何を訳わかんないこと言ってんだよ」
　八幡と丈を宥めていると、ゴマモンが呆れたように言った。
「おい、丈？」
　ヤマトも心配した様子で話し掛ける。
「そこまで悩むか、普通？　まっ、納豆は悩むかもしれないけどな」
「だって、目玉焼きには塩コショウだもの。ソースでもマヨネーズでもなく、塩とコショウ！」
　太一の言葉に丈は頑固に言い張っていた。
「何をかけてもいいじゃないか・・・先輩、それはエゴというモノだぞ」
「やれやれ、丈は融通が利かないなぁ」
「なんだと!?」
「だってそうだろう？　どうでもいいことで悩むし」
「僕のどこが、融通が利かないんだよ！」
「ほら、すぐムキになる」
　徐々にゴマモンとの言い争いがヒートアップしてくる。
「あーあ、始まった」
　ピヨモンが頭を抑えた。
「おい丈、落ち着けよ！」
　ゴマモンに拳を握っていた丈をヤマトが抑えた。
「うるさい！」
　なだめようとしたヤマトの手を丈が振り払う。
「僕は落ち着いているよ！　いつだってね……！」

「今日はどうかしているぞ。疲れているんじゃないのか……？」
ヤマトは困惑の表情を浮かべたが、そのまま丈を宥めた。
「疲れてなんかないよ！　どうかしているのは、みんなの方だ!!」
そう言って丈はどこかへ行ってしまった。
そして、彼はこちらを一切、振り返らなかった。

食事が終わった後、太一とヤマトがまた口論を始めた。
「何度も同じこと言わせるなよな！」
「ダメだ、危険過ぎる！」
「八神も石田も、そんなに声を荒立てるなよ」
八幡は二人を宥めた。
「考えていたってしょうがないだろう!?」
「俺は、『少しは考えろ』って言ってんだよ！」
「じゃ、何か？　俺は何も、何も考えてないってか？」
「その通りだけど」
「ああん!?」
徐々にヒートアップしていく太一とヤマト。
「はぁ～ダメだ、こりゃ……こいつら、完全に頭に血が上っているよ……」
「どうしたんだ？」
思わずため息をつくと、いつの間にか丈が戻ってきていた。
「ん？ああ、先輩」
八幡は太一とヤマトを放置して丈の傍に移動する。
「比企谷君、何を揉めてんだ？　あの二人は……？」
「ムゲンマウンテンに行くか行かないかで揉めているんです」
光子郎はそう言うと、ファイル島のなかでも一番高い山を指差した。
「ムゲンマウンテン？」
「あの大きな山のことや」
「太一は、あそこに行けば全体が見渡せるって」
「確かに、あのくらい高い山なら全体を見渡せる」

空の言葉に丈が頷いた。
「でもヤマトは危険だからって反対しているのよ」
「あの山には凶暴なデジモンがたくさんいるのよ」
「うーん、なるほど。それは危険だ」
空とピヨモンがそう続けると、丈も納得する。
「なんだよ！　そんな逃げ腰じゃ埒があかないだろう！」
「お前の無鉄砲に付き合わせて、みんなを危険に晒すつもりかよ？」
「なんだと!?」
「待ってくれよ、二人とも！　まずは落ち着いて話し合おう、喧嘩しないでさ」
そして未だ言い合いを続けている二人に丈が仲裁に入った。
「で、丈はどう思う？」
「え？」
「どっちに賛成なんだよ？」
「うーん……太一の言っている事は正しいよ、あれに登ればこれからの指針にはなると思うよ」
「ほら見ろ」
太一はヤマトに向けてドヤ顔を見せた。
「だけど、ヤマトの言う事ももっともだ。みんなを危険に晒してまであの山に登る意味があるのか、って言うと……」
丈は首を傾げて悩んでいた。
その様子を見た太一とヤマトが肩を落とす。
「ともかく、行ける所まで行こうぜ！」
「だから、違うって言っているだろう！」
「待てよ！　今考えているんだから、ちょっと待てって！　落ち着けよ！」
「熱くなっているのは丈の方だろ!?」
「な、なんだよ!?　僕は君たちを・・・・」
「だーから、行けばいいんだよ！」
「なんでそうなるんだ!?」
「……聞けよ！　俺の話も!!」

そして丈までもが二人と言い争いになってしまった。
「ストップ！　三人とも、いい加減にしてよ！」
「上級生３人が大声で言い争っていたら怖いでしょう!?」
「今日の所はもう遅いし……」
「そうそう、寝る時間だよ」
「続きは明日にしようよ。明るくなればもう少し周囲の状況も見やすくなる」
空と八幡で三人を止めると、デジモンたちもそれに賛同するように言った。
「他のみんなも心配そうだし、ほら行きましょう！」
「はいおやすみ」
そう言いながら空とデジモンたちは太一とヤマトの背中を押し、強引に寝床へと連れてゆく。
タケルたちも後に続いた。
そこに残されたのは丈、一人のみだった。
みんなが寝静まった中、丈は一人起きていた。
そして「僕が……」と呟くと、洞窟の外へ出る。
「やれやれ、思った通りだ・・・ゴマモン、お前も起きているんだろう？」
八幡は横になっているゴマモンにも声をかける。
「バレてたか」
「真面目な優等生、ましてやこの中で最年長となると、やりそうな事もだいたいわかる。行くんだろう？」
「勿論さ、丈は俺が居ないと危なっかしいからな」
八幡とゴマモン、そしてカマクラは丈を追いかけた。
そして、山に登ろうとしている丈にゴマモンが声をかける。
「あーあ、カッコつけちゃって。１人であの山に行くつもりかい？」
「ゴマモン！　それに比企谷君にカマクラまで!?」
丈は驚いた表情でこちらを見る。
「止めても無駄だぞ」
「だろうね」

「さっ、どうぞ」
「とっとと行っちまえー！」
八幡、ゴマモン、カマクラは止める様子もなく、丈を見送ると、彼は山を登り始める。
そして、八幡たちはその後ろを歩く。
「ついてくるな、僕は一人でいく！」
「別にぃ？　オイラもあの山に用があるんだ」
「俺は・・・天体観測をするために山を登っているんだ」
「苦しい言い訳だぞ、八幡」
「うるせぇよ」
「……勝手にしろ」
「「勝手にしまーす」」
そして結局、八幡たちは仲良く並んでいくことになった。
「まったく、素直じゃないなあ丈は」
「何が」
「一人で心細かったんだろ？」
「馬鹿言うな！」
「いいって、いいって、気にすんな」
（これが俗にいうツンデレなのか？）
ゴマモンと丈のやり取りを見てそう思うカマクラであった。

17話

おもちゃの町を後にして、雪が降る山間部へとやってきた八幡たち。
真夏の服装で雪が降る中での野宿は危険だったが、運よく源泉を見つけた。
温泉には入れなかったが、源泉の蒸気で、暖はとれ、しかもその場には、何故か温泉地帯にはそぐわない冷蔵庫がポツンとあった。
中を見てみると、そこは沢山の卵があった・・・
夕食は卵料理づくしとなり、食後、今後の方針で太一とヤマトが揉めた。
太一の主張ではファイル島で一番大きな山、ムゲンマウンテンへ登ってみようと言う提案。
しかし、ムゲンマウンテンには凶暴なデジモンが生息していると言う。
ヤマトはそんな危険な場所へわざわざ出向いてみんなを危険にさらすようなことは出来ないと言う。
両者の主張は平行線となり、結論は明日へと持ち越しとなる。
そんな中、メンバーの中で最年長の丈が、最年長者としての矜持なのか、プライドなのか、一人でムゲンマウンテンへと登っていく。
八幡、カマクラ、ゴマモンは丈の動きに気づいており、彼の後を追う。
当初、口では強がりを言っていた丈も内心、嬉しかったりもする。
そして、現在、八幡たちはムゲンマウンテンの登山道を歩いていた。
「それにしても大きな山だな」
「そうですね。しかも険しすぎ、段差も多いし、坂が急」
「もう根をあげたのか？」
「だらしねぇな」
人間組と異なり、デジモン組はまだまだ余裕がみられる。
「そんなんじゃないよ！」

「いざとなったらオイラが手を貸してやるよ！」
「え、手？　それ手だったの？」
「怒るよ？」
「冗談、冗談」
「あは」
「どうした？」
「丈にも冗談言えるんだ・・・・いや、なんでもない、行くぜ！」
　ゴマモンは嬉しそうに笑うと、ずんずんと歩き出した。
「なんだったんだ、今のは・・・・？」
「ゴマモンなりに、先輩を励ましたんじゃないんですか？」
「そうなのかな？」
「多分・・・・ああ、あと先輩」
「ん？なんだい？」
「あまり一人で抱え込まない方がいいぞ」
「えっ？」
「ボッチの俺と違って、先輩には大勢の仲間がいるでしょう」
「ボッチって・・・・」
「ああ、アンタは知らないが、コイツは学校でも親しい友人は存在しない。あたしが目を光らせているが、もし、デジモンと言う存在がなかったら、コイツは学校でも苛めの対象になっていた」
「ぐっ・・・・正論なだけに否定できない」
（カマクラ君の言い方だと、なんだか普通にデジモンと暮らしている様な口ぶりだな）
　丈はカマクラの言う八幡の学校生活にて、デジモンが周囲に存在しているのが当たり前のように聞こえた。
　だが、少なくともこのファイル島に来るまで、自分の周りにはデジモンなんて存在はなかった。
　しかし、丈は忘れている・・・・
　彼はお台場に来る前は光が丘と言う場所に住んでおり、そこで、デジモンを見たことを・・・・
　カマクラの発言に疑問を感じつつも、今はこのムゲンマウンテンの

調査を優先させた丈は八幡たちと共にムゲンマウンテンの登山道を登っていく。
川を超えたり、丸太の一本道を渡ったり、洞窟を通り抜けたりと、ムゲンマウンテンの登山は順調に歩を進めた。
「ひどい道だな……」
「こわっ!!」
一人がやっと通れる崖に遭遇したときはどうなるかと思ったが、無事渡ることが出来た。
先に登り終えた丈がゴマモンを抱え、地面に着地させた。
「はーちょっと休憩!まだあと半分くらいかな」
「結構やるじゃん、丈」
「ゴマモンもね」
「あと半分か・・・・」
八幡がムゲンマウンテンの頂を見上げる。
その瞬間、地面が揺れ出した。
「なんだ!?」
「地震!?」
「まさかこの山、火山なのか?」
「まさか、噴火か!?」
「ムゲンマウンテンは火山じゃないはずだぞ」
ゴマモンは、ムゲンマウンテンは火山ではなく普通の山であると言う。
では、この振動はなんなのか?
噴火でないとすると地震なのか?
すると、背後の山が割れて、そこから黒い歯車が大量に出て来た。
「あっ、あれはっ!?」
「黒い歯車だ!」
「なぜあんなところから・・・?」
「行ってみよう、何かわかるかもしれない」
八幡たち黒い歯車が出て来た場所を目指して歩き出した。
「たしかここら辺だったんだけど・・・」

「うーん・・・仕掛けみたいなものは見当たらないな」
「確かにないですね。なんだったんだ一体」
しかしそこにはただ岩山があるだけで他は何もなかった。
だが、確かに黒い歯車はこの山間部から出ていくのを確かに確認できた。
「もっとよく探してみよう」
「ええ・・・」
「待て・・・何か来る・・・」
「ん・・・確かに、何か聞こえる」
「「えっ？」」
カマクラとゴマモンは何かを感じ取り、八幡たちも耳をすませる。
すると、太陽がすっかり登った空から羽ばたきながらなにかが来るのが見えた。
「馬？」
「いや、あれはペガサスか？」
「あ、ユニモンだ！　賢くて大人しいデジモンだよ」
「結構、レアなデジモンだ」

ユニモン
レベル：成熟期　タイプ：幻獣型デジモン　属性：ワクチン
伝説の聖獣、ユニコーンの角とペガサスの羽を持ち合わせた合成デジモン。
背中に生えた大きな翼で、コンピュータネットワークの世界を瞬時に駆け回り、額から伸びた鋭い角で敵を突き刺す。
野生のユニモンは暴れ馬のごとく気性が荒いが、手なずけてしまえば手足のように扱うことができる。
必殺技は大きな口から吐き出される気功弾『ホーリーショット』。
「隠れろ！」
丈はゴマモンを抱え、八幡の腕を引っ張った。
「なんだよ～ユニモンは大人しいんだから隠れなくても」
「君らのそのデジモン情報ってさ、当てにならないじゃん」

「確かに」
パートナーデジモンの野生のデジモン情報はこれまでことごとく外れてきた。
それはあの黒い歯車が原因なのだろう。
あの黒い歯車さえなければ、パートナーデジモンのたちのデジモン情報は当たっている筈だ。
実際にクワガーモンやヌメモンの情報は当たっていたし・・・
「うーん、合っているとは思うんだけど、大体が縄張り争いをしていたり、あの黒い歯車が入っていたりしているから」
「なるほど、出会うタイミングが悪いんですね」
「そういうこと」
そんなことを話している間にユニモンは小さな滝まで飛んできて水を飲み始めた。
その光景は人間界では決して見ることのできない何だか幻想的で綺麗な光景だ。
「っあ、ほら。水を飲んでいる。あそこが水飲み場なんだ。綺麗だな・・・」
八幡と同じことを思っていたらしい丈がぽつりと呟く。
「な？　大丈夫って言ったろう？　もっと近くで見ようぜ」
「あっ、おい！」
ゴマモンがユニモンに近づこうとしたそのとき、突然音が聞こえてきた。
「ん？・・・何か、来る」
その音は徐々に近づき、いつの間にか昇った太陽を背に現れる。
「なにっ!?」
「黒い歯車だ!!」
黒い歯車は真っ直ぐにユニモンめがけ飛んで来て、そのまま背中へと刺さってしまった。
「ああ!!」
「や、ヤバい」
「め、目が・・・目が逝っちゃっているよぉ!?」

「こっちを見るな!!」
ユニモンの視線がこちらに移る。どうやら標的にされたようだ。
「逃げるぞ!」
八幡の言葉で、全力でユニモンから逃げた。
「うわあ!」
ユニモンの攻撃がすぐ近くに当たる。
「ゴマモン、何とか出来ないの!?」
「何とかって言っても・・・・」
「うわぁぁぁ!」
そしてついにユニモンが八幡たちの目の前に現れた。
後ろに逃げようと振り返ったが、既にユニモンの攻撃でふさがっていた。
こんな足場の少ない不安定な場所では、カマクラも満足に力を出せない。
「ダメだ、道がない!」
その間にもユニモンは口でチャージをしている。
もうすぐ放たれそうだ。
「くっ、イチかバチか・・・カマクラ、アーマー進化だ」
八幡がデジヴァイスをカマクラに向ける。
すると、カマクラが首にかけている赤い真珠の首飾りがデジヴァイスと同調するかのように光りだす。
ブラックテイルモンアーマー進化――――ネフェルティモン
カマクラはネフェルティモンにアーマー進化した。
「カースオブクィーン!!」
カマクラのカースオブクィーンとユニモンのホーリーショットがぶつかり合う。
そして、ユニモンを吹っ飛ばす。
しかしユニモンはすぐ起き上がり、ネフェルティモンに攻撃をした。
「ぐあっ!!」
ネフェルティモンは攻撃に当たり崖の下へ落ちてゆく。

「カマクラ!!」
八幡はすぐにネフェルティモンのところへ崖を下った。
「やろぅ・・・」
ネフェルティモンはすぐに起き上がり、再びユニモンに向かう。
「ロゼッタストーン!!」
しかしユニモンが体当たりをかまし、再び崖の下へ落ちていった。
ユニモンが近くを通ると、背中に黒い歯車が浮き出てきた。
「黒い歯車!? あれを外せば・・・」
「先輩?」
「てえーい!」
突然丈がユニモンの背中へと飛び乗った。
「これを……!」
「丈!」
「これを抜けば・・・!」
丈は黒い歯車を必死に抜こうとする。
すると、ユニモンが痛そうに声をあげた。
「丈、止めろ、無理だよ!!」
「駄目だ、僕がやらなきゃ! 僕が皆を守るんだ!」
しかしユニモンは暴れて丈を振りほどこうとする。
「危ない!!」
「僕が一番、大きいんだから! 僕がみんなを守る、ああ!!」
そしてついに、丈は振り落とされてしまった。
「丈!」
「うわぁぁぁぁぁー!!」
「じょおおお!!」
ゴマモンの声が辺りに響いたそのとき、まばゆい光が一面に広がった。
ゴマモン進化――――イッカクモン
ゴマモンは更に大きなセイウチの様なデジモンに進化した。

イッカクモン
レベル：成熟期　タイプ：海獣型デジモン　属性：ワクチン
分厚い毛皮と頑丈な体は、極寒の地でも耐えられるような構造をしている獣型デジモン。
鋭い角はレアメタルの一つ「ミスリル」でできており、毛皮の下の体皮も同等の硬度を持っている。
足先の爪にあたる部分は、自分の意思で高温を発することのできるヒートトップ。
そのため氷上では、ガッチリと足場を確保できるが、あまり素早く動くことはできない。
戦闘時はライオンに似た堂々とした吠え声で相手を威嚇する。
必殺技は再生可能な角を射出する『ハープーンバルカン』。

「うわあっ!?」
落ちていく丈を起き上がったネフェルティモンがキャッチする。
「お前も無茶するな・・・」
自身のテイマーが無事に助けられたことを確認したイッカクモンは、ユニモンに体当たりをかます。
ユニモンの攻撃が当たったが、イッカクモンはびくともしなかった。
「ハープーンバルカン！」
イッカクモンが必殺技を放つ。
しかし、全てユニモンはよけていた。
「ダメだ、あいつ速いぞ！」
しかしその角から更にミサイルが出てきた。
ユニモンを追跡して、見事当たる。
イッカクモンの攻撃によって、ユニモンの歯車は粉々になり消滅した。
ユニモンもそのまま去っていった。
「やった・・・やった、やった!!」
丈が喜ぶ。
「先輩の勇気が、ゴマモンを進化させたんですね」

「いやあ～」
丈は照れているが、
「それは違うよ」
しかし、ゴマモンはそれを否定する。
「丈の勇気というより、オイラが頑張ったおかげだよ、多分。いや、そうだよ。絶対そうに違いない！」
八幡とカマクラが呆れて見つめている中、丈はゴマモンと目線を合わすようにしゃがんだ。
「なんだ、やるか？」
「ありがとう、ゴマモン。君のおかげで助かったよ」
「えっ？　う、うん」
ゴマモンは顔を赤くして、丈と握手をした。
丈の対応はゴマモンにとって予想外の対応だったみたいだ。
「照れているのか？」
「うるさい、照れてなんかないやい！」
「いや、どうみても照れているだろう・・・・」
「カマクラと同じ反応だからな・・・・」
その後、丈が残してきたメッセージを見た他のメンバーが追いかけてきて、八幡たちはムゲンマウンテンを登り、無事頂上に着いた。
しかし、頂上からの景色を見た後、顔色を変えた。
「こ、これは・・・・」
ファイル島は絶海の孤島だったのだ・・・・

１８話

ファイル島はその名前の通り、周囲を海に囲まれた絶海の孤島だった。
ムゲンマウンテンからファイル島を見下ろした丈が呆然としながら言った。
「なんてことだ……」
足音がしたので振り返ると、そこにはヤマトたちがいた。
「ここは本当に、島だったんだ……。これからどうすればいいんだ、僕たちは……！」
丈はそれに気づくことなく嘆いている。
「どうすればいいんだー!?」
そしてついに丈は叫んでしまった。
「八幡はあまり取り乱していないね」
ゴマモンが自分のパートナーと八幡との違いを冷静に比較して訊ねてくる。
「ここは島って聞いていたからね。ある程度覚悟はしていたしな」
「太一ぃ！　何しているの？」
そんな中、太一は何かをしているみたいで、アグモンは太一に訊ねた。
「地図を作っているんだ。これから何かの役に立つかもしれないからな」
「なるほど、それはいい考えですね」
光子郎はそう言うと、太一の後ろから地図を覗き込んだ。
「……」
光子郎の表情が固まる。
なんだなんだと、他の人も釣られて覗きこむと――。
「とても役に立つとは思えん」
「太一って、図工苦手だったよね……」
「こいつはひでぇ・・・八幡でさえ、もう少しまともな絵をかけるぞ」

ヤマトと空、そしてカマクラはその地図らしきものを酷評した。
「描いた本人がわかっているからいいんだよ！」
「地図なんて書いても無駄だよ……もう、どうしようもないんだ……」
「……どうして、こんな事になっちゃったのかしら」
「ミミ……」
丈とミミは八幡たちの後方で絶望していた。
そんなミミを心配するようにパルモンが声を掛ける。
すると突然、何かが崩れるような音が聞こえた。
「なんだ!?」
音のした方へ向かうと、今さっき通った道が割れていた。
「通れなくなっている……」
ムゲンマウンテンを下りるなら、往路と異なるルートを通らなければならなくなった。
別の登山道で、ムゲンマウンテンを下りていると、道の先に二足歩行のライオンが現れた。
「あっ、レオモンだ！」
「レオモンって？」
「レオモンはいいデジモン！」
「とっても強い、正義のデジモン！」
タケルの問いにパタモンとガブモンが答えた。
（なんか、これフラグじゃねぇか？）
これまでのパートナーデジモンのデジモン情報がことごとく外れていることから、今回もなんだか外れるような気がした八幡。
レオモン
レベル：成熟期　タイプ：獣人型デジモン　属性：ワクチン
百獣の王、気高き勇者とも呼ばれる獣人型デジモン。
狂暴なデジモン達が多い中、強い意思と正義の心を持っており、数多くの凶悪なデジモンを倒してきた。
また、破壊の限りを尽くす〝デジモンハンター〟のオーガモンとはライバルである。
日々の鍛錬で鍛え上げられた強靭な肉体はあらゆる攻撃に耐え、必

殺技の究極奥義『獣王拳』で敵の息の根を止めてしまう。
「獅子王丸」という意思を持った妖刀を腰に携えている。
「子どもたち……倒す！」
レオモンはそう呟いて腰に帯びている剣を抜き出した。
「やっぱり当たった!!コイツも暴走してんじゃねぇか!!」
レオモンの言動から、今回もパートナーデジモンたちのデジモン情報が外れたことに思わず声を上げる八幡。
「そんなー！」
八幡がそう叫ぶと、パタモンは戸惑いの声をあげた。
「逃げろっ！」
ヤマトの号令で私たちは一斉に逃げ出した。
「あっ！」
逃げている途中で太一の地図が飛んでいった。
「太一！」
「太一さん、レオモンが！」
太一は逆戻りして地図を追いかけたが、すぐ後ろにレオモンが迫っていた。
「ああ！」
「ベビーフレイム!!」
アグモンの必殺技でレオモンが怯む。
そのうちに太一は逃げ出した。
しかしベビーフレイムに巻き込まれ、折角太一が描いた地図まで燃えてしまった。
「太一ごめん、地図まで燃えちゃったー」
「しょうがないよ！」
そのまま八幡たちが進んでいくと、曲がり角から緑の鬼のようなデジモンが現れた。
「はーはっはっはっ、いらっしゃーい！」
「ああ！」
「待っていたぜ、覚悟しな！」

「オーガモンだ！」
パタモンが驚きの声をあげた。

オーガモン
レベル：成熟期　タイプ：鬼人型デジモン　属性：ウィルス
東洋の伝説に登場する「オニ」のような姿をしたデジモン。
恐ろしく発達した筋肉から繰り出される攻撃はすさまじい破壊力を持つ。
知性は高いが気性が荒く、「怒り」を原動力としている彼らは破壊の限りを尽くす。
非常に好戦的で、自分より遙かに戦闘力の高い相手にも果敢に戦いを挑むところから〝デジモンハンター〟と呼ばれている。
右腕に持つ骨棍棒はスカルグレイモンを倒した時の戦利品なのだ。
必殺技は巨大な両腕から繰り出される『覇王拳』。

「あれも本当はいいデジモンなの？」
「正真正銘の悪い奴だよ！」
「見かけから見ても分かるだろう!?」
カマクラが冷静にツッコミをいれる。
レオモンはこれまで見てきたデジモンの様に暴走しているみたいだが、オーガモンは暴走している様には見えない。
（オーガモンにはあの黒い歯車が入っていないのか？）
（それともウィルス種のデジモンにはあの黒い歯車は効果がないのか？）
オーガモンを見つつ、これまで見てきた暴走デジモンとオーガモンの違いを分析している八幡。
すると、
「うわっ！」
ミミの声に振り返ると、先ほどのレオモンが剣を構えてすぐ後ろに迫っていた。
「選ばれし子どもたち、倒す！」

「しまった、挟まれた！」
「最初から僕たちをここに追い込む作戦だったんですよ！」
ヤマトと光子郎がそう叫んだ。
「そんな、レオモンとオーガモンは敵同士なのに！」
ピヨモンも困惑気味にそう言った。
「レオモンもこれまでのデジモンと同じ様に暴走しているみたいだ」
「じゃあ、コイツの体の中にもあの黒い歯車が？」
「多分な・・・・」
「骨こん棒！」
「獅子王丸！」
「うわあああ！」
ついにレオモンとオーガモンが八幡たちに襲いかかる。
すると、太一たちのデジヴァイスが光り始めた。

アグモン進化――――グレイモン！
ガブモン進化――――ガルルモン！
パルモン進化――――トゲモン！
グレイモンがレオモンに頭突きをかます。
その間に他のデジモンも進化し始めた。
ピヨモン進化――――バードラモン！
テントモン進化――――カブテリモン！
ゴマモン進化――――イッカクモン！
今度はイッカクモンの角で、オーガモンを押しやる。
「武石、こっちだ！」
八幡に引っ張られ、タケルは岩陰に隠れた。
タケルのパートナーデジモンのパタモンはまだ成熟期のデジモンに進化できない。
自分がもし、敵ならば弱い奴から仕留める。
だからこそ、八幡はカマクラをパタモンとタケルの護衛にまわした。
それに、カマクラはさっきのユニモンとの戦いで進化をして戦った

ので。体力を消耗している。
　無理に進化をしての連続でのバトルはキツイだろう。
「行けっ、グレイモン！」
　太一の声援を受け、グレイモンはレオモンに火の塊を吐いた。
「ハープーンバルカン！」
「チクチクバンバン！」
　イッカクモンはオーガモンに、トゲモンはレオモンに必殺技を放つ。
「いけるぞ、一気にやっつけろ！」
　太一は勝利を確信してそう言った。
　それぞれに三対一、優勢だ。
　このまま押し切れば――！
「トドメだ！」
「メガフレイ……」
　グレイモンが必殺技を放とうとしたそのとき、突然崖から岩が崩れ落ちた。
「崖崩れだ！」
　その際、八幡がタケルを庇った。
「フォックスファイヤー！」
「メテオウィング！」
「メガブラスター！」
「メガフレイム！」
　デジモンたちの攻撃で、岩が粉々になる。なんとか助かったようだ。
「みんな、大丈夫か!?」
「こっちはなんとかな」
「もういや、こんなの！」
　ふとデジモンたちを見ると、全員が地面に伏せていた。
「アグモン！」
　みんなはそれぞれのパートナーの元へ駆け寄った。
「大丈夫、ちょっと疲れただけ……」

「今日、2回目の進化だからな……」
「あいつらは!?」
空が顔をバッと上げた。

「そうだ、オーガモンが！」
「いてまへんな……」
「レオモンも……」
見渡すと、確かにレオモンもオーガモンも見当たらない。
八幡たちを仕留める絶好の機会だったのに・・・・
「今のがけ崩れに巻き込まれたのかも・・・・」
「うわぁ～……ここから落ちたら助からないよ！」
丈が崖の下を覗きながら言った。
「レオモンもオーガモンも飛べそうもないわよね」
「ええ」
空の言葉にピヨモンが頷く。
レオモンもオーガモンも翼を持ったデジモンではないので、飛行属性があるとは思えない。
本当にここから崖下に真っ逆さまの状態で落ちたのであれば、もしかしてとあるが、どちらのデジモンも成熟期デジモンとはいえ、武術に秀でているデジモン・・・・
受け身や何らかの方法で生きている可能性は十分にある。
「じゃ、じゃあ助かったんだ僕たちは！　なーんてついてるんだ、あはは！」
丈が変なテンションではしゃいでいる。
それを見たみんなもほっとした表情になったが、八幡とカマクラは腑に落ちていない様子だった。
「どうした？太一」
「珍しく真面目な表情していますね」
そんな中、八幡とカマクラ同様、太一は深刻な顔をしていた。
「珍しくは余計だ！　……なんで急に崖が崩れたのかと思ってさ」
「向こう側の道が崩されたときに、ヒビでも入っていたのかもしれま

せんよ」
「そうか……」
太一は光子郎の推測に納得したようで、そのまま歩き始める。
（確かに八神の言う通り、あの崖崩れ・・・本当に偶然か？タイミングが良すぎたようにも見えた）
色々と腑に落ちない点が多々あったが、ここからでは今更確認はできないので、八幡とカマクラは、みんなと一緒にムゲンマウンテンを下りた。
時刻は夕暮れ、八幡たちは森の中を歩いていた。
「どう考えても変ですよ、一日に二回も進化なんて・・・・」
光子郎は不安そうに言った。
「いいじゃねぇか、お陰で助かったんだから」
光子郎は別の点で腑に落ちないところがあったが、太一はあくまでもお気楽・・と言うか、結果オーライだと言う。
まぁ、太一の言うこともっともなのだが・・・・
「でも……」
「太一さん、ちょっと楽観的すぎですよ」
「失礼だな！」
光子郎は太一に頭をグリグリとやられる。
「いててて！　ぎぶ、ぎぶ！」
「……ねえ、デジモンたちがパワーアップしているとは考えられないかしら」
空が思いついたように言った。
「そうか、その可能性もありますね」
「だがそうだとしても、流石に今日はハードすぎるな」
ヤマトの言葉にデジモンたちを見る。
たしかにみんな疲れきっていた。
「大丈夫？　パルモン」
「全然大丈夫じゃない……」
「もう歩けないよ……」
パルモンとピヨモンも弱音をあげている。

「駄目だ……どこかゆっくり休める場所を探した方がいいな」
ヤマトの一声で私たちは歩みを止めた。
「そうね、あたしたちもかなり……」
「あーっ！」
そのとき、丈がいきなり大声をあげた。
「あ、あれ！」
丈の指をさす方向を見ると、そこには大きな洋館があった。
そこで、みんなはそこを目指す。
目の前に辿り着くと、丈が騒ぎ出した。
「やった、普通の建物だ！　今度こそ人間が住んでいるに違いない！」
「待て、いきなり入ったら危険だぞ！」
丈は喜んで洋館に向かった。
ヤマトが止めていたが、あれでは聞く耳も持たないだろう。
太一も続けて走ろうとしたが、急に動きを止めた。
「どうした？太一」
「この建物、上から見た時、あったかな？」
ムゲンマウンテンから見下ろした時、こんなにも大きな洋館の姿を見た覚えがない。
「確かに……いや、あったら多分気づいている」
「だよな……」
「地図に何か書いてないの？」
「それは……」
「無くしちゃったの？」
とぼけたこと言うアグモンを太一がジト目で見る。
「お前が燃やしちゃったんだろ！」
「あ、そっか」
そうこうしているうちに、丈が玄関の戸を開ける。
太一たちは急いで追いかけた。
「ごめん下さーい、誰かいませんかー？」
丈が呼びかけてみたものの、中から返事はない。
「どんな様子だ？」

「特におかしいところはないようだが……」
「それだけに、かえって不気味ですよ」
「そうね」
「何か罠があるかも……」
　何かあるのではないかと、疑う者もいた。
「君たち、まさか引き返そうって言うんじゃないだろうね!?　こんな立派な建物があるってのに!?」
　反対に丈は、全く警戒していない。
「うわあ、綺麗な絵!」
　タケルとミミが丈の背後にあった絵の元へ駆け寄った。
「あは、本当に綺麗!　天使の絵?」
「タケル、天使って?」
「うーん、それはねぇ」
「こんな綺麗な天使の絵が飾ってある所に、悪いデジモンがいるはずないじゃないか!」
「まぁ、確かに今更野宿っていうのも厳しいわね……」
「仕方ないか……」
　丈の言い分には1ミリたりとも納得出来ないが、デジモンたちはもちろんテイマーたちも疲れている。
　体力を回復しなければ、デジモンたちは進化もできなければ満足に戦うこともできない。
「おい、みんないくぞ!」
「え?　うん……」
　そして太一が扉を閉めた。
　妙にその音が響いたのは気のせいだろうか?
　こうして、八幡たちはこの怪しい館に一泊することになった。

19話

ムゲンマウンテンからこのファイル島は絶海の孤島であることを知ったテイマーたち。
降りる途中で、ワクチン種で正義のデジモンとして名高いレオモンとそのレオモンの宿敵とされるオーガモンが何故かタッグを組んで八幡たちに襲い掛かってきた。
運良く？起きた崖崩れにより、レオモンもオーガモンも崖の下に落ちていき、ピンチを凌いだ。
ムゲンマウンテンを降りると、謎の洋館があった。
デジモンたちもムゲンマウンテンでの戦いで疲労し、日も暮れてきた。
このまま野宿するわけにもいかないが、ムゲンマウンテンに居た時、こんな洋館あったっけ？という思いがあった。
こんなに大きな洋館ならば、ムゲンマウンテンに居た時、見つけていた筈・・・
そんな疑問を抱きつつも、やはり疲労には勝てず、今夜はこの洋館に泊まることになった。
洋館に入った八幡たちは玄関ロビーの辺りをうろうろしていた。
「ここでこうしていてもしょうがないわよね……」
空が困ったように呟いた。
「もっと奥を探してみようか。いくぞ、アグモン」
「ああ……これは！」
突然ガブモンが声をあげた。
「どうした、ガブモン？」
「食べ物の匂いだ！」
「ええっ!?」
「それもごちそうだ！」
「ええーっ!?」
「こっちだよ！」

そう言って駆け出したガブモン。
太一たちはガブモンの後を追って行くが、八幡とカマクラはまだ玄関ロビーに残っていた。
八幡はやはり、この洋館の存在がきになっていた。
そして、カマクラは睨むように辺りを見回している。
「カマクラ・・・何かを感じるか？」
「ああ・・・陰湿でどす黒い気を感じるぜ・・・」
「じゃあ、ここにも敵が・・・？」
「ああ・今もどこかでほくそ笑んでいるだろうな・・・」
「・・・そうすると、やはりこの洋館で一晩過ごすのは危険じゃないか？」
「だろうな・・・でも、それを言ったところで、アイツらが信用するか？」
「・・・難しいだろうな。パートナーデジモンたちも疲労しているし・・・敵が仕掛けてくるとしたら、いつだと思う？」
「深夜・・・寝静まった時だろうな・・・」
「反対にそれまでは、敵が仕掛けてくる可能性は少ないってことか・・・」
「ああ・・・それまで何とか、体力を回復しないとな・・・」
八幡とカマクラはそんな会話をした後、太一たちが向かった食堂へと行った。
八幡とカマクラより、先に食堂へと入った太一たちは・・・
「……食いもん、だよな……」
「そう見えますが……」
食堂のテーブルの上には、様々なごちそうが並べられていた。
「なんてラッキーなんだ！」
丈は感極まったように叫ぶ。
しかし、ヤマトに空といった頼れる上級生組は怪訝そうな目でそれを見つめた。
「こんな馬鹿な話があってたまるか！」
「いくら何でも話がうますぎるわ」

「何か毒でも盛られているんじゃあ……」
「うーん、本当に美味いわ！」
太一たちが言ったにもかかわらず、目を離した隙にデジモンたちは料理を食べ始めていた。
「なんともないのか、アグモン？」
慌てて太一がアグモンに駆け寄る。
「うん、美味しいよ！」
「こんな美味いもん食わんだって、バチが当たるで」
デジモンたちは美味しそうにガツガツとごちそうを平らげていく。
潜伏性の毒もあり得そうだが、小学生の太一たちにはそこまで頭が回らなかった。
「ぼ、僕は食べるぞ！　少しくらい、ラッキーな事があってもいいじゃないか！　いっただっきまーす！」
丈は立ち尽くすみんなを放置し、料理を食べ始めた。
「お、おい」
もちろん、空腹なみんながそれを見て我慢出来るはずもなく――。
「俺もー！」
「あたしも！」
「僕も！」
「僕も食べる！」
太一やミミ、光子郎にタケルも食べ始める。
「お、おい、タケル！」
ぐぅぅぅ～……
タケルを止めようとするヤマトのお腹の音が盛大に鳴った。
「……俺も食ってやる！」
「背に腹は代えられないわね」
パートナーデジモンたちもテーブルの上の料理を食べても体調に異変をきたしている様子はない。
そのことから料理に毒が盛られている様子はないので、自分たちも空腹状態……
ついにはヤマトと空まで空腹に耐えきれずにテーブルの上のごち

そうを食べ始めた。
八幡とカマクラが食堂に来た時、それに気づいた太一が声をかけた。
「八幡、早く食べないとなくなっちまうぞ！　ほら食え！」
「・・・・」
この時、カマクラには食堂の光景が異常に見えた。
太一たちは空の皿にまるで料理が盛られているかのようにパントマイムをしていたのだ。
「八幡」
「なんだ？」
「ここには何もない・・・あいつら、空の皿を前にパントマイムをしている」
「えっ？」
カマクラは空の皿と言うが、八幡の目には皿の上には美味しそうな料理が盛られているように見えた。
（どういうことだ？カマクラは皿の上に料理はないと言うが、皿の上にはちゃんと料理が盛られているし、八神たちもパートナーデジモンたちも食っている・・・）
八幡は戸惑いつつも、夜には敵が動くことを考え、
「お、俺は食事は良い・・・なんか疲れたからもう寝るわ・・・」
「そうか？」
「ああ・・・それじゃあ、おやすみ」
カマクラと八幡は夜の事を考え、先に寝ることにした。
食事を終えた太一たちは風呂へと向かった。
風呂は銭湯の様に男湯と女湯に分かれていた。
「やめてー!!」
男風呂の方から丈さんの悲鳴が聞こえる。
その訳は丈が下半身にタオルを巻いて風呂に入ってきたのだが、それが太一とヤマトのいたずら心に触れ、二人は丈が巻いたタオルを無理矢理取ろうとしていたのだ。
「まーた馬鹿やってる」

空が呆れたように言った。
「どうせ太一さんが何かやったんでしょう」
「そうね、馬鹿だもの、太一は」
空は思わず笑い合った。
「あーいい気持ち」
ミミは気持ち良そうに浸かっている。
何しろ久しぶりのお風呂だからだ。
雪山では源泉はあったが、入れなかったので、女子にとってはこうして湯船に入るのはまさに命の洗濯なのだろう。
「あーごくらくごくらく」
そんな女子たちの目の前に、ゴマモンが浮いていた。
「ああ！」
「なんであんたがこっちにいるの!?」
「ゴマモンはあっち！」
パルモンが蔦でゴマモンを男風呂へ飛ばす。
向こうからいい衝突音が聞こえた。
丈の声が聞こえたのでおそらく放り込まれたゴマモンが丈に当たったのだろう。
お風呂から上がり寝室へ向かうと、そこには人数分のベッドが用意されており、その内の一つに八幡とカマクラが眠っていた。
「あはは、ふかふかだ！」
タケルが飛び込む。
「本物のベッドだ！　ちゃんとシーツにノリも効いている！」
光子郎も嬉しそうにベッドを撫でた。
「なんだか林間学校みたいっ！」
「うん！」
「みたいじゃないよ……そもそも僕たちはサマーキャンプに来てたんだ。それがどういうわけかへぶっ」
「そうだよな、ただのキャンプに出かけるつもりでみんな家を出たんだよな」
「俺たちがこのファイル島に来てから今日で五日目。学校や町内会で

は、大騒ぎになっているだろうな・・・」
太一とヤマトが考え込んで言った。
「・・・・・・」
タケルの表情は見えないが、おそらく泣いているのだろう。
「パパ、ママ・・・・・」
だんだんと空気が重くなっていく・・・・
「・・・・・今日はもう寝ましょう。デジモンたちも疲れているし」
「そうだな」
空の意見に太一が頷く。
「おやすみ！」
次々と太一たちは横になった。
それから何時間経っただろうか？
皆が寝静まった頃、太一とアグモンがベッドから起きて、寝室を後にした。
多分トイレだろう・・・・
しかし、なかなか帰ってこない。
「いくらなんでもおかしい・・・デッカイやつだとしても遅すぎる」
大きい方だとしてもいくらなんでも遅すぎる。
不審に思った八幡がベッドから起き上がると、いきなり天井や壁が無くなった。
「な、何だ!?」
「おいでなすったか・・・おい、起きろ!!」
八幡とカマクラの予想通り、敵の襲撃だ。
カマクラが怒鳴ると、みんなはすぐに起きた。
ミミと空は、寝る前にきていたガウンは消滅してキャミソール姿になっていたから、悲鳴を上げる。
すると急にベッドが宙に浮かんで、勝手に動き始めた。
慌ててベッドの柵の部分に掴まる。
下を見下ろすと、禍々しいオーラを放つ、悪魔みたいなデジモンが、ニヤリと笑っていた。
「っ、あ、あいつは・・・!?」

「デビモンだ!!クソ、最悪だな・・・」

デビモン
レベル：成熟期　タイプ：堕天使型デジモン　属性：ウィルス
漆黒の衣に身を包んだ堕天使型デジモン。
元々は光り輝くエンジェモン系デジモンだったが、デジタルワールドの空間の歪に存在するダークエリアに堕ちたことにより堕天使となった。
その証である悪のマークが胸に大きく浮かんでいる。
狡猾で凶悪な性格だが、非常に優れた知性の持ち主でもある。深紅に輝く両眼に見つめられたものはマインドコントロールされ、デビモンに支配されてしまうと言われている。
必殺技の『デスクロウ』は伸縮自在の両腕を伸ばし、相手の体を貫き通す。

成熟期デジモンの中でも飼いならすことが困難なデジモンでもあるデビモン。
しかもこいつは野生のデビモンだ。
力も知能も高い。
すると、八幡とカマクラが乗ったベッドがガクンと急降下を始めた。
急にベッドが落ちたかと思えば、浮き上がる体。
気がつけば八幡は、デビモンの目の前にいた。
赤い瞳が怖くて固まっていると、首に強い衝撃。
そのままギリギリと絞められて、息が苦しくなる。
「がぁ・・・」
「八幡!!」
首が絞まって遠くなる。
カマクラが自分を呼ぶ声を遠くで聞こえる様な気がした。
「お前は何者だ?選ばれし子供たちではないな・・・だが、好都合だ・・・私の力になれそうな奴がいたとはなぁ・・・」

「おいてめぇ、八幡をすぐに離しな!!」
「なに、それは君次第だよ、ブラック・テイルモン。」
「何だと?」
「私と手を組まないか?」
「てめぇ、ふざけたことぬかしてんじゃねぇぞ」
「私は大いに真面目だ。私この黒い歯車で、この世界を覆いつくす。そして支配するのだ!!お前は魔獣型で、私は堕天使型。そういった点で違いはあるだろうが、同じウィルス種・・・お前も魔の端くれなら、この世界を支配したいと思うだろう?お前の力を私に貸せば、支配した世界の一角を担わせてやる。絶大な力が手に入るのだぞ!?」
先程、食堂でカマクラには皿の上の食事が見えず、反対に八幡たちに見えたのはおそらくデビモンが幻影を見せて、料理があるように見せ、反対にカマクラに見えなかったのはデビモンと同じ、ウィルス種だったからだろう。
デビモンと同じ、ウィルス種だったからこそ、カマクラにはデビモンの幻影が効かなかったのだ。
「断ったら?」
「おまえのパートナーを殺す」
ぎちり、とまた首を絞める力が強くなった。
デビモンは本気で八幡を殺すつもりの様だ。
「・・・る・・な・・・よ・・・」
「何だ?小僧?命乞いでもするか?」
「ふざ・・・ける・・・な・・・」
「何?」

ガシッと八幡は自分の首を絞めているデビモン手を掴む。
それに驚いたのか、デビモンの力が少し緩んだ。
「テメェ・・・と、カマクラを・・・い、しょに・・する、なよ・・・」
八幡がキッと睨むと、持っていたあのデジヴァイスが光りだした。
しかしこれは、進化の光ではなかった。
「ぐぁぁぁぁー!!」

その光を浴びると、デビモンは苦しんで八幡を放した。
そして、某大佐の様に両手で目を抑えていた。
落とされた先には先程まで八幡たちの乗っていたベッドに落とされたから、痛い思いをしなくてすんだ。
急に肺に入ってきた空気に、げほげほと蒸せてしまう。
「八幡!!」
「ゲホ、ゲホ・・・カマクラ・・・」
「この馬鹿野郎が!!無茶しやがって・・・」
文句を言いながらも、カマクラは八幡の背中をさする。
(同じウィルス種でも、テメェとカマクラじゃあ、天と地と差があるんだよ・・・いずれカマクラはテメェなんかよりもずっと強くなる・・・俺がカマクラをその高みに導く・・・!!)
「おのれ、小僧・・・小癪な真似を・・・!!」
デビモンが怒ったような声を出し、手を翳すとまた宙に浮かび上がり動きまわるベッド。
空中から見たファイル島は、積み木かパズルのようにバラバラになっていた。
バラバラになった島のパーツにはあの黒い歯車が組み込まれており、本来の歯車として働いていた。
そして八幡たちも、バラバラになってしまった。

２０話

デビモンの罠にはまり、子供たちはバラバラにされてしまった。
ついでにファイル島も同じようにバラバラとなる。
「そう言えば、このベッドどうやって飛んでいるんだ？なんかこう、デビモンが手で操るような素振りをしていたが・・・・」
八幡は自分が乗っているベッドが空を浮いている原理についてカマクラに訊ねる。
「さあな」
しかし、カマクラも知らなかった。
「そうか。それならなら仕方ないな・・・・だが、このままじゃ島か海に墜落するんじゃあねぇ!?」
徐々にベッドの高度が下がってきている。
どう見ても段々と近づいてくる浮島にこのベッドの動力源もわからない以上、このままでは衝突するのを待つしかない。
「やべぇよ!!この状況!!どうあがいても絶望だぞ!!」
「んなこたあ、分かっているっっぅのっ！」
「分かってんなら、なんかいい案は!?救いはないのか!?アーマー進化できないのか!?」
八幡は空を飛べるネフェルティモンに進化できないのかとカマクラに聞くが、
「どうも、このデジメンタルの調子が悪いみたいだ・・・・」
カマクラは首から下げているデジメンタルに視線を向ける。
「肝心な時に使えねぇアイテムだな!!」
八幡とカマクラがぎゃあぎゃあと慌てたり、騒いでいるがその間もベッドはどんどん浮島は近づいている。
そして、空飛ぶベッドは浮島・・・・ファイル島だった島の一部に墜落する。
八幡たちが落ちた場所は運良く川だった。
バシャーン!!

と、盛大に水しぶきをたてて落ちるベッド。
川の水しぶきを見事に被り、八幡もカマクラも濡れ雑巾と化してしまう。
「ぶはあっ！やべぇ、水飲んじまった」
「ヘップシュ!!」
水を浴びてクシャミが出る八幡。
「おい大丈夫か？」
「どうだろう？でも、このままベッドで流されている訳にもいかんな・・・」
「そうだな、下手すれば海まで流されて漂流するかもな」
「よし、降りてこの島を探してみよう！建物みたいなのも見えたからそれも気になるし」
「ああ、見えていたな。何か手掛かりがあるかもしれないし」
それから少し川下りをしていると、
「スパークリングサンダー！」
突然川下から大きな声と雷のようなバチバチという鋭い音が響いた。
声がした方を見ると、そこには赤い体に青い模様をした、ピンと立った耳と扇形の尻尾を持つデジモンが大網を引いている所だった。
そのデジモンは嬉しそうな声で陸に上がった沢山の魚を網に入れていく。

エレキモン
レベル：成長期　タイプ：哺乳類型　属性：データ
ツノモンの哺乳類的要素を残して進化した哺乳類型デジモン。
とても好奇心が旺盛でいたずら好きな性格はツノモンから引き継いでいる。
また、エレキモンは9本の尻尾を持っており、戦闘時には、孔雀の羽のように尻尾をひろげ敵を威嚇する。
必殺技は『スパークリングサンダー』。

「ちょろい、ちょろい！これだけありゃあ十分だ！待ってなよ、ベビーたち！もうすぐオレ様がたんまり餌持って帰っからなー！……ん？」
上機嫌で次々に魚を収穫したエレキモンは、数秒後に何食わぬ顔で川の上流からスライド式に流れてきた八幡とカマクラに気付きぽかんとした顔をしている。
「「……」」
「はーい」
「……」
八幡とエレキモンの目と目が合う。
無視はいけないので、とりあえず無難に挨拶をしておく。
「お、おお!!でっけぇ獲物だぁ!!」
「ちょっと待てぇい!!」
エレキモンは八幡とカマクラを食料だと思い込むが、カマクラが思わずツッコミを入れる。
それからベッドは川岸へと漂着する。
デビモンはあの屋敷にあった風呂も食べ物もすべては幻想だと言っていたが、このベッドだけは本物だったみたいで、八幡は枕とシーツはこのまま頂くことにした。
「ちょっと、中二っぽいが、文句も言ってられん」
八幡はベッドのシーツをマントの様にして、手には枕を持つ。
川岸についた八幡とカマクラをジッとエレキモンが見ていたが、やがて口を開く。
「なんだ？お前ら、ここらじゃ見ねぇ顔だな」
「まぁ、ここに来たのは初めてだからな」
「へぇ～……それで、何しに来たんだ？」
「デビモンの奴に飛ばされたんだよ」
「まぁ、それ以前にこの世界から出るために旅もどきみたいなことはしていたけどな」
「旅か、いいな……まぁ、オレは残念ながら、旅は出来ねぇんだがよぉ」
「ほう、なんで出来ないんだ？」
「オレはこの近くにある町でベビーたちの世話係をやってんだ。『は

じまりの町』っていうところなんだが聞いたことあるか？そうそう、この魚もベビーたちのメシさ。毎日、ベビーたちの世話で大変なんだぜ」
（（知らねぇ・・・））
八幡もカマクラもエレキモンの言う『はじまりの町』は知らなかった。
「カマクラ」
「なんだ？」
「さっき見えた建物ってのはその『はじまりの町』だと思うが、お前はどう思う？」
「あたしも同感だ。もしかしたら、他の面子もそこにいるかもしれないぞ」
「ああ、そうだな」
「そうだ、お前ら自由気ままな旅なんだろう？行く当てが決まってねぇなら町に来ねぇか？お前らいいヤツそうだしな、ちょいとベビーたちの世話を手伝ってほしいんだ。というよりこれだな」
そういいながら、エレキモンが示したのは大量の魚が入った山のようになっている網。
確かにこの量の魚を成長期のデジモン一体で運ぶのには大分時間がかかりそうだ。
「手伝ってくれたら、この魚も分けてやるよ」
「ああ、分かった」
八幡はカマクラに枕を持ってもらい、自身はエレキモンが捕まえた魚を半分持って、エレキモンの案内の下、はじまりの町へと向かった。
「なぁ、カマクラ」
「なんだ？」
「こいつが言う、ベビーたちって・・・」
「多分、幼年期デジモンたちだろうな」
エレキモンの言う『ベビーたち』に何となく想像がつく八幡とカマクラ。
「おっと、自己紹介がまだだったな。オレはエレキモンってんだ。よ

ろしくな！」
　エレキモンは思い出したかのように八幡とカマクラに自己紹介をする。
「俺は八幡。こっちは俺のパートナーのカマクラだ」
「かまくら？変わった名前のデジモンだな」
　エレキモンはテイルモンもブラックテイルモンも知らない様子。
「カマクラってのは、ネーミングセンス０のコイツがつけたニックネームだ。あたしはブラックテイルモンだ」
　ブラックテイルモンこと、カマクラはエレキモンにカマクラの由来を説明する。
　その後、はじまりの町を目指して、大網いっぱいに入った魚を引きずりながらエレキモンが先頭を歩く。
　人間一人がいるとはいえ、なかなかの重労働だ。
　あとエレキモンは、平気らしいが八幡は魚臭さに精神も鍛えられそうだ。
「ふぅー！大漁はいいが、やっぱ、川から町まで運ぶのがしんどいぜ！」
「俺はこの魚の生臭さが一番しんどい」
「ははは、そんなモン慣れだ、慣れ！」
　眩しい笑顔で汗を拭うエレキモンは完全に労働者の顔そのものである。
　社畜にはなりたくねぇ～・・・・
「そら、そうこう言っているうちにはじまりの町もすぐそこだぜ・・・・ん？」
　嬉しそうな顔で前方を示したエレキモン。
　だが、そう言った瞬間急に険しい表情をして耳を立てた。
　カマクラもピンっと耳を立てる。
「どうした？」
「ベビーたちが泣いている・・・・」
「あぁ、泣き声が聞こえる」
　そう言う二匹を見て私も耳をすませると、微かに林の向こうからた

くさんの泣き声のようなものが聞こえた。
言われなきゃ全く分からないほどのかすかな音量だった。
流石デジモン・・・身体能力は遥かに人間よりも上だ。
「何かあったのか!?」
「お、おい!!」
網を置いて急に走りだしたエレキモン。
八幡は慌ててエレキモンが捨てた網を拾いエレキモンを追いかける。
カマクラも枕を持ったまま走る。
木立の向こうに段々姿を現したファンシーな可愛らしい街並み。
ここがどうやら、はじまりの町のようだ。
「あれは……」
「えっ？」
カラフルな町の真ん中の小高い丘に見覚えのある影が二つあることに気付き、カマクラが呟いた。
はじまりの町の入り口に差し掛かったエレキモンがその影を見て、戦闘態勢を構えた。
「あいつら何モンだ？いや、そんなことよりベビーたちが危ないッ！」
「お、おい、エレキモン！」
「ちょっと・・・」
「てめえらッ！」
八幡とカマクラが止めるのも聞かず、声を荒げて突進するエレキモンが向かう先にいるのはここ数日の旅で見慣れた小さな影、タケルとパタモンだった。
いまにもタケルとパタモンに襲い掛かる勢いのエレキモン。
「エレキモンちょっと待って!!」
「スパークリングサンダー！」
八幡が制止を叫んだが時すでに遅し、荒げた声と同時にエレキモンは電撃をタケルとパタモンへ放った。
瞬時にエレキモンの攻撃に気がついたパタモンが咄嗟にタケルの前へ飛び出す。

「危ない、タケル！」
「うわぁぁぁぁー！」
　エレキモンの攻撃をパタモンはタケルを庇い転がりながら間一髪で避ける。
　突然の襲来にタケルとパタモンは驚きながらもエレキモンを鋭く睨んだ。
「何するんだ！――ってアレ？八幡さんにカマクラ」
「あっホントだ！」
　飛び出していったエレキモンを追ってようやく八幡とカマクラが辿り付くとエレキモンを挟んでお互いの姿を確認する。
　八幡とカマクラの姿を見て、タケルとパタモンはホッとした表情になる。
「武石、パタモン、無事だったか・・・他の皆は・・・どうやら一緒じゃないみたいだな」
「うん、僕たちだけだよ」
「おい、なんだァ？テメーら知り合いなのか？オレを無視すんなよ！」
「何言っているのさ!?いきなり攻撃なんて！危ないじゃないかぁ！」
「そりゃあ危ないさ！狙ってやったんだからなっ！」
「どうしてそんなことするの!?」
　エレキモンは当然のことだと踏ん反り返るのに対し、タケルもパタモンも怒ったままだ。
　そりゃあ、いきなり訳も分からず攻撃をされたのだからタケルとパタモンが怒るのも無理はない。
　一方、エレキモンにしてみれば、見慣れない生物（人間）とデジモンが、幼年期デジモンの近くに居て、その幼年期デジモンたちが泣いていたのだから、タケルとパタモンがベビーたちに害をなす輩に見えてもしかたがない。
「うちのベビーたちを、可愛がってくれたからさぁ！」
　エレキモンはキリッとカッコつけて言ってみせるが、タケルとパタモンには意味が通じなかったらしく目をぱちくりさせた。
「可愛がったけど、それのどこが悪いの？」

「ねぇ?」
タケルとパタモンは互いに首を傾げている。
「チッチッチッ、これだから困る。可愛がるって言葉にはなぁ、普通の可愛がるっていう意味の他に虐めるっていう意味もあるんだよ!」
(日本語って難しいねぇ〜・・・・)
エレキモンとタケル、パタモンのやり取りを見てそう思う八幡。
「全然反対の意味なのに?変なの・・・・」
「でも、僕たち虐めてなんかないよ?この子たちの世話をしていただけだよ!」
エレキモン、タケルとパタモンが言い合いを始める。
その間、八幡は近くにいた小さくて黒い赤ちゃんデジモン、ポタモンを触ってみる。
八幡が触っても赤ちゃんデジモンはぽけーっとしていて抵抗もしない。
ボタモンの手触りはポヨポヨと柔らかくて気持ちいい。
「カマクラ、覚えているか?お前にもこんな時代があったんだぞ」
「さあな、覚えていねぇ。それよりもあっちはどうするんだ?」
「ん?」
八幡がボタモンを触っている間もエレキモン、タケルとパタモンの言い合いは続いている。
タケルとパタモンはただエレキモンに誤解を解こうとしているだけなのだが、エレキモンも中々頑固でそれでは全く納得しないようだ。
「言っとくがな、そもそも誰もおめぇらにベビーたちの世話を頼んでねぇんだよ」
ふん、と鼻をならしながらエレキモンはタケルとパタモンを睨みつけた。
エレキモンの一々棘のある言い方に流石のタケルとパタモンもムッとした表情を露わにする。
「そんなこと言って、君はベビーたちのなんだよ!?」
「何って・・・その・・・保護者とか、世帯主、連帯保証人・・・」

「普通に保護者でいいだろう？」
カマクラが呆れたように言う。
「そ、そんなことどうだっていいじゃねーか！このガキ！」
「っ!?お前だってガキじゃないかぁ!?」
「うっくぅ～～ッ！あったまキタぁーッ！」
両者ともにキレて、とうとうただの悪口の投げ合いになってしまった。
先手を打って動いたエレキモンが叫ぶと共にジャンプしながら電撃を再び放つ。
パタモンがそれを避けたと思えばエレキモンに直接掴みかかる。
（エレキモンも少し気が立っているだけで悪い奴じゃないが、いくらなんでもリアルファイトはまずいだろう）
「痺れるぅう～っ！」
「はっはっはっはっは、オレに触ると危ないぜ！」
エレキモンに体表にはあらかじめ電流が流れていたみたいで、パタモンは直にそれに触れてしまい痺れる。
「両者!!待った!!ストップ!!」
見かねた八幡がエレキモンとパタモンとの間に割って声をあげた。